

目 次

奈良県斑鳩町梵天山古墳群測量調査報告	豊 島 直 博 ...	1
栃木県栃木市中根八幡遺跡第4次発掘調査概要報告	中根八幡遺跡学術発掘調査団 ...	7
【調査報告】 平成30年度三輪山祭祀遺物調査概要報告	三輪山祭祀遺物調査団 ...	25
紺紙金字経の材質分析 ～金泥・界線部分の科学分析及び真鍮泥写経の製作実験について～	西 来 友 花 ...	27
大和国宇陀郡の古代牧二題	吉 川 敏 子 ...	(1)
藤島武二「天平の面影」に見る箆篋について	平 出 実乃里 ...	(15)
近世密教法具の一断面 —金剛杵における細部形式の踏襲—	関 根 俊 一 ...	(27)

奈良県斑鳩町梵天山古墳群測量調査報告

豊 島 直 博

1. 調査の経緯

奈良大学文学部文化財学科は斑鳩町教育委員会と協力し、斑鳩地域における古墳の調査研究に取り組んでいる。これまで斑鳩大塚古墳、寺山古墳群、甲塚古墳、亀塚古墳、戸垣山古墳の測量調査、斑鳩大塚古墳、甲塚古墳の発掘調査を行い、斑鳩における首長系譜の解明に努めてきた。今年度は法隆寺の北西約500mに位置する梵天山古墳群の測量調査を行ったので、その成果を報告する。

梵天山古墳群は斑鳩町法隆寺字寺山に所在する。斑鳩町遺跡地図では直径約10mの円墳3基と報告されているが（斑鳩町教育委員会1995）、これまで調査されたことはない。2018年7月に土地所有者の法隆寺の許可を得て、斑鳩町教育委員会の平田政彦氏と現地を訪れた。現地は深い藪に覆われていたが、確かに古墳らしい高まりが3基確認できたため、測量調査を行って実態を解明することとした。

2. 周辺の古墳

奈良県生駒郡斑鳩町は奈良盆地の北西部に位置し、北から延びる矢田丘陵と、西へ流れる大和川に挟まれた地域である。古代の飛鳥から難波へ至る経路上に位置し、多くの寺院や宮殿が展開した歴史上重要な地域である。斑鳩町にはすでに消滅したものも含め、約70基の古墳が存在する（前園編1990）。以下では梵天山古墳群の周辺に存在する遺跡について概要を述べる。

梵天山古墳群（1）の北東約400mには仏塚古墳（3）がある。仏塚古墳は一辺約23mの方墳で、両袖式の横穴式石室をもつ。石室内から須恵器や亀甲形の陶棺片が出土しており、築造時期は後期末頃である（河上・関川1977）。

梵天山古墳群の北方には慶華池古墳群（2）がある。池の水際に2基の古墳が存在し、南東側の1号墳は直径約16mの円墳で、北東方向に開口する横穴式石室が部分的に残存する。北西側の2号墳は半壊しているが、直径約14mの円墳と推定される（大西2000）。

梵天山古墳群の西方にある別の尾根上に寺山古墳群（4）がある。2014～2015年に奈良大学が測量調査を行った。1号墳は直径23mの円墳か全長30mの前方後円墳、2号墳は20×15mの円墳、3号墳は19×13mの方墳、4号墳は16×14mの円墳と推定される。埋葬施設はいずれも竪穴系のものと推定され、中期後半～後期にかけての初期群集墳と考えられる（河村・高左右・豊島2015、間所・宮畑・豊島2016）。また、同じ丘陵の西側斜面には3基の横穴墓である寺山横穴墓群が存在する（小野1977）。



- 1 梵天山古墳群 2 慶華池古墳群 3 仏塚古墳 4 寺山古墳群 5 三井古墳群 6 春日古墳
 7 藤ノ木古墳 8 甲塚古墳 9 竜田御坊山古墳群 10 神代古墳 11 稲葉車瀬古墳群 12 戸垣山古墳
 13 亀塚古墳 14 斑鳩大塚古墳 15 瓦塚古墳群 16 駒塚古墳 17 調子丸古墳 18 酒ノ免遺跡

図1 周辺の古墳時代遺跡分布図 1:25,000

3. 調査の経過

今回の測量調査は2018年8月20日から8月30日まで、雨天を除く9日間で行った。測量基準点は古墳の南東に位置する平成18年度奈良県下街区点測量の際の街区三角点1001Aと補助点1点を使用し、墳丘上に設定した基準杭まで開放トラバースで移動した。さらに墳丘上に適宜、基準杭を設置し、平板で測量を行った。調査参加者は下記の通りである。

豊島直博（文学部教員）、南 貴匡（大学院生）、内田 徹、北畑良太、鈴木郁哉、田中秀弥（以上、文学部4回生）、漆原尚輝、古谷真人、細野 賢（以上、文学部3回生）、辛川あかり、志原 好、中川恋歌、江島耕平、島乃南緒（以上、文学部2回生）、松井成之（文学部聴講生）。

調査に当たっては、土地所有者である法隆寺、斑鳩町教育委員会平田政彦氏と荒木浩司氏の全面的な協力を賜った。また、大西貴夫氏、柴田拓也氏、中谷光里氏、松森多恵氏、柳澤 楓氏から現地で助言と援助を



1 梵天山古墳群遠景（東から）



2 3号墳墳頂付近（北から）



3 1号墳墳丘（南から）



4 測量の様子（3号墳）

図2 古墳の立地と調査の様子

賜った。記して感謝申し上げます。

4. 調査の成果

梵天山古墳群は法隆寺の北西の丘陵、通称梵天山の尾根上に位置し、3基の古墳が裾を接するように分布する。尾根の東側は法隆寺西門に至る切り通しとなっており、さらに別の古墳が存在した可能性もある。これまで古墳の号数が付されたことはなく、今回の調査では南東側を1号墳、南西側を2号墳、北側を3号墳と呼称する。

1号墳は墳丘の東端部が切り通しの崖によって削平されている。また、墳頂付近の南東側に不自然な凹みがあり、盗掘坑の可能性がある。墳丘の北側から東の切り通しにかけては等高線が整った円弧を描き、墳丘が良好に残存する可能性が高い。いっぽう、墳丘の南側では標高102.4m以上の等高線が乱れており、盗掘に伴う削平が想定される。102.2mの等高線が円弧を描き、この付近を墳端とすれば、直径15m、高さ1.8m程度の円墳と考えられる。

2号墳は墳丘上に盗掘坑などは認められない。墳丘を取り囲むように樹木があり、等高線に乱れがあるが、標高103.0mの等高線が円弧を描き、円墳と考えられる。102.6mの等高線が1号墳と接しており、その付近を墳端と考えれば、直径約12mの円墳に復元できる。墳丘の高さは約1mである。

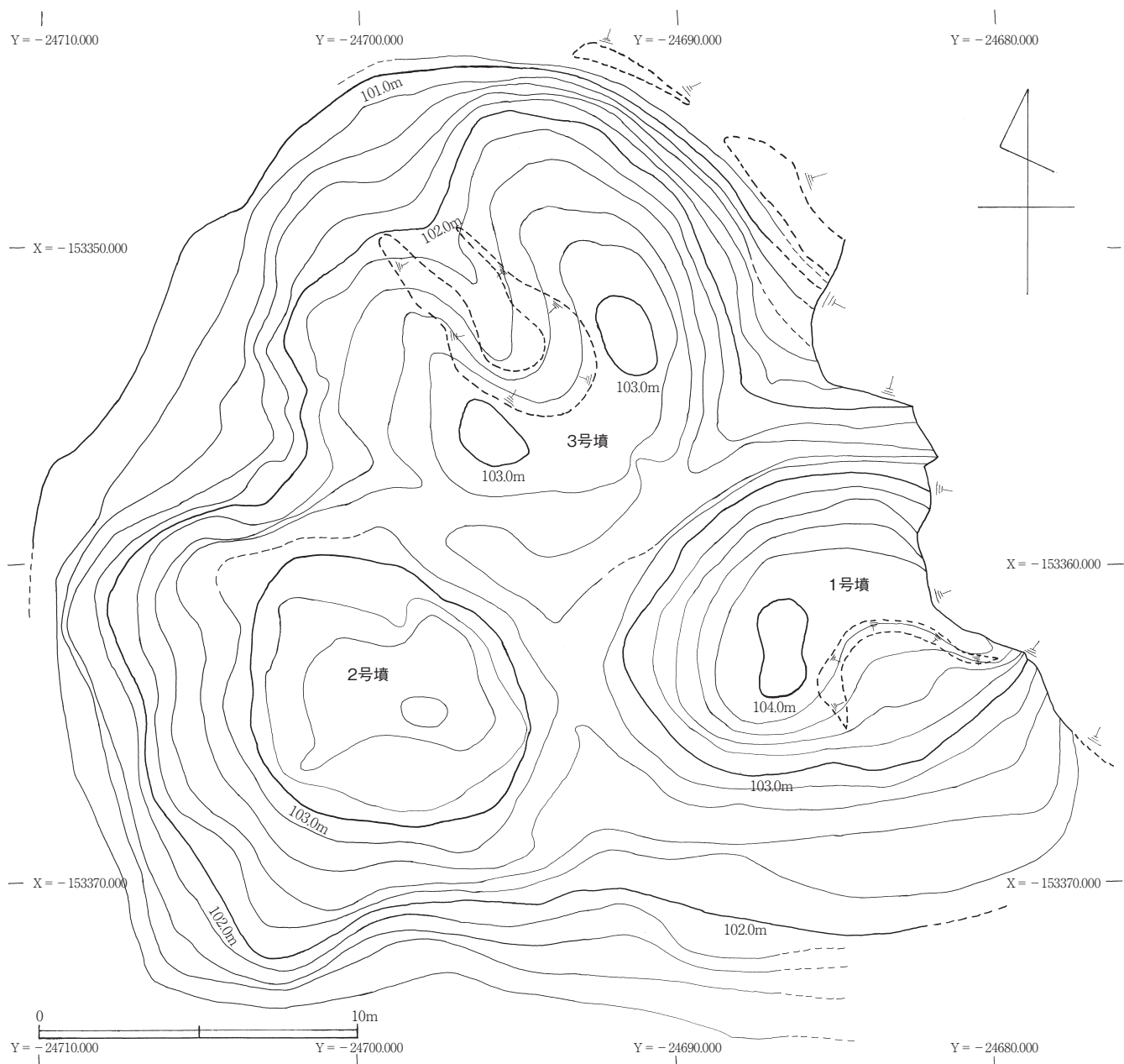


図3 梵天山古墳群墳丘測量図 1:200

3号墳は墳頂付近から北西方向に大きな陥没が認められ、盗掘坑と考えられる。墳丘北側は標高101.0m付近まで円弧を描く急傾斜が続き、墳端が把握しがたい。いっぽう、1号墳と2号墳との境界では、101.6mの等高線まで谷状の地形を呈する。それを墳端と考えれば、直径15m程度の円墳と推定できる。墳丘の高さは約1.4mである。

なお、いずれも古墳でも石室の石材等は確認できなかった。表採した遺物はない。

5. まとめ

最後に、今回の調査成果についてまとめたい。

梵天山古墳群は3基の円墳で構成される群集墳である。1号墳は直径15m、2号墳は直径12m、3号墳は

直径15mと推定される。3基の古墳が墳端を接するように築造された点に特徴がある。また、いずれの古墳も墳丘が低く、1号墳と3号墳では盗掘坑付近で石室石材が認められないことから、竪穴系の埋葬施設をもつ初期群集墳と考えられる。西隣の尾根に位置する寺山古墳群と様相が似ている。

いっぽう、北方の慶華池古墳群は1号墳が横穴式石室を埋葬施設とする。法隆寺の近辺では、まず尾根状に小規模な初期群集墳が展開し、その後、平地部に後期群集墳が築かれることが明らかになった。

梵天山古墳群の付近には、さらに未調査の古墳が存在する。今後、それらについても測量調査を継続する予定である。

参考文献

- 斑鳩町教育委員会 1995『斑鳩町遺跡地図』斑鳩町教育委員会
- 大西貴夫 2000「奈良県斑鳩町慶華池古墳群調査報告書」『奈良県遺跡調査概報』1999年度 奈良県教育委員会
- 小野久隆 1977「奈良、斑鳩町龍田寺山横穴について」『陵』3, 4 合併号 仏教大学考古学研究会
- 河上邦彦・関川尚功 1977『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会
- 河村万里・高左右裕・豊島直博 2015「奈良県斑鳩町寺山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第33集 奈良大学文学部文化財学科
- 前園実知雄編 1990『斑鳩町の古墳』斑鳩町教育委員会
- 間所克仁・宮畑勇希・豊島直博 2016「奈良県斑鳩町寺山3・4号墳測量調査報告」『文化財学報』第34集 奈良大学文学部文化財学科

挿図出典

図1 豊島作成 図2 豊島作成 図3 古谷真人製図

栃木県栃木市中根八幡遺跡第4次発掘調査概要報告

中根八幡遺跡学術発掘調査団

1. 2018年度調査の概要

中根八幡遺跡は、栃木市南部（旧藤岡町中根）の渡良瀬遊水地（旧赤間沼）に面した台地縁辺部に立地する縄文時代前期～晩期、弥生時代、中世～近世の複合遺跡である。これまで環状盛土遺構を中心に調査を進めてきたが、前期・中期の土器も一定数出土している。また、環状盛土中央には中世～近世に寺院が営まれたとされており、これに関わると思われる遺構・遺物も確認している。これまでに年次報告（中根八幡遺跡学術発掘調査団2016～2018）と3年間の成果と課題をまとめた（中村・小林ほか2018）ほか、パブリック・アーケオロジーとして実施した音楽活動を報告した（早川・中村2019）。

今年度の調査もこれまでと同様に、奈良大学と國學院大學栃木短期大学の教員・学生による調査団を結成し、栃木市教育委員会の後援と、地元中根地区の協力のもと、学術発掘調査を実施することとした。

今年度の調査では、まずA区は昨年度同様掘り下げを進めた。特に斜面下方部を中心に調査を行い、骨片集中部などを確認した。C区では、昨年度調査区（中央窪地部分）から東側の高まり部分にかけて、5箇所の特レンチを設けて調査を開始した。なお、B区は火山灰分析のための土層観察と土壌サンプリングのみを行った。

昨年度に引き続き現地説明会では多数の方々にご来場いただいたほか、展示やワークショップ等で遺跡の活用を図った。サポートをいただいた方々に改めて謝意を表したい。特に、塚本師也氏・早田勉氏からは現場でのご教示のほか、本稿に所見を寄せて頂いた。

（小林・中村）

2. 調査日誌

(1) 発掘調査

本年度調査においては調査団の学生・院生・卒業生が分担してFacebookページで随時調査状況を発信した。以下はそこから抜粋して編集した。

8月31日（金）曇→雨 國學院大學栃木短期大学より機材搬入。

9月1日（土）曇 本日より本格調査を開始した。國學院大學栃木短期大学日本史フィールドの学生・教員が現地に入り、A区周辺の草刈り、特レンチの復元し、その後昨年度のC区調査区を復元した。

9月2日（日）曇 午前中は中根八幡神社の池掃除・草刈りで集まった中根地区の方々に遺跡と出土物の説明を行った。A区は掘り下げを開始した。C区では新たに特レンチを3箇所設定し、掘り下げを開始した。午後には奈良大学の先発隊が合流した。

9月3日（月）晴 奈良大学の後発隊が合流した。A区は掘り下げを続行。C区はさらに1箇所トレンチを設定し、掘り下げを開始した。午後からは平板を使用し、池の東側の地形測量を開始した。

9月4日（火）曇→雨 作業続行。國學院大學栃木短期大学子ども教育フィールドの学生が体験発掘に参加した。台風接近のため14時で終了。

9月5日（水）晴 A区から耳飾りが出土した。昨年度調査したB区の壁面・床面を清掃した。

9月6日（木）晴 午前中は國學院大學栃木短期大学の人間教育学科と栃木市立小野寺南小学校が13年続けてきた表現活動交流会に中根八幡の土器を持ちこみ、全校児童を対象に「縄文土器を使って音楽を作ろう」と題する授業を行った。C区から打製石斧が出土した。

9月7日（金）晴 C区は写真撮影と平面図の作成を開始した。11時より栃木市のコミュニティFMであるFMくらら857の栃木市提供番組に中村と短大生、栃木市教育委員会文化課の高見氏が出演した。

9月8日（土）晴 午前中は、午後からの現地説明会に向けて遺構の精査やトレンチ周りの清掃、展示する遺物の準備等を行った。現地説明会には70名近い方々の参加があった。C区は埋め戻しを開始した。

9月9日（日）晴 宿舍の清掃。早田勉氏による土層観察とサンプリング。A区は土層断面図作成後、写真撮影を行った。撮影前のトレンチ精査時に小形の耳飾りが出土した。測量班は作業継続し、図面を完成させる。調査終了後、トレンチごとに埋め戻し、機材を短大に撤収して解散した。

（2）整理作業

整理作業は、國學院大學栃木短期大学がA区、奈良大学がC区の出土品を担当し作業を進めた。國學院大學栃木短期大学では、後期授業開始とともに毎週火曜日の考古学演習・考古学フィールドワークを利用して整理作業を進めた。奈良大学では毎週月曜・水曜に考古学実習室において整理作業を行った。

（高垣・新里・荒木・吉村・唐川・志原）

3. A区における調査の概要

（1）調査概要（第2図）

昨年度までの調査で、A1～A3グリッドはローム層まで掘削していたが、本年度はA4～A6グリッドについても北側50cm分のサブトレンチを設けてローム層まで掘り下げること为目标とした。併行して、作業空間と視界の確保のため南側50cm分および、A4～A6はさらに南側1m分（A4b～A6bグリッド）を掘り下げた。いずれも10cmの人工層位で掘り下げた（標高22.2mを基準に、例えば120cm～130cmの箇所から出土したものを-120Lと表記する）。A7グリッドについては、未掘削部分を層位ごとに掘り下げたが、一部A6グリッドにかかる部分の遺物もA7として記録したものがある。土層の堆積状況については昨年度の認識と変化はないが、A4～A6グリッドの-150L付近で骨片がまとまっていたほか、この周囲の4層は複雑で、細分される可能性がある。さらに掘り下げた段階で判断したい。また、A6グリッドの4層と5層の間に3～5cmの厚さの黒色土層がみられる。A1東壁で同位体分析、A4北壁で火山灰分析のための土壌をサンプリングした。同位体分析については東京大学総合研究博物館に委託しており、別途報告予定である。

骨片については、阿部常樹氏（國學院大學兼任講師）に同定を依頼した。上記を含め、各層から出土している。小破片ばかりで同定可能なものは極めて限られるが、イノシシのほかは、シカ角の可能性のある1点がみられるのみである。被熱しているものも多い。

(2) 出土遺物の概要

第3～5図には各グリッド・人工層位ごとに、時期幅を考慮して主要な土器を掲載した。精製土器では加曾利B1式～B2式、粗製土器では加曾利B式～安行式が大半を占めることは従来の知見通りであり、今回掘削範囲には晩期のものは含まれない。8・54・55は前期中葉の黒浜式で、他に未報告だが2017年度調査で数片が出土している。139は中期初頭の五領ヶ台式の底部破片の可能性がある。中期前葉～中葉では、阿玉台I b式～Ⅲ式のほか、在地化した勝坂式と考えられる56・151がある。加曾利B式では比較的大形の斜線文系(30・91・103・144など)が目立つ。図示していないが、薄手の条線文の胴部小破片は多数出土している。159・160は耳飾である。石器は石鏃のほか、石錘4点(161～164)の出土が目立っている。石錘はA5-150L・170Lに集中しており、164は厳密な位置は不明だが、本年度の掘削範囲からみると、ほぼ同位置と推定される。(中村)

4. C区における調査の概要

(1) 調査の概要

中根八幡神社の南東に広がる田畑は、周辺よりも低くなっており、ここが環状盛土遺構の中央窪地部分にあたる。現在、この窪地はほぼ中央に中世の如来像が安置された観音堂が所在しており、中世から近世にかけて青蓮寺があったとされる。そのため、この周辺一帯には少量ながら中近世の遺物も確認でき、中世の削平を受けていることが予想される。昨年度は現在クリ林内にあたる中央窪地部分に2m四方のトレンチを設定したが、今年度はそこから東側の盛土方向へ調査区を設定した。調査区は、1mごとにグリッド番号を設定し、2m幅でトレンチを設定した。トレンチ間は、2mの間隔をあげ、5つのトレンチを設定した(第6図-1)。それぞれ、西からCa16・17、Ca20・21、Ca24・25、Ca28・29、Ca32・33の各地点である。掘り下げにあたり、10cmごとの人工層位を設定して作業にあたった。以下、各トレンチの概要を述べる。

まず窪地に近いCa16・17、Ca20・21地点(地点第6図-2・3)では、表土(1層)～3層はしまりの悪い砂質土で土器を若干含むがクリ林栽培の層と考えられる。土器は含まれるが少量で小片ばかりである。両トレンチともにこれより下層は掘り下げていない。

Ca24・25地点(第6図-4)は、8・10層上面まで下げた後、北側にサブトレンチを設定した。表土(1層)・2層はクリ林栽培のための層と考えられ、3・4層では炭化したクリの塊がトレンチ内を南北に横断するように傾斜しながら伸びており、この層もクリ栽培に関わるものだと考えられる。5層は土器を多量に含んでいるがロームブロックは混じらない。6層からロームブロックが混じり始めるが、8層のブロックは6層からのロームが混じったものである。9層は11層を掘り込んである遺構で、埋土は4～6層に類似するので、中近世の可能性が高い。この9層の土坑上面から打製石斧が出土した。6層からロームブロックを含み始めているが、ソフトロームは中近世の削平によって確認できず、11層から黄褐色のハードローム層となり、土器は含まなくなるがスコリアを含む。また、北壁にてサンプリングを行った。サンプリングした層は、2層～9層で計17個(火山灰考古学研究所による)と12個(調査団による)のサンプルを採取した。サンプリング結果については別途記載する。

Ca28・29地点(第6図-5)は1～4層は後世の掘削による堆積にあたり、5層からロームブロックが混じりはじめ、9層、10層でソフトローム層を確認した。10層が4層によって大きく削平されているが西から東へと傾斜するローム層が続いていたと思われる。8層は7層からの落ち込み層と考えられる。4層は重機

による掘削の可能性がある、クリ林開墾に関係する削平の可能性がある。

Ca32・33地点（第6図-6）はクリの根による攪乱が激しく、根が少ない南側にトレンチを半掘したサブトレンチを設定し掘り下げていった。2層から4層はほぼ同一で、根の攪乱のため分層できるように見える。しかし、出土する土器の様相が他のトレンチと大きく異なっており、下方のトレンチ群とは違い削平をあまり受けていないと考えられる。Ca28・29地点から続くソフトローム層が5層下面で露出しており、黒色のプランを東西に確認した。遺構の可能性も考えられる。出土した土器は中期から晩期までで、他のトレンチと比較しても残存率が高い。

以上、各所でローム層を確認したが、窪地部分については中世以降における削平が認められ、現時点で詳細は不明である（第6図-1）。しかし、盛土付近にあたるCa32・33地点では中世の削平を受けておらず、遺構が残存している可能性が高い。
(小林・萱原・桐部・吉村・中山)

(2) 出土遺物の概要（第7図）

C区から出土した遺物は、縄文時代前期から弥生時代前期の土器、石器（打製石斧、石鏃、剥片など）、土製品（土製円盤、有溝土錘、土製耳飾）である。以下では、土器と土製品の概要を述べる。なお、本概要において、遺物はCa32・33地点（第7図-30のみCa28・29地点出土）のものに限定している。

縄文時代前期の土器は、黒浜式と諸磯a式がある。1は、2段LRの原体を横位に回転施文した単節斜縄文を施す。胎土に繊維を含む。黒浜式である。2は、2段LRの原体を斜位に施文した条の縦走する単節縄文を地文とする。細い半截竹管の内側による平行沈線で、器面を縦位に区画し、その間に弧状のモチーフを配したと思われる。諸磯a式と思われる。

縄文時代中期の土器は、阿玉台Ib式、勝坂式系土器、加曽利EⅠ式、大木8b式期がある。3は、口縁に添って、半截竹管の内側を押し引きした複列の角押文を施す。阿玉台Ⅱ式である。4は、口縁部の施文域に単列の角押文を斜位に密接して施文する。阿玉台Ib式である。5は、口縁部にキザミを加えた隆帯を巡らす。以下縦方向の単列の角押文がみられる。阿玉台Ib式である。6は、キザミを加えた隆帯がみられる中期中葉の土器である。在地の勝坂式系土器と思われる。7は、隆帯上にキザミが加えられ、三叉文の一部と思われるキザミがみられる。勝坂式系の土器と思われる。8は、間を沈線でなぞった2条の隆帯を口縁に巡らす。小波状口縁の波頂部を起点とする。波頂部から沈線を沿わせた隆帯が垂下する。加曽利EⅠ式後半の土器である。9は、栃木・茨城から福島にかけて分布する大木8b式期（加曽利EⅠ式後半）の中空突起の破片である。

縄文時代後晩期は、称名寺式、堀之内1・2式、加曽利B2式、曾谷式、北陸系土器がある。10～12は称名寺式であり、10は区画内に列点を配す称名寺Ⅱ式の体部破片で、区画は帯状とはなっていない。11は、口縁が内側に短く屈折し、帯状区画文内部に単節斜縄文を施す。12は、屈折する帯状区画文内部に列点を配す。13は、櫛歯状工具による縦位の条線文を施す中期後半から後期前葉にかけての土器と思われる。14は、縄文地に縦方向の沈線を密に配す堀之内1式の新しい段階の体部破片である。15は、頸部が緩やかに括れ、体部が張る器形の土器で、括れ部より上を欠失している。括れ部には「8」の字状の貼付文を起点に横位の沈線を巡らす。貼付文下には、「U」字状の沈線文を配し、そこから縦方向に沈線を垂下させたと思われる。堀之内1式と思われる。16は、縦位の弧線・押捺文を基点とし口縁部に1条の沈線を巡らせたと思われる。基点から縦方向の沈線を垂下させる。堀之内1式の古い段階と思われる。17は、三角形の磨消縄文を配す堀之内2式の体部破片である。18は、僅かに肥厚した口縁部下に2条の沈線を巡らしている。以下は2段LRの

原体を横位に回転施文した単節斜縄文とする。加曽利B3式～曾谷式の鉢形土器と思われる。19は、横位の帯状の彩杉文がみられる加曽利B2式の体部破片である。20は、口縁部が内湾し2条の沈線と2段LRの原体を横位に回転施文した単節斜縄文とする。加曽利B2式である。21は、口縁部内面に浅い凹線を巡らす。外面には横位の沈線を、乱雑に、密に配す。加曽利B3式と思われる。22は、口縁部内面に1条の沈線を巡らし、外面には粘土紐を巡らして、押捺を加える。加曽利B式の粗製土器（紐線文土器）である。23は、肥厚した口縁にキザミを加え、その直下に沈線を施す。体部には細い沈線で斜格子目文を配したようである。後期後半の粗製土器と思われる。24は、口縁に山形の小突起を付け、外面に斜位の沈線を、雑に、密に配す。加曽利B3式～曾谷式と思われる。25は、口縁にキザミを加えた隆帯を巡らす。波頂部から狭い磨消縄文を下方に放射状に配している。地文の縄文は2段LRである。曾谷式かと思われる。26は、注口土器の注口部の破片である。表面を丁寧に磨いている。後期中葉以前のものであると思われる。27は、壺の頸部の破片であり、沈線間に列点がみられる。晩期の北陸系と思われる。

30は、弥生時代前期末の沖Ⅱ式に併行する土器である。短く外反する口縁部をもち、端部側と頸部側にやや太めの沈線を有する。内外面に丁寧に磨きを施す。Ca28・29地点出土である。

土製品は、土製円盤と有溝土錘がある。28は、加曽利EⅡ式の胴部磨消懸垂文の部分を用いた土製円盤である。縄文は2段RLの縦回転と思われる。29の有溝土錘は、短軸、長軸上に溝を配す。溝部分の磨滅が認められず、あまり使用していない。
(塚本・小林・新里・桐部・佐々木)

5. 栃木市中根八幡遺跡におけるテフラ分析（第8図）

(1) B区のテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・屈折率測定）の概要

テフラ検出分析では、試料32（27層）で無色透明のバブル型、試料10（7層）で無色透明の中間型ガラスを少量検出した。また、試料4（2層）で、淡灰色、淡褐色、褐色、白色、灰白色のスポンジ状軽石型ガラスを少量認めることができた。岩相から、淡灰色、淡褐色、褐色のものは浅間Bテフラ（As-B, 1108年）、白色のものは榛名渋川二ッ岳テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、そして灰白色の軽石は浅間C軽石（As-C, 3世紀後半）または浅間A軽石（As-A, 1783年）に由来すると考えられる。

また、テフラ組成分析では、赤土（いわゆるローム層）の上部に認められるような、火山ガラスや重鉱物組成の変化は認められず、多少の変動はあるものの、似たような火山ガラス、軽鉱物、重鉱物の含有率、火山ガラスの形態別組成、そして重鉱物組成の傾向が認められた。いずれの試料でも火山ガラスでは中間型ガラスが優勢で、軽鉱物が比較的多く含まれている。また、重鉱物には斜方輝石や単斜輝石が多い。さらに、試料18に含まれる火山ガラス（35粒子）を対象に屈折率測定を行った結果、 $n: 1.498-1.506$ であった。これらのことは、今回の分析対象が浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1, 約2万年前）や浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.5～1.65万年前）などを噴出した浅間火山軽石流期以降の堆積物であることを示す。比較的腐植質であることを加えると、少なくとも明色の27層をのぞく土層が完新世堆積物であることが示唆される。

群馬県内では、完新世に形成された腐植質の黒土（黒ボク土）の中位に、縄文時代中期頃に自然の明色土層の存在が知られており、淡色黒ボク土と呼ばれている。少なくとも榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）より下位のB区西壁の7層を中心とした比較的明色の土層は、この淡色黒ボク土とは層位的に異なる。土層の基底が不明瞭なことについて、縄文時代における周辺の開発に伴って形成された可能性など検討する余地があるものの、今回の分析結果は、本地点において盛土が存在すると推定されていることとさほど

矛盾しないように思われる。

(2) Ca24・25グリッドのテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析）の概要

テフラ検出分析で検出された火山ガラスのうち、試料3（3層）と試料1（2層）のいずれでも認められた淡灰色や淡褐色のスポンジ状軽石型ガラス、また試料3（3層）で認められた褐色のスポンジ状軽石型ガラスは、その特徴から、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）に由来すると考えられる。3層と2層はAs-Bの一次堆積層ではない土層であることから、これらの土層がAs-B降灰後に形成されたと考えられる。

なお、これらの試料に含まれる無色透明のバブル型ガラスは、岩相から、始良Tn火山灰（AT, 約2.8～3万年前）に由来すると考えられる。さらに、中間型ガラスや繊維束状軽石型ガラスの多くは、やはり岩相から浅間火山軽石流期のテフラに由来すると考えられる。

今後、より下位の土層のテフラ分析を行う必要があるが、これまでに実施された周辺地点の分析結果をみると、本地点において認められた腐植質土層より上位の明色の土層の層位に関しては、As-Bより下位の可能性が十分にある。引き続き、本地点の残りの試料についても分析を実施して、明色の土層の層位を確かめる必要がある。

(3) Ca32・33グリッドのテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析）の概要

テフラ検出分析で検出された火山ガラスのうち、試料5（4層）に含まれる淡褐色バブル型ガラスは薄手で、その色調も合わせると、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約7,300年前）に由来する可能性が高い。

また、この試料に含まれる無色透明のバブル型ガラスは、岩相から、始良Tn火山灰（AT, 約2.8～3万年前）に由来すると考えられる。さらに、中間型ガラスや繊維束状軽石型ガラスの多くは、やはり岩相から浅間火山軽石流期のテフラに由来すると考えられる。これらATや浅間火山軽石流期のテフラに由来すると思われるテフラ粒子は、今回の分析対象のうち最下位の試料9（5層）にも比較的多く含まれている。さらに、

試料1（3層）にごくわずかに含まれる淡灰色や淡褐色のスポンジ状軽石型ガラスは、その特徴から、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）に由来すると考えられる。

以上のことから、今回の分析対象となった試料9（5層）以上の土層は、少なくともAs-Ok1より上位にあることがわかる。しかも、5層が腐植質であることを合わせると完新世堆積物の可能性が高い。また、試料5が採取された4層上部は鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）降灰後、また試料1が採取された3層の上部は浅間Bテフラ（As-B）降灰後に形成された土層の可能性が高い。このうち、3層の上部については、検出された浅間Bテフラ（As-B）が非常に微量なことや、本遺跡周辺での降灰が知られている榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA）がほとんど認められないことから、比較的最近の攪乱の影響を受けて浅間Bテフラ（As-B）が混入しているのかも知れない。

（早田）

6. まとめ

今年度の調査成果について要点をまとめておく。

まず、A区については、A1～A7グリッド通しての土層堆積を確認すべく、A4～A6グリッドを中心に掘り下げたが、ローム層まで到達できなかった。そのため、十分な層位的検討はできていないが、A4～A6

グリッドの-150L付近で焼骨を中心とする骨片が集中する箇所を検出し、その周囲が複雑な土層堆積を呈していることが明らかになった。A1グリッドで8層とした箇所や、2次調査で確認したA7グリッド底面で検出したピットなどを含め、遺構の有無をはじめとする層位的再検討が今後の課題である。

B区は、新たな掘り下げは行っていないが、火山灰分析により、ローム層（27層）、近年の攪乱層（1・2層）と、縄文時代の掘り込み・包含層の区分を裏付けることができた。

C区についてである。昨年度、中央窪地のほぼ中央にC区としてトレンチを設定し、ローム層まで土層を確認したが、上層から中層まで中世における削平や攪乱を受けていることが確認され、さらにローム層自体も削平されている可能性があり、ローム層のどの位置が上面として検出されたかが不明であった。地表面での観察では、石造物などがある中央窪地中央付近から東側のクリ林と東側に接する畑地をみると、緩やかに傾斜が上がっており、クリ林の東端側と東側に接する畑地の付近に盛土が残存していると推測された。そこで、今回は昨年度の地点から東側のクリ林中にトレンチを5箇所設定して中央窪地から盛土に向かう堆積状況の確認を行った。その結果は、第6図-1に整理した。盛土付近と思われるCa24・25、Ca28・29、Ca32・33の3地点のトレンチでは、Ca24・25、Ca28・29地点のトレンチにおいて、ローム層にまでいたる中世以降の削平や攪乱を確認し、Ca32・33地点のトレンチにおいてはローム層のほぼ上面で縄文時代中期の遺構を確認した。地表面での想定通り、第3次調査のC地区トレンチからCa32・33地点のトレンチにかけて東側に向けてローム層は傾斜が上がっていることが判明した。ただし、Ca24・25、Ca28・29地点のトレンチでの中世以降の削平や攪乱が中央窪地にまで達しているかどうかは不明であり、今回の調査において、再度第3次調査のC地区トレンチを検討したところ、ローム層上面にまで中世以降の削平や攪乱が達しているかどうかとも不確定であると判断するに至った。中世以降の削平や攪乱が、どの程度環状盛土が形成されている時代の中央窪地中央付近から盛土にいたる地形に影響しているかどうかは、今後地点をかえて確認する必要がある。最も東側の盛土付近頂上付近と考えられたCa32・33地点のトレンチでは、ローム層上面において縄文時代中期の遺構を確認したことからすれば、場合によっては中世以降、特にクリ林の造成時に盛土の大部分が削平された可能性もある。クリ林中に大量の縄文時代後晩期の土器などが散布する状況は、そうした可能性を示しているのであろうか。

なお、Ca32・33地点のトレンチで縄文時代中期の遺構を検出したが、土器は縄文時代前期段階から認められ、さらに弥生時代前期の土器もある。今後、中根八幡遺跡の遺跡形成過程を考える上でC区での調査検討は重要であると考ええる。

（小林・中村）

付記

本調査は國學院大學栃木短期大学学長を主体者、調査団共同代表の小林・中村を担当者として、平成30年5月30日付で栃木県教育委員会教育長宛（栃木市教育委員会経由）で文化財保護法第92条に基づく発掘の届出を提出し、6月11日付で県教育長より実施許可の通知を得た。出土品については9月12日付で栃木警察署長へ埋蔵物発見届、県教育長宛に埋蔵文化財保管証を提出し、11月6日付で県教育長より文化財認定を受けた。また、前年度に引き続き「とちぎの古代遺産新発見PartⅢ」として栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業の助成を得た。

調査・整理・成果公開参加者（学年は2019年3月当時）

奈良大学：小林青樹（教授） 萱原朋奈 新里遥（大学院修士2年） 桐部夏帆（学部4年） 佐々木仁志（学部3年） 荒木清花

志原好 辛川あかり 中山雅士 吉村璃来（学部2年）

國學院大學栃木短期大学：荒井泰三郎 石井俊祐 岩崎風那 太田阿寿 小野梨奈 笠倉美歩 方波見睦美 金子隼斗 小澤歩実 小菅拓朗 小泊茅日 穴戸梢 佐藤太一 戸部美菜 萩原舞 橋本和奏 武藤裕亮（日本文化学科2年） 嶋崎結 塩嶋匠 古澤美里 益子将太郎（日本文化学科1年） 江俣結香 小野澤春乃 塩入秀華 中田帆南 中山奈美 沼澤佑貴 渡邊まみ（人間教育学科2年） 内山諒祐（人間教育学科1年） 町田吉博（科目等履修生） 酒寄雅志（教授・日本文化学科長） 後藤正人（教授・人間教育学科長） 早川富美子（教授） 寺崎宣昭（教授） 中村耕作（准教授） 石坂昌圀（事務長） 岸美知子（助手） 柿沼里恵子（助手） 高垣美菜子（学芸員） 伊沢加奈子 飛田彩哉子 菅田孝健 大谷舞菜 長谷川愛 依田健太 齊藤義人（卒業生）

山梨県教育委員会：岩永祐貴 **早稲田大学：**中安真輝 **小山市教育委員会：**安良岡伸之 **鹿児島県埋蔵文化財センター：**郷原麻鈴

協力者

中根地区 中根八幡神社 栃木市 栃木市教育委員会 栃木市立小野寺南小学校 栃木県 栃木県教育委員会 栃木ケーブルテレビ 毎日新聞社 下野新聞社 FMくらら857

大島邦彦 坂本勝雄 熊倉教裕 石塚孝市 田村正昭 小島正明 福富林 谷内英樹 大出光一 栗田寿樹 尾島忠信 高見哲士 小澤美和子 石川由利子 猪瀬亜沙美 秋山隆雄 朝倉一貴 岩淵一夫 石上則子 岡山亮子 江原英 江原美奈子 大島亜里彩 大島孝博 小川勝和 小曾根葉月 小野澤美明子 加藤大二郎 後藤佳一 小林美貴 斉藤恒夫 柴田祐希 須田英一 須藤和佳 芹沢清八 曾我真実子 大工原豊 高村敏則 武川夏樹 田中和之 塚本師也 坪能由紀子 鳥海朱理 中島寿呂子 能登健 初山孝行 羽生田麻子 福富善明 福永将大 文挾健太郎

分析委託

火山灰分析：火山灰考古学研究所（早田勉） **土壌同位体分析：**東京大学総合研究博物館（吉田邦夫・宮内信雄・堀内晶子・松崎浩之） **動物骨同定：**阿部常樹（國學院大學兼任講師）

本概要報告執筆者

小林青樹・中村耕作・早田勉・塚本師也・高垣美菜子・萱原朋奈・新里遥・桐部夏帆・佐々木仁志・荒木清花・志原好・辛川あかり・中山雅士・吉村璃来

引用文献

中根八幡遺跡学術発掘調査団 2016～2018 「栃木県栃木市中根八幡遺跡第1～3次発掘調査概要報告」『文化財学報』第34集～第36集

中村耕作・小林青樹・福永将大・岩永祐貴・新里遥・萱原朋奈 2018 「栃木県栃木市中根八幡遺跡における環状盛土遺構の調査－2015年度～2017年度の調査概要－」『日本考古学』第46号

早川富美子・中村耕作 2019 「発掘した縄文土器をもとにした音楽活動の試み－クロスカリキュラムの視点から－」『國學院大學栃木短期大学紀要』第53号

上記概要報告のほか下記において成果の一部を公表した

〔研究発表・報告会〕

福永将大・岩永祐貴・新里遥・萱原朋奈・中村耕作・小林青樹 2018.4 「環状盛土遺構の形成プロセス－栃木市中根八幡遺跡第3次発掘調査の成果－」考古学研究会第64回総会・研究集会（岡山大学）

中村耕作・小林青樹・福永将大・早田勉・岩永祐貴・新里遥・萱原朋奈 2018.5 「環状盛土遺構の形成過程－栃木市中根八幡遺跡の研究3－」日本考古学協会第84回総会研究発表（明治大学）

福永将大・中村耕作・小林青樹・小山内康人 2018.5 「栃木県中根八幡遺跡出土器の胎土分析」同上

早川富美子・中村耕作 2018.10 「縄文土器の破片を使ったクロック・オーケストラ音楽づくり－クロスカリキュラムの視点から－」

日本音楽教育学会第49回大会（岡山大学）

國學院大學栃木短期大学考古学研究会 2019.2 「中根八幡遺跡の発掘調査」國學院大學栃木短期大学平成29年度大学・地域連携プロジェクト支援事業報告会（國學院大學栃木学園教育センター）

〔展示〕

「奈良大学文化財学科研究教育最前線 2018」奈良大学博物館 2018.10.30 ～ 12.22

「平成30年度日本史系サークル合同展示」國學院大學栃木学園参考館 2018.11.3 ～

〔ミニ展示・ワークショップ〕

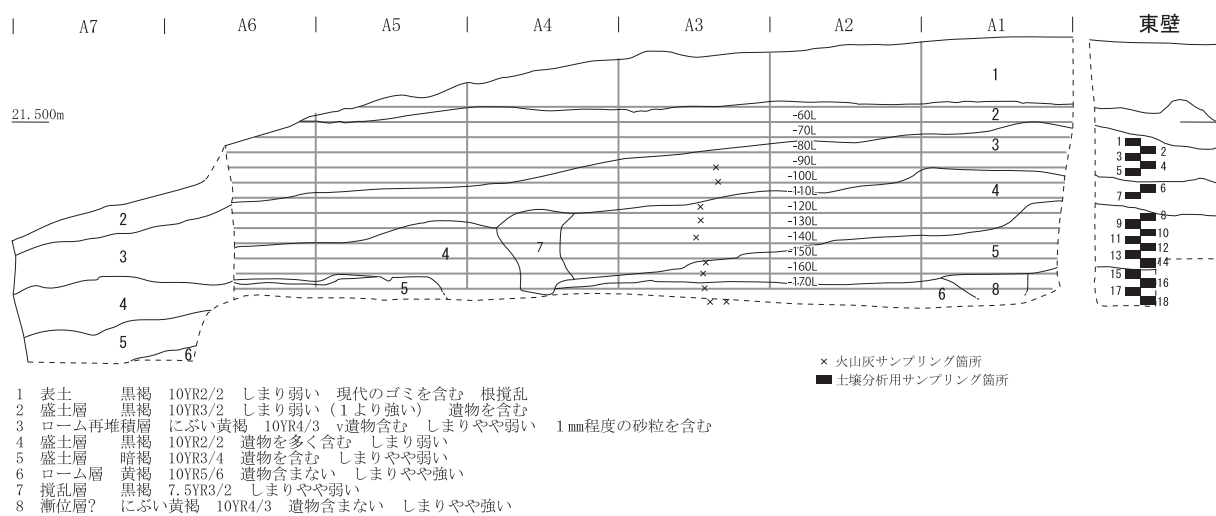
「中根八幡遺跡の調査成果」ふじおか産業祭 2018.11.18



0 S=1:1200 50m

第1図 中根八幡遺跡の地形と調査区位置

環状盛土推定範囲
 実線：高まりを確認できる箇所
 鎖線：遺物の分布から推定した箇所
 点線：上記から推定した箇所



第2図 A区北壁・東壁土層断面図 (S=1:50)



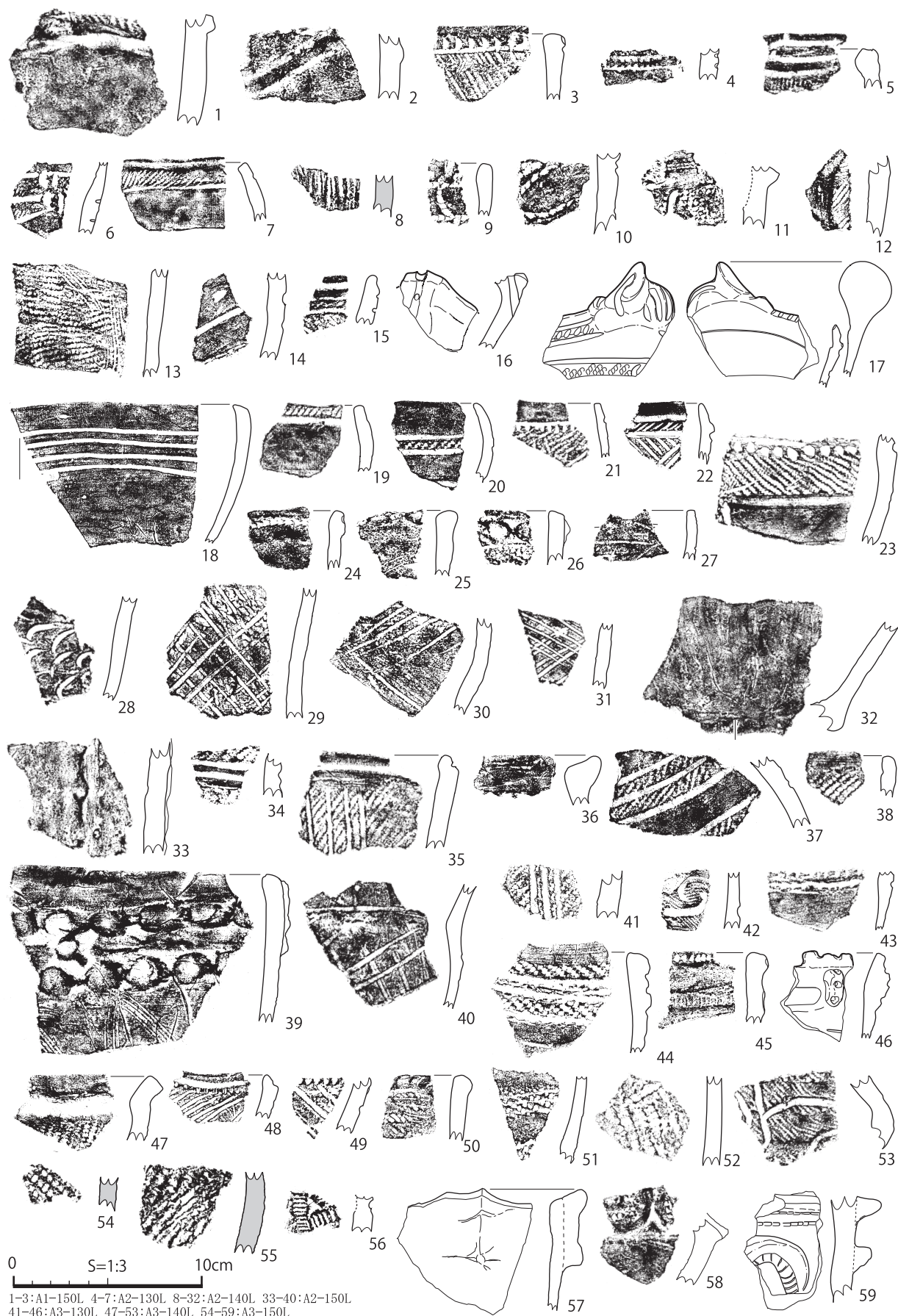
写真1 A区北壁 (A7) 土層断面



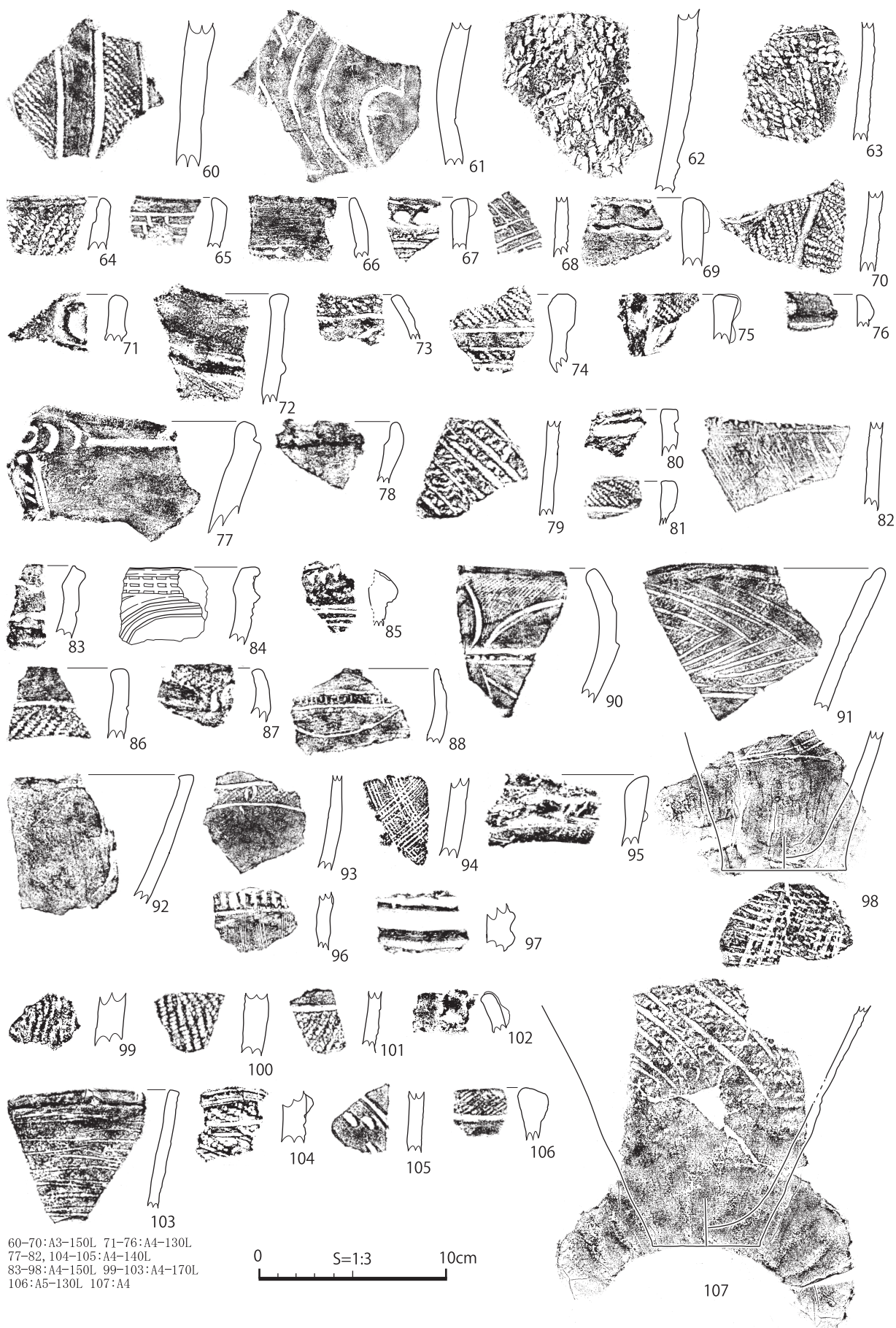
写真2 A区北壁 (A1～6) 土層断面



写真3 A区トレンチ全景 (東から)



第3图 A区出土遗物(1)

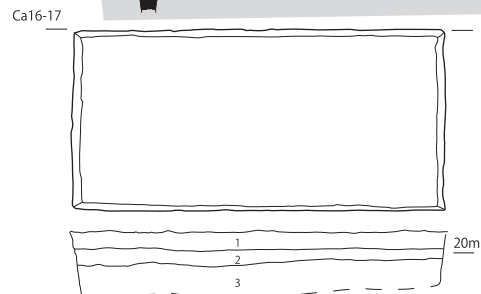
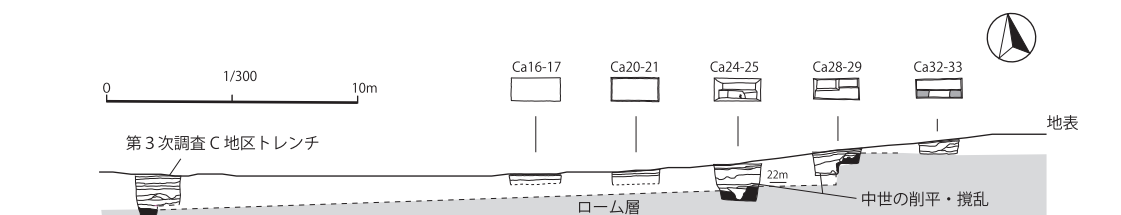


第4图 A区出土遗物(2)

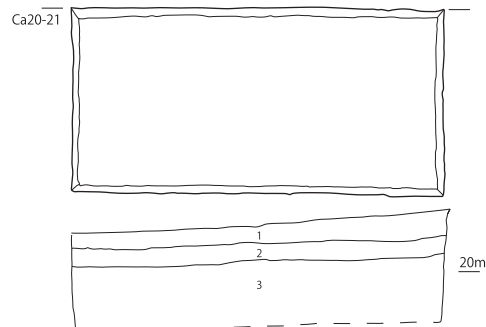


第5図 A区出土遺物(3)

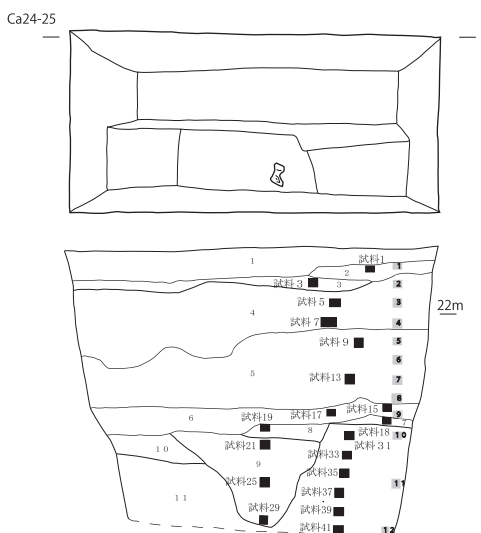
1. C区トレンチ配置図・中央窪地から東側盛土にかけての断面図 (S=1/300 黒塗りはローム層・灰色は想定されるローム層)



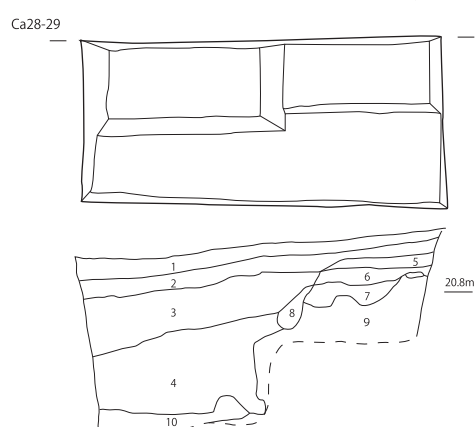
2. C区 Ca16・17 平面図・北壁断面図 (S=1/40)



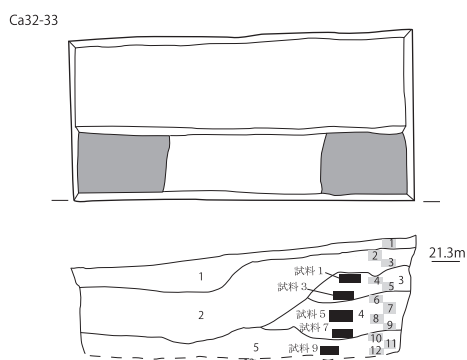
3. C区 Ca20・21 平面図・北壁断面図 (S=1/40)



4. C区 Ca24・25 平面図・北壁断面図 (S=1/40)



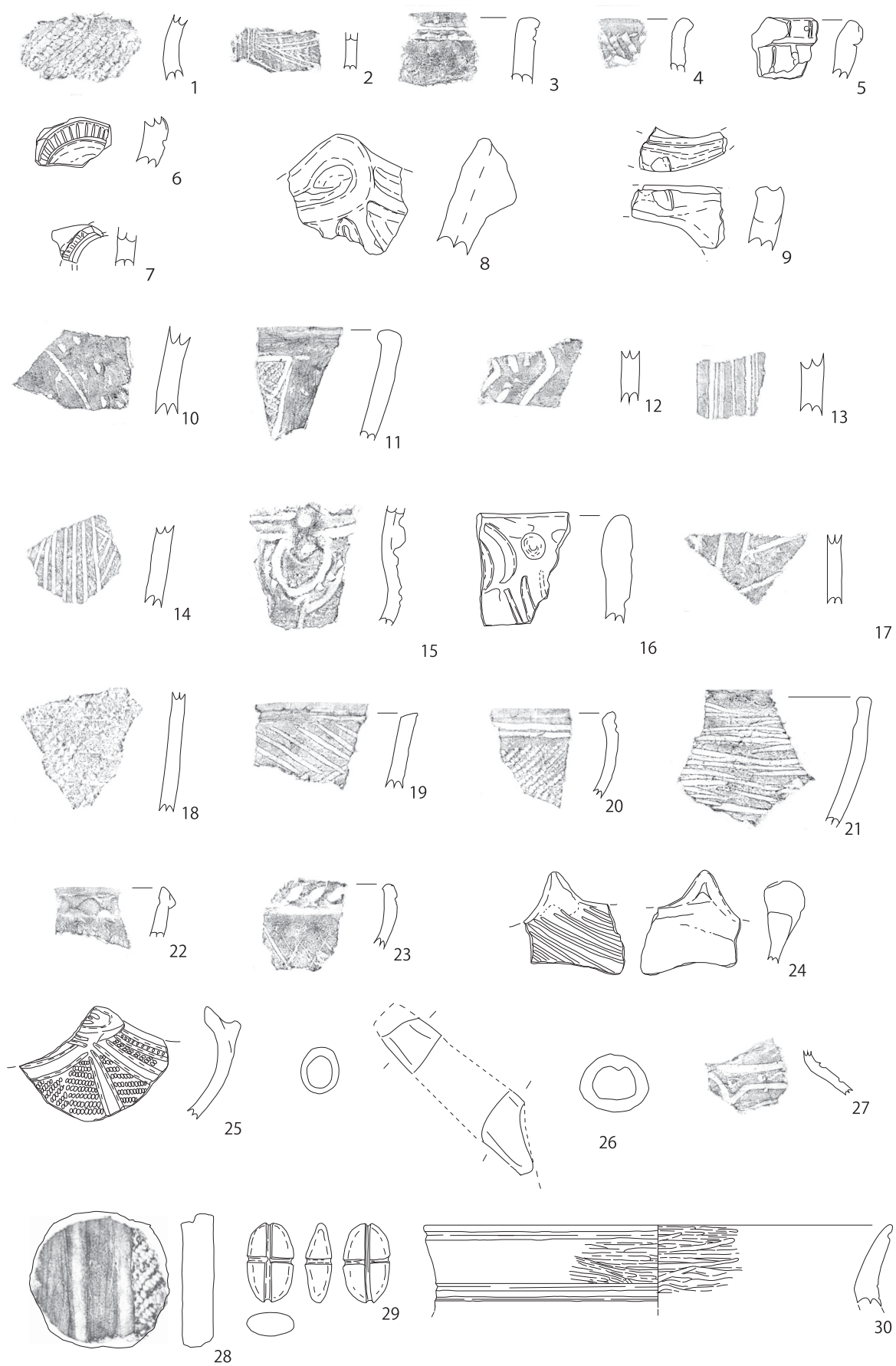
5. C区 Ca28・29 平面図・北壁断面図 (S=1/40)



6. C区 Ca32・33 平面図・南壁断面図 (S=1/40)
※トーン部分は遺構プラン

土層説明	
Ca16.17	1～3 Ca24.25と同じ
Ca20.21	1～3 Ca24.25と同じ
Ca24.25	1 7.5YR 3/1 黒褐 しまりが悪い砂質土 表土に相当 木の根含む 2 5Y 4/2 灰オリーブ しまりが悪い砂質土 3 5Y 4/2 灰オリーブ しまりが悪い砂質土 土器と一部に炭を含む 4 2.5Y 4/2 暗灰黄 しまりが悪い砂質土 炭を含む 5 2.5Y 4/2 暗灰黄 しまりが悪い砂質土 土器を多く含む 6 2.5Y 5/6 黄褐 しまりが悪い砂質土 ロームブロック少量含む 一部炭含む 7 2.5Y 5/6 黄褐 しまりが悪い ロームブロック含む 明茶褐色土混じり 8 2.5Y 7/6 明黄褐 しまりが悪い 6層の土にローム層が混じる 9 2.5Y 4/3 オリーブ褐 しまりが悪い砂質土 土坑 10 2.5Y 4/2 暗灰黄 しまりが悪い砂質土 11 2.5Y 8/6 黄 しまりが良い砂質土 土器は含まず、スコリアを含む ハードロームに相当
Ca28.29	1 Ca24.25の1層と同じ 2 Ca24.25の2・3層と同じ 3 Ca24.25の4層と同じ 4 Ca24.25の5層と同じ 5 2.5Y 4/3 オリーブ褐 大きめのロームブロック含む ややしまらない 上下に乱れる 6 10YR 4/4 褐 ソフトローム(9層)に近いがロームを少し含みつつ、暗茶褐色をなす しまりが強い 7 10YR 4/4 褐 6層と同じ 8 10YR 4/4 褐 7層の崩れた層 ロームブロックを多く含む 9 5YR 6/8 橙 ソフトローム層 部分的に硬質なロームブロックを含み、粘性が強い 10 Ca24.25の5層にロームブロックが含まれる層
Ca32.32	1 Ca24.25の1層と同じ 2 7.5YR 3/2 オリーブ黒 ややしるが粘性はなし ロームブロック粒子を少量含む 炭化物含む 3 7.5YR 3/2 オリーブ黒 2層とほぼ同じ 4 3層と同じ 5 10YR 4/2 灰黄褐 やや粘性がありしる ロームブロックを少量含む

第6図 C区トレンチ断面図



第7图 C区出土遗物

0 1/3 10cm

1. テフラ検出分析結果

地点	試料	土層	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物 (不透明鉱物以外)
			量	色調	最大径	量	形態	色調	
B 区西壁	2	1 層							opx, cpx
	4	2 層				*	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, 灰白	opx, cpx
	10	7 層				(*)	md	無色透明	opx, cpx
	14	9 層							opx, cpx
	18	11層							opx, cpx
	22	10層							opx, cpx
	24	19層							opx, cpx
	28	18層							opx, cpx, (am)
	30	28層							opx, cpx
	32	27層				(*)	bw	無色透明	opx, cpx, (am)
Ca24・25	1	2 層				(*)	pm (sp) , md	淡灰, 淡褐, 灰	opx, cpx
	3	3 層				(*)	pm (sp) , md	淡灰, 淡褐, 褐, 無色透明	opx, cpx, am
Ca32・33	1	3 層				(*)	pm (sp) , md, bw	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx
	3	3 層							opx, cpx
	5	4 層				*	bw, pm (sp)	無色透明, 淡褐, 白	opx, cpx
	7	4 層							opx, cpx
	9	5 層							opx, cpx

****:とくに多い, ***:多い, **:中程度, *:少ない, (*):非常に少ない. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状
ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, bi:黒雲母. 重鉱物の()は, 量が少ないことを示す.

2. 火山ガラス比分析結果

地点	試料	土層	bw(c)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計	
B区西壁	2	1層	2	0	0	8	2	2	102	93	41	250	
	4	2層	2	0	0	6	6	1	78	104	53	250	
	10	7層	3	0	0	23	2	1	92	89	40	250	
	14	9層	1	0	0	17	1	1	127	57	46	250	
	18	11層	5	0	0	24	4	10	112	76	19	250	
	22	10層	0	0	0	28	2	6	114	77	23	250	
	24	19層	2	0	0	17	0	5	118	86	22	250	
	28	18層	1	0	0	16	2	4	105	91	31	250	
	30	28層	1	0	0	19	3	4	108	95	20	250	
	32	27層	2	0	0	12	2	2	90	116	26	250	
	Ca24・25	1	2層	1	0	0	9	3	2	94	90	51	250
		3	3層	0	0	0	7	3	3	89	98	50	250
Ca32・33	1	3層	6	0	0	15	2	5	103	70	49	250	
	3	3層	2	0	0	14	2	2	121	77	32	250	
	5	4層	2	0	0	26	3	7	107	63	42	250	
	7	4層	3	0	0	21	4	5	108	73	36	250	
	9	5層	0	0	0	14	2	4	138	69	23	250	

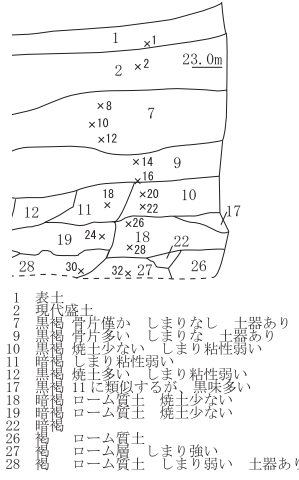
bw:バブル型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状, 数字は粒子数

3. 重鉍物組成

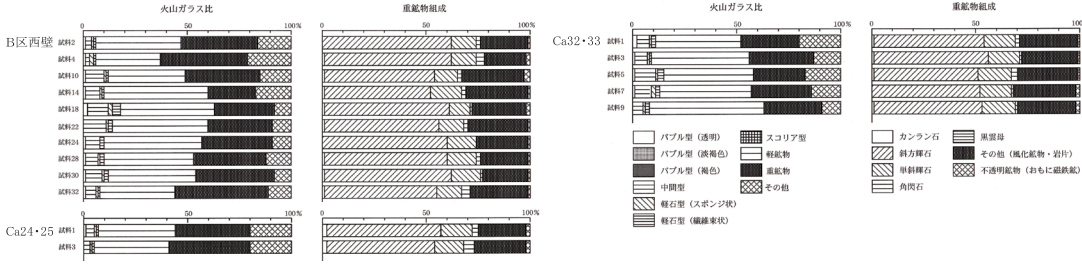
地点	試料	土層	ol	opx	cpx	am	mc	opq	その他	合計
B区西壁	2	1層	0	156	29	5	0	57	3	250
	4	2層	1	155	31	9	0	50	4	250
	10	7層	2	135	27	4	0	75	7	250
	14	9層	3	129	38	4	0	74	2	250
	18	11層	3	148	26	2	0	66	5	250
	22	10層	2	138	30	4	0	74	2	250
	24	19層	0	151	35	0	0	62	2	250
	28	18層	2	147	35	6	0	58	2	250
	30	28層	2	154	34	2	0	56	2	250
	32	27層	2	138	30	9	0	70	1	250
Ca24・25	1	2層	5	136	38	8	0	57	6	250
	3	3層	4	130	36	12	0	64	4	250
Ca32・33	1	3層	1	135	37	4	0	72	1	250
	3	3層	2	137	37	2	0	69	3	250
	5	4層	1	126	39	7	0	74	3	250
	7	4層	0	130	38	3	0	75	4	250
	9	5層	1	133	40	1	0	70	5	250

ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, mc:雲母, opq:不透明鉱物. 数字は粒子数.

5. B 区西壁土层断面图 (S=1:40)



4. テフラ組成ダイヤグラム



第8図 火山灰分析結果

【調査報告】 平成30年度三輪山祭祀遺物調査概要報告

三輪山祭祀遺物調査団

1. 平成30年度の三輪山祭祀遺物調査の概要

桜井市大神神社の背後に聳える三輪山では、1918年に古墳時代の祭祀遺跡である山ノ神遺跡が発見され(高橋・西崎1920)、夥しい量の石製玉類やミニチュア土製品が出土し注目されて古代の祭祀研究の起点となった。山ノ神遺跡は、人工的につくられた磐座を中心に、祭祀遺物が集中して出土したわけであるが、発見後、しばらくの間にそれらの遺物の多くは行方不明となり、現在、大神神社宝物館と東京国立博物館に分かれて所蔵されている。こうしたなか、山ノ神遺跡については、近年、古墳時代の祭祀考古学的研究の観点から注目が集まっている(笹生2010、古谷2010他)。一方で、山ノ神遺跡の最初の報告は古く、祭祀遺物に関する情報について、最新の研究方法による再検討が必要となっていた。

そこで、奈良大学小林研究室では、今年度は東京国立博物館が所蔵する山ノ神遺跡出土祭祀遺物の調査を実施した。

2. 東京国立博物館所蔵山ノ神遺跡出土祭祀遺物の調査

東京国立博物館(以下「東博」と省略する)が所蔵する山ノ神遺跡から出土した遺物は、遺跡出土の大半を占めている。当館が所蔵する資料については、小形素文鏡・土製品・石製品からなる。調査では、これらの遺物群の実測と計測を行った。以下、特に問題となる点について概略を述べる。

まず小形素文鏡は、直径約2.9cmであり、縁辺を連続的に細かく剥離成形している。鈕は半円形をなす。この小形素文鏡で問題となるのは、有孔円盤(鏡形の石製模造品)との関係である。東博が所蔵する山ノ神遺跡から出土した有孔円盤の直径は、小形素文鏡とほぼ同じであり、両者の間に関係があるのは間違いない。中期に属するとされる沖ノ島出土小形素文鏡もほぼ同じ大きさである。有孔円盤が小形素文鏡を模倣したのか、小形素文鏡が有孔円盤を模倣したのか、この前後関係を判定することは難しい。有孔円盤の出現を中期以前とみるかどうかでこの解釈は変わる事となる(寺澤1990ほか)。しかし、山ノ神遺跡から出土した小形素文鏡は、縁辺を連続的に細かく剥離成形している点を根拠とすれば、有孔円盤を祖型として製作されたと見るほうがよいかもしれない。

山ノ神遺跡からは、勾玉形の石製模造品が多数出土している。形状は、勾玉形をなすものから、身の湾曲や凹みさえなさないタイプも多く、複数時期のものが混在している可能性が高いが、複数の製作者の存在も想定できる。また、山ノ神遺跡から出土した鏡形や勾玉形の石製模造品の表面の研磨痕を観察すると、研磨方向が一定ではなく、個体差が激しい。これは、形状と同じように時期差を示すか研磨にあたった人物が複数いた可能性を示している。同じようなものを大量に製作する場合では規格性が高まり、研磨作業のような

反復的な身体動作を一定に繰り返すことによって個体間で研磨痕の方向などの変異が少なく一定のパターンを示すはずである。したがって、研磨方向などの痕跡において個体間の変異が大きいということは、それぞれの製品の製作者が異なると見た方がよく、同時にそれは異なる時期の製品が混在している可能性を示している。このような傾向は、土製模造品についても認められ、製作技法の最終的な調整としてナデで終わっているものが多いが、刷毛目調整で終了しているものがあり、上述のような2つの可能性のもとに製作されたのであろう。

以上のように、東博が所蔵する山ノ神遺跡から出土した祭祀遺物をみると、石製模造品では形状や研磨痕で個体差が顕著であり、これが時期差と製作者集団の差を示すかどうかで解釈が分かれることとなった。こうした時期差と製作者集団の差を見極めることは極めて難しいが、石製模造品では同型式のもののなかで個体差の変異が大きいので、基本的に製作は複数の人物によって行われ、また複数時期のものが混在している、という解釈が現状では適当であると考えている。

謝辞

東京国立博物館における調査実施にあたり、同博物館の白井克也氏、河野正訓氏、山本亮氏、河野一隆氏には大変お世話になり感謝申し上げます。

平成30年度東京国立博物館調査参加者

小林青樹・萱原朋奈・中島愛理

引用参考文献

大場磐雄1951「三輪山麓発見古代祭器の一考察—延喜式所載祭器との關聯—」『古代』3号、早稲田大学考古学会

大三輪町史編集委員会1959『大三輪町史』

笹生 衛2010「三輪山麓の古代祭祀再考—山ノ神遺跡の出土資料を中心に—」『大美和』119号、大神神社

高橋健自・西崎辰之助1920「三輪町大字馬場字山ノ神古墳」『奈良県史跡名勝地調査報告』7、奈良県

寺澤 薫1988「三輪山の祭祀遺跡とそのマツリ」『石上と大神』筑摩書房

寺澤知子1990「石製模造品の出現」『古代』第90号 早稲田大学考古学会

樋口清之1928「奈良県三輪町山ノ神遺蹟研究」『考古學雑誌』第18巻第10・12号、日本考古學會

樋口清之1972「三輪山」『神道考古學講座』第5巻、雄山閣

樋口清之1975「第1章 神体山の考古学的背景」『大神神社史』大神神社史料編纂委員会

古谷毅2010「奈良県三輪馬場字山ノ神遺跡の祭祀考古学的検討」『日本基層文化論叢 梶山林継先生古稀記念論集』梶山林継先生古稀記念論集刊行会

和田 萃1985「三輪山祭祀の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集、国立歴史民俗博物館

紺紙金字経の材質分析

～金泥・界線部分の科学分析及び真鍮泥写経の製作実験について～

西 来 友 花

1. はじめに

日本に経典が輸入され、写経が行われるようになったのは奈良時代からであるが、平安時代後期においては法華経を中心に多くの紺紙金字経が書写された。

経典は、漢字圏では一般に、白紙の料紙に墨字で記されるものと考えられているが、経典の中にはしばしば、紫紙や紺紙など様々な色に染められた料紙の上に金泥すなわち金粉を膠で溶いた顔料で経文を書写した例が見受けられる。その中に属する紺紙金字経は、藍を紺色に濃く染めた和紙を写経用の料紙として用いられており、多くは金字で経文を写経することが一般的である。(例外として「二月堂焼経」の紺紙銀字経などがある。)

2013年に西山要一教授(当時)と東野治之教授(当時)が発表された『紺紙金字経の分析』では、真鍮の使用例が報告された。そこで分析されたのは様々な時代の古写経の断簡である。だが、資料の中尊寺経や荒川経などは何千巻と制作されたものであり、その膨大な経典全てに真鍮が使われたのか、またその中に金泥で書かれたものが存在するのかということとは不明である。実際のところ、どのような金属を使用した泥で経典の経文を書き記しているのかは、今後の分析調査が進むことによって解明されていくだろう。

そこで、製作時代や経典の種類が異なる紺紙金字経の断簡七点を、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用して金字と界線部分の成分分析を行った。また、金泥・真鍮泥内の鍮粉の状態を知るために、デジタルマイクロスコープを使用し観察を行った。さらに、真鍮泥写経の製作を行った。文字は、真鍮泥(赤金色)、真鍮泥(青金色)、金泥の三種類について製作実験した。

本稿では、今回使用する試料断簡の一つ『美福門院得子發願一切経「荒川経」』が真鍮泥で書写されていると予測し、他時代や他種の写経ではどのような金属が使われているのか、真鍮泥が使用されている断簡は見つかるのかということを目的として分析と考察を行った。また、成分分析で得られた結果を元に金属泥を作成し、紺紙金字経を複製した。種類の違う金属泥は、製作過程内において違いや特徴が見受けられるのか調査するとともに、複製断簡と試料断簡の比較を行うことで、試料断簡が製作当初はどのような色合いや質感、光沢であったのかということを推察する。

2. 紺紙金字経の蛍光X線分析による科学調査

2-1. 分析試料(写真1)

著者の所蔵する紺紙金字経の断簡A～Fの七点を、蛍光X線分析の試料とした。

- A 美福門院得子發願一切經「荒川經」（平安後期 1159年頃）
- B 妙法蓮華經卷第一（平安時代）
- C 妙法蓮華經譬喻品第三（平安時代）
- D 妙法蓮華經卷第一（鎌倉時代）
- E 裝飾法華經断簡 紺紙金字（室町時代）
- F 高麗經（高麗時代）
- G 仏説三部妙典 仏説無量寿經（江戸時代 宝永八年）

これらの試料は、いずれも経典を数行に切断された断簡であり市販品である。断簡自体に伝来を保証するものはないが、古典籍商の鑑定販売と東野治之教授（当時）による書写年代と書風の鑑定済みであるため、後述の分析に影響はないと判断した。

2-2. 分析方法と分析条件

紺紙金字経の書写において、一般的に使用しているとされる金と銀、科学分析調査において使用が確認された真鍮、その他の金属が金属泥にどのような配合で含まれているのかを調査するために、製作時代や経典の種類が異なる紺紙金字経の断簡七点について、奈良大学所有のエネルギー分散型蛍光X線分析装置（Edax Japan Eagle XXL）を使用し、金字と界線部分の成分分析を行った。条件は以下の通りである。

分析条件【電圧：25kV、電流：500 μ A、ターゲット：クロム（Cr）、分析野：100 μ m、
分析時間：200秒、分析環境：真空状態、試料：非破壊現状分析】

2-3. 分析結果

金字成分分析表

試料 番号	書写時代	主成分	成分比率	その他成分	金属泥種別判定	図 版
A	平安時代	Cu（銅） Zn（亜鉛）	84：16	K（カリウム）・Ca（カルシウム） Mn（マンガン）	真鍮泥	図1-A-金字
B	平安時代	Au（金） Ag（銀）	71：29	Ca（カルシウム）・Ti（チタン） Mn（マンガン）・Fe（鉄）	金銀合金泥	図1-B-金字
C	平安時代	Cu（銅） Zn（亜鉛）	83：17	K（カリウム）・Ca（カルシウム） Ti（チタン）・Cl（塩素）・Fe（鉄）	真鍮泥	図1-C-金字
D	鎌倉時代	Au（金）	100	K（カリウム）・Ca（カルシウム） Ti（チタン）・Mn（マンガン） Fe（鉄）	金泥	図1-D-金字
E	室町時代	Cu（銅） Zn（亜鉛）	79：21	Ca（カルシウム）・Cl（塩素）	真鍮泥	図1-E-金字
F	高麗時代	Au（金）	100	K（カリウム）・Ca（カルシウム） Ti（チタン）・Mn（マンガン） Fe（鉄）	金泥	図1-F-金字
G	江戸時代	Au（金） Ag（銀）	83：17	K（カリウム）・Ca（カルシウム）	金銀合金泥	図1-G-金字

界線成分分析表

試料 番号	書写時代	主成分	成分比率	その他成分	金属泥種別判定	図 版
A	平安時代	Ag (銀)	100	K (カリウム)・Ca (カルシウム) Ti (チタン)・Cl (塩素) Mn (マンガン)	銀泥	図 1 - A - 界線
B	平安時代	Au (金) Ag (銀)	6 : 94	K (カリウム)・Ca (カルシウム) Ti (チタン)・Fe (鉄)	金銀合金泥	図 1 - B - 界線
C	平安時代	Cu (銅) Zn (亜鉛)	76 : 24	Ca (カルシウム) Ti (チタン) Cl (塩素)・Mn (マンガン)	真鍮泥	図 1 - C - 界線
D	鎌倉時代	Au (金) Ag (銀)	13 : 87	K (カリウム)・Ca (カルシウム) Ti (チタン)・Mn (マンガン)	金銀合金泥	図 1 - D - 界線
E	室町時代	Cu (銅) Zn (亜鉛)	81 : 19	K (カリウム)・Ca (カルシウム) Cl (塩素)	真鍮泥	図 1 - E - 界線
F	高麗時代	Ag (銀)	100	K (カリウム)・Ca (カルシウム)・ Ti (チタン)・Fe (鉄)	銀泥	図 1 - F - 界線
G	江戸時代	Ag (銀)	100	K (カリウム)・Ca (カルシウム)・ Ti (チタン)・Fe (鉄)	銀泥	図 1 - G - 界線

分析では、A・C・Eの試料に金字部分から銅と亜鉛が検出され、真鍮泥であることが分かった。特にEは界線部分も含めて銅と亜鉛が検出され、全て真鍮泥で制作されている。他の試料は全て銀泥で書かれた銀界線であり、真鍮泥と銀泥が混在している。合金比では全体的に銅の比率が多く亜鉛が少ない丹銅寄りだが、色味としては薄いオレンジ程度に赤みが強くなる。しかし、どの試料も目視でその赤みの差を確認することが困難であった。銅合金として作る過程においては、亜鉛が少なく銅が多いと粘りがあり柔らかいため、扱いやすかったのではないかと推測できる。

B・D・F・Gの試料では、金字部分は金、界線部分は銀が検出された。日本で制作されたB・D・Gは、金字部分と界線部分どちらかもしくはどちらも金が金銀合金泥であるのに対し、高麗で制作されたFは金字部分が金泥、界線部分が銀泥とそれぞれ単一である。

金銀合金泥は色彩や光沢を考慮し金と銀を調節してあると考えられる。目視では銀の比率が多いため透明感が出るが、色合いは白色が強く見える。

その他の成分で検出された元素K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Cl (塩素)、Mn (マンガン)、Fe (鉄) は、料紙に含まれる元素または塵埃であると推測した。

3. 真鍮泥製作と技法研究

各紺紙金字経の断簡を蛍光X線分析することにより、金・銀以外に真鍮が検出された。真鍮は色としては金色に近い見た目であるので、真鍮泥は金泥の色合いに似たものを作ることが出来るが、詳しく観察してみると、金とは別種の金属としての色合いや質感、光沢が見て取れる。

真鍮泥について金泥と比較すると、種類の違う金属泥は、製作過程内において違いや特徴が見受けられるかということや経年劣化している試料の金属泥が、本来、製作当初はどのような色合いや質感、光沢であっ

たのかを確認することが必要だと感じた。そこで、真鍮泥と確認した断簡の複製を作製し、試料と複製の金泥・真鍮泥が料紙上にどのような状態で存在しているか知るために、デジタルマイクロ스코プによる表面観察と紺紙真鍮泥経複製製作工程の考察を行った。

3-1. デジタルマイクロ스코プによる金泥・真鍮泥の観察

3-1-1. 分析方法と分析条件

各試料の泥内の金粉・真鍮粉についてどのような状態で料紙上に存在しているのか観察するために、奈良大学所有のセルミックデジタルマイクロ스코プ（SELMIC SEL-LWD100）を使用し、各紺紙金字経の試料A～Gの金泥部分を拡大して表面観察を行った。

今回の表面観察では、低倍率と高倍率両方の観察が可能、大気中の現状有姿のまま観察が可能、色情報を得ることができる、写真の撮影後に対象個所の測長機能があるという理由から、デジタルマイクロ스코プを選択した。観察条件は以下の通りである。

観察条件【モニター倍率：200倍・500倍、照明：COARSE（0）・FINE（2）】

3-1-2. 観察結果

試料番号	書写時代	金属泥の種類	状 態	特 徴	図 版
A	平安時代	真鍮泥	文字のかすれが激しい	真鍮粒の密集度が低い	写真2-A-200倍 写真2-A-500倍
B	平安時代	金銀合金泥	金の粒が剥がれもなく、文字もかすれていない	文字の形に金の粒が密集している	写真2-B-200倍 写真2-B-500倍
C	平安時代	真鍮泥	文字のかすれが激しい	真鍮粒の密集度が低い	写真2-C-200倍 写真2-C-500倍
D	鎌倉時代	金泥	金の粒が剥がれもなく、文字もかすれていない	文字の形に金の粒が密集している	写真2-D-200倍 写真2-D-500倍
E	室町時代	真鍮泥	文字のかすれが激しい	真鍮粒の密集度が低い	写真2-E-200倍 写真2-E-500倍
F	高麗時代	金泥	金の粒が剥がれもなく、文字もかすれていない	文字の形に金の粒が密集している	写真2-F-200倍 写真2-F-500倍
G	江戸時代	金銀合金泥	金の粒が剥がれもなく、文字もかすれていない	文字の形に金の粒が密集している	写真2-G-200倍 写真2-G-500倍

観察の結果、次のような特徴が判明した。

- (1) 全ての観察を通して、金泥に光源を当てると光の反射が激しくぼやけてしまうため、鍮粉が粒単位で観察し辛い状況だった。
- (2) マイクロ스코プによる観察では、立体像による凹凸観察はできなかった。
- (3) 拡大写真で観察すると、金属を粉状にして膠溶液で溶かした金泥で文字を書いても、粒子が大きいと和紙に浸透していかず、料紙上にのっている状態であることが分かる。
- (4) 真鍮泥の金字は真鍮の粒が剥がれ落ちている部分が多く、拡大すると目立って筆跡が崩れているように見えた。また、真鍮の粒の密集度が低い。

- (5) 金泥部分の金字は、金の粒が全体的に残っていて、多少剥がれているように見えても、拡大した際に文字の形が崩れて見えるようなことはなかった。また、金の粒の密集度は高い。
- (6) 調査した鑢粉の粒の幅は30 μ m未満であった。
- (7) 表面の粒の質感の差は、象牙や猪牙で磨く「螢生」の工程によるものである。

3-2. 紺紙真鍮泥経複製製作実験

真鍮泥を使用している試料A・C・Eの中から「A美福門院得子發願一切経（荒川経）」断簡の複製を作製し、

(1) 金泥と真鍮泥は作製工程での扱いに違いは見られたのか、(2) 複製断簡の真鍮泥と金泥の状態の観察及び試料断簡と複製断簡の比較の二つの観点から考察を行った。

作製実験では色味の違う真鍮泥（赤金色と青金色）二種類と、金泥のあわせて三種類の断簡を作製した。

3-2-1. 材料と道具

本実験で使用した各種材料と道具は、専門店等を含め一般に市販されている多くの商品の中の一部を用いている。従って、商品名は一切表記せず、それぞれの特質のみを取り上げて記載する。

〈材料〉

① 真鍮（赤金色・青金色）

市販のサイコロ状真鍮と棒状真鍮を用意した。

銅の比率が高い赤に近い色の金色を呈する赤金と、銅の比率の低い青に近い色を呈する青金の二種類を用意した。

② 三千本飛鳥膠（牛膠）

市販されている三千本飛鳥膠を使用した。

伝統的な和膠である日本画用三千本膠を元に復元製造した三千本飛鳥膠である。膠は動物の皮革や骨材から採取される強力な糊として、膠溶液は金属である金粉を紙から剥離させない役割を担っている。

③ 写経用紺紙

料紙には、市販の藍染め写経用紙を使用した。

また、少量だが以前に筆者が美濃楮紙を蓼藍染めしたものも使用した。国産美濃楮、三匁、蓼藍染め、ドーサ引き、打ち紙処理済みのものである。

〈道具〉

① 鉄工やすり（目の形状：複目、目の粗さ：細目）

② 乳鉢・乳棒

③ 絵具皿

〈写経用道具〉

① 金泥筆（鼬毛使用）

② 猪牙

3-2-1. 真鍮泥断簡作製工程

① 鑪による真鍮粉の製作（写真3－①）

真鍮泥を作るために、真鍮を金属用の鉄工鑪でおろして鑪粉を作ることにした。しかし、マイクロスコープを使って観察してみると、鑪で削っただけでは金粉のような粒の細かさにならず、大小混ざった鑪粉となり鉋屑のように巻き込みのある形の粉が出来てしまう。そこで、鑪削りは巻き込み型の粒が少なくなるように力をかけすぎないこと、さらに観察した金粉のような細かさ近づけるために、鑪粉を乳鉢で磨り潰した。

金粉と自作した真鍮粉二種類をマイクロスコープによる拡大写真で観察してみると、鑪で削った粉は金とは思えないような茶色が目立ち、むしろ真鍮泥の方が黄みの色が強く金色のイメージに近いように見えた。しかし、金粉を指で伸ばして見ると、金粉の方がよく光った。

② 膠液製作（写真3－②）

膠 2 g + 水 30 cc の割合で膠水を作成した。三千本飛鳥膠を短く切っておよそ2時間水でふやかした。次にふやけた膠を 40 ～ 50℃ の中火で湯煎し、木べらでゆっくりかきまぜながら煮溶かした。湯煎後はキッチンペーパーを使い、溶け残りや不純物を漉した。

③ 真鍮泥製作（写真3－③）

(a) 真鍮粉を絵具皿に取り、膠液を一滴ずつ加えながら指先で丁寧に混ぜ合わせた。

(b) 「焼き付け」

真鍮泥が絵具皿に粘り付くようになったら、湯煎で絵具皿を暖め、水分を蒸発させた。湯煎温度は 40℃ を保った。

(c) 焼き付けた絵具皿を冷まし、少量の膠液を加えて絵具皿にはりつけるように練った。泥がのびずガラつくような時は、水を重ねて加えよく伸ばした。

(d) 「研ぎ出し」

再び湯煎にかけ、艶が出るまで練った。艶が出たら指に少量のぬるま湯をつけて丁寧に溶き下ろした。

(e) 溶きおろした後さらにぬるま湯を注ぎ、よくかき混ぜてしばらく放置し、その後上澄み液を捨てた。

(f) さらに膠液を加えて湯煎にかけ、焼きつけた。

(g) ぬるま湯を注ぎ上澄み液を捨てる。この時鑪粉が浮いてくるが、上澄み液と一緒に捨てた。

(h) 焼き付けと上澄み液の廃棄を繰り返し、上澄み液が透明になると皿底に真鍮泥の沈殿物が出来た。

(i) 埃や塵が混入しないように注意しながら真鍮泥の沈殿物を自然乾燥させた。

真鍮泥製作の際に、膠液を一日で使い終わらず数日使い続けると、その濃度は自然に濃くなる。そして、同じ容器に真鍮泥を入れたままにすると、容器の底の真鍮泥濃度は高くなり、上層は薄くなる。また、その日の気温や湿度によっても条件は変わる。濃度の低下は真鍮泥の剥離をもたらすので、真鍮泥は作り置きに適さないことが分かった。

真鍮泥を溶く工程で (c) や (f) の作業では、ぬるま湯による研ぎ出しを行ったが、この際に、金色に光る真鍮粉と混じって大量の汚れが水に浮き、青味がかった黒ずんだ上澄み液ができていた。(f)・(g) の作業を、上澄み液が透明になるまで三回繰り返した。しかし、大量の真鍮泥を製作した場合の上澄み液の汚れは、さらに回数を重ねて除去しなければならないものと考えられる。

④ 書写（写真3-④・⑥）

金属泥で文字を書くには、前項の工程のように固形の金属を微細な粉末状にして膠で溶かし、泥状にしないと筆に含ませることができない。しかし、泥状になったからといって、筆に含ませても墨とは異なり、自由自在に運筆することは難しかった。

製作した真鍮泥を使い実際に書き始めた時、筆が重く、泥が紙の上になかなかのらない、そして文字が書けても掠れ具合がとても酷かったのである。使用している泥の材料は金属であり、その物性を考えてみると墨とは全く異なるもので、粒子の大きさも違うということを理解することができた。

また、温度や湿度が書きやすさに関係していることがわかった。文字を書くとすぐに真鍮泥は固まり、筆の滑りが悪くなるので、手のひらに絵具皿をのせ、体温で温めながら書くと、上手く金字書写ができた。

膠溶液と鍍粉の割合を調整することを手始めに、泥を筆の先に含ませるか、筆全体に含ませるかなどの泥の量については、何度も書いて調整した。当初は泥がかすれたり、ひび割れたりすることが多く、転折やはねがうまく書けなかったが、馴れると丁度よい泥に含ませる筆使いがわかっていった。また、固まった金泥を膠液で溶く場合とぬるま湯で溶く場合があるが、今回、赤金色の真鍮泥は膠液で溶くと筆先が固まる時間が早かったので、ぬるま湯を使って溶いた。しかし、青金の真鍮泥ではぬるま湯では紙面にうまく泥が張り付かず、滲んでしまい接着力がなかったため、膠液を足して使用した。これは作成工程、真鍮内の合金比率、鍍粉を作製した際の粒の大きさや形等の問題が考えられる。

⑤ 螢生（研磨）（写真3-⑤・写真4）

書写が終わった後は書いた字を磨く作業を行った。これは「螢生」と称される作業で、猪牙で行う。金字を上から力を加減しながら猪牙で擦ると、光沢が少なく黄土色で、泥の中の粒が散らばったように見えた字が、一転して金箔のように表面が滑らかになり、黄金色の光沢を放つようになった。磨いた金字が輝くのは、猪牙の滑らかな表面曲線で圧力をかけることによって、字面が平面になり、正反射を起こし光沢が生じるからである。磨かない金字は泥粉がどれほど微細であっても微粒子状のままで乱反射するので美しく輝かず、また、紙面上にのっているだけの泥粉は触れると剥離しやすい。

マイクロスコープで拡大した写真で観察してみると、磨いた字は一枚の板のようであり、磨かない字は微細な粒が散乱しているように見えた。

3-3. マイクロスコープによる複製断簡の金泥・真鍮泥の観察

書写した複製断簡のマイクロスコープによる金属泥の金粉・真鍮粉の観察を行った。

観察は、真鍮泥（赤金色）、真鍮泥（青金色）、金泥を、螢生有りと無しのあわせて六通りで行った。

使用機器及び観察条件は上記3-1-1と同一である。

3-3-1. 観察結果

泥種類	螢生無し	螢生有り
真鍮泥 (赤金色)	色は黄色だが、赤味を帯びていて暗い色である。光沢も鈍い。紙の繊維が隆起し凹凸ができた部分は、あまり真鍮泥が付着しておらず、拡大写真ではひび割れのように見える。(写真5-1)	研磨前は粒子が散乱しているようであったが、いくらか平面状に、滑らかになっている。しかし、紙の繊維が隆起し凹凸ができた部分は、あまり真鍮泥が付着していない。 研磨後は真鍮泥部分が白く発光した光沢を持つようになった。(写真5-2)
真鍮泥 (青金色)	色は黄色味を帯びているが白く発光した光沢が強い。 紙の繊維が隆起し凹凸している部分は、あまり真鍮泥が付着しておらず、拡大写真ではひび割れのように見える。(写真5-3)	研磨前に比べると摩擦によって凹凸が減り、平面状の部分が增えたため、光沢が増している。 研磨後は泥粒が紙面に密着し、筆跡に真鍮の粒が行き渡っている。(写真5-4)
金 泥	色は黄色味を帯びている。白く発光する面が強い部分もある。金泥の粒が点在し密集具合が低いので、全体的に光沢が鈍い。(写真5-5)	研磨したことにより凹凸が減り平面が増えたため、光沢が増している。 研磨後は泥粒が紙面に密着し、筆跡に金泥の粒が行き渡っている。(写真5-6)

3-3-2. 考察

(1) 金泥と真鍮泥は製作工程での扱いに違いは見られたのか

真鍮泥を溶く工程までは金泥と同じように扱うことができたが、書写後の螢生の工程では真鍮泥を研磨することによって金泥の光沢を出すことは難しく、金泥と同じような螢生の効果が真鍮泥には現れなかった。螢生を行うと、猪牙の平面で圧力をかけることによって金属泥内の粒と紙とが圧迫されて字面が平面になり、正反射を起こして光る。真鍮泥に光沢が出ないのは、真鍮の銅と亜鉛の混合比の違いによるものではないかと推測される。

真鍮泥は研磨の前後でその効果が明確ではないといえる。しかし、真鍮粉が磨かれずに紙面上にのっているだけで剥離しやすいため、螢生作業は剥離防止のためにも必要な作業である。

(2) 複製断簡の真鍮泥と金泥、資料と複製の目視観察比較

書写した二種類の真鍮泥断簡は、銅の比率が高い赤よりの金色（赤金色）と銅の比率の低い青よりの金色（青金色）の色の違いが確認できた。また、二種類の真鍮泥は金泥との色の差異も確認できた。しかし、真鍮泥は螢生を行っても金泥のような金箔の統一感や金泥の粒の滑らかな表面感、輝くような光沢感は感じられない。

真鍮泥（赤金色）は、赤の色味によって金泥よりも暗い色に見えるため、光沢は鈍いが、その光沢の鈍さは真鍮泥（青金色）よりも金泥に近い。

真鍮泥（青金色）は黄味が強く、目視での光沢も鋭く感じてしまうため金泥ではなく金メッキ様の感が強い。しかし、真鍮泥（赤金色）よりも色味は金泥に近い。

三つの複製断簡を試料断簡と目視比較した結果、真鍮泥（青金色）で製作したものが試料断簡に近い色合いであった。

4. おわりに

本稿では、紺紙金字経の材質に関する科学調査として紺紙金字経断簡七点の蛍光X線分析を行った結果、内三点から真鍮泥使用を確認することができた。成分分析表やデジタルマイクロスコープによる試料断簡の金泥・真鍮泥の観察結果からは、時代ごとの特徴的な違いは確認することができなかった。しかし、試料内の日本の紺紙金字経は六点、高麗経は一点であり、比較して考えるには少ないが、日本の試料は純度100%の純金または純銀の金属泥はなく、合金である真鍮泥または金銀合金泥が使用されている。このことから、日本の紺紙金字経の写経において材料の忠実さが必ずしも絶対視されていた訳ではなく、仏である一つ一つの文字が放つ功德や救済の金色光という色や光沢そのものを重要視し、そこに近づけるための目的の一つとして、経済性を考慮して金や銀以外の材料も使用していたのではないかと推測した。今後、日本に経典が輸入され写経が行われるようになった奈良時代の紺紙金字経の科学調査が待たれるが、経典輸入当初から真鍮の粉を金泥に混ぜていた可能性も考慮できるのではないかと考えられる。

上記の紺紙金字経の分析結果や観察を通して、こうした真鍮泥の使用については、まず金泥との違いを実際に目にして金泥と真鍮泥の両方を体感することから見てくるものがあるのではないかと考える。そして、製作面では金と真鍮という別種の金属を使用した際に違いはなかったのではないかという疑問を抱いた。また、経年劣化している資料断簡が製作当初はどのような姿であったのかということに興味を持ち、是非製作して比較してみたいと考えて今回の製作実験を行った。

しかし、製作となると前途多難であった。どうにか真鍮泥作りと研磨は作業工程を進めることができたが、書写となると文字を単純に書き写すということしか出来なかった。だが、そのような中でも様々な発見があった。特に、墨字と違い、金属泥は粒の大きさとその形状から、運筆の際に紙面の繊維のわずかな起伏であっても大きな影響を受けやすいことが分かった。これによって製作した真鍮泥の削りの工程で、できるだけ細かく削り、マイクロスコープ観察で確認できたような平面的な形状の粉末にすることが必要であることを理解することができた。

また、金属泥の鑢粉の状態観察や真鍮泥写経の作製の技法調査では、金泥と真鍮泥の両者の使用を実験することで、個々の金属泥の違いに関する情報を得ることができた。三通りの複製を試料断簡と比較した結果、目視では、銅の比率の低い真鍮泥（青金色）で製作したものが最も試料断簡に近い光沢と色合いであったが、成分分析では、逆に銅の比率が高い真鍮泥（赤金色）が試料断簡に最も近いことが分かった。これは作製工程に問題があったのか、市販真鍮の成分が関係しているのか、もしくは鑢粉を作製した際の粒の大きさや形が問題であったのかは、次の研究課題である。

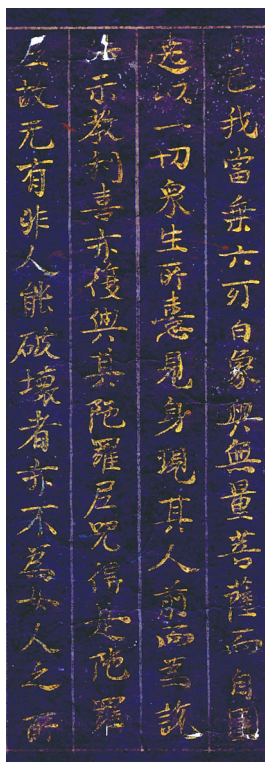
今後、より多くの紺紙金字経の分析や多方面からの調査研究によって、使用材料の産地や紺紙金字経作製の技法を解明するとともに、その特徴を明らかにしていくことが必要であると考えている。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究全体に亘ってご指導くださいました奈良大学文化財学科西山要一教授（当時）、魚島純一教授、研究試料として入手した紺紙金字経の鑑定を快く引き受けて下さった東野治之教授（当時）をはじめ、ご協力を賜りました方々に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

参考文献

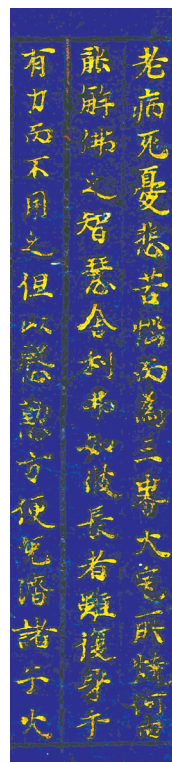
- (1) 石田茂作『仏教考古学講座 第六巻 経典・経塚』雄山閣出版1977
- (2) 磯貝誠「金字写経の意味するもの -法華経を中心として-」
早稲田大学大学院文学研究科『早稲田大学大学院文学研究科紀要第4分冊』2014
- (3) 倉田文作・田中芳朗監修『法華経の美術』佼成出版社 1981
- (4) 小松茂美監修・宇塚澄風著『蘇る金字経』木耳社1986
- (5) 東野治之「貼りこみ帖の古写経と非破壊分析」奈良大学図書館『奈良大学図書館報第18号』2013
- (6) 奈良国立博物館『法華経 写経と荘厳』1987
- (7) 西山要一・東野治之『紺紙金字経の分析－平安時代真鍮使用の例－』2013
- (8) 西山要一・東野治之「東アジアの真鍮と紺紙金銀字古写経の科学分析」
奈良大学文学部文化財学科『文化財学報 第三十三集』2015
- (9) 福島久幸『天平金泥経典の謎』金泥書フォーラム2006
- (10) 室瀬和美「金銀鈿荘唐大刀の鞘状装飾技法について」宮内庁正倉院事務所『正倉院紀要第33号』2011
- (11) 頼富本宏・赤尾栄慶『写経の鑑賞基礎知識』至文堂1994
- (12) “SAT大正新脩大藏経テキストデータベース”
〈<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index.html>〉(参照2018-12-15)



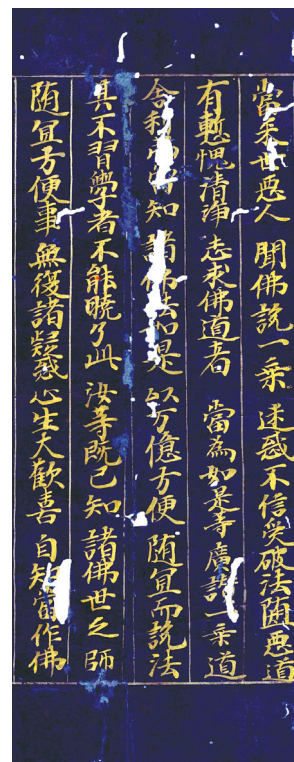
A 美福門院得子發願一切經
「荒川經」
(平安後期 1159年頃)



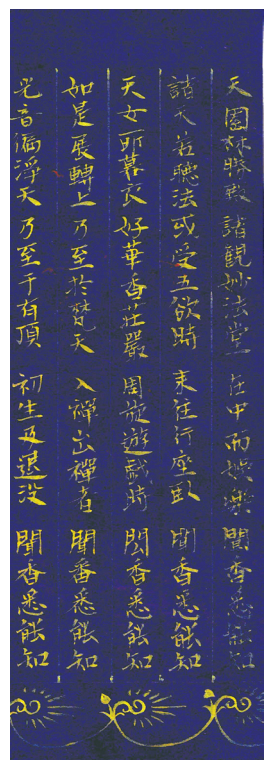
B 妙法蓮華經卷第一
(平安時代)



C 妙法蓮華經譬喻品第三
(平安時代)



D 妙法蓮華經卷第一
(鎌倉時代)



E 裝飾法華經断簡 紺紙金字
(室町時代)



F 高麗經
(高麗時代)

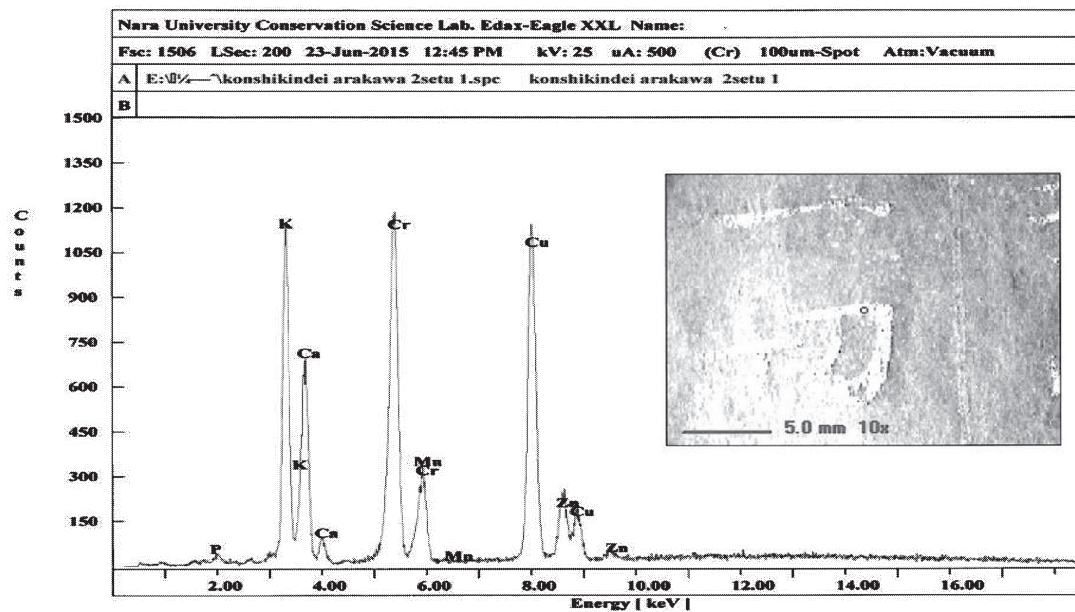


G 仏說三部妙典 仏說無量壽經
(宝永八年 江戸時代)

写真1 分析試料

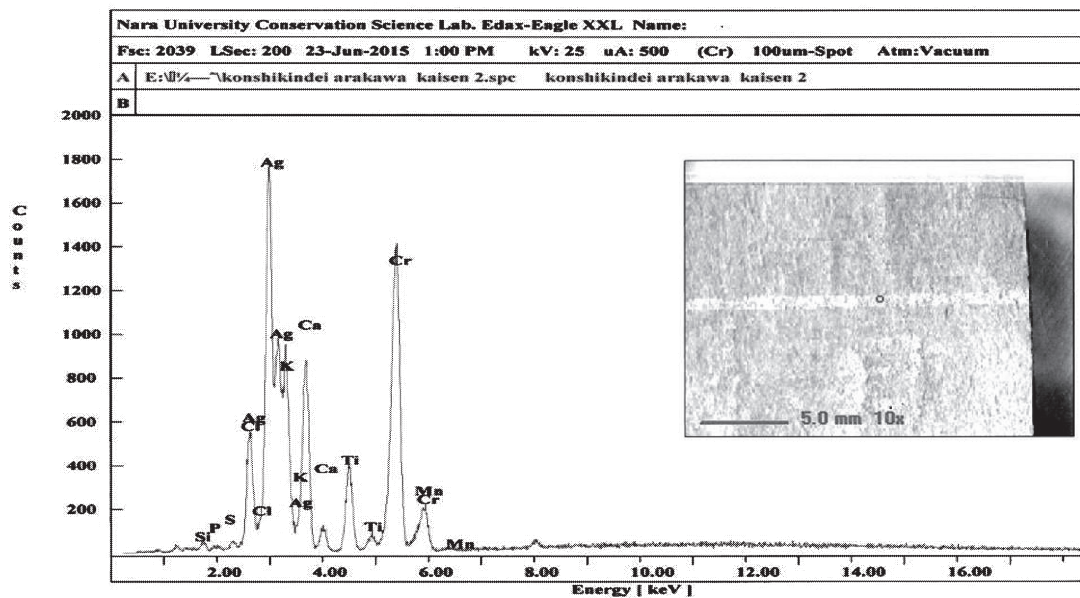
図1. 紺紙金字経の分析結果

A 美福門院得子發願一切経「荒川経」 金字「切」(二行四字三画)



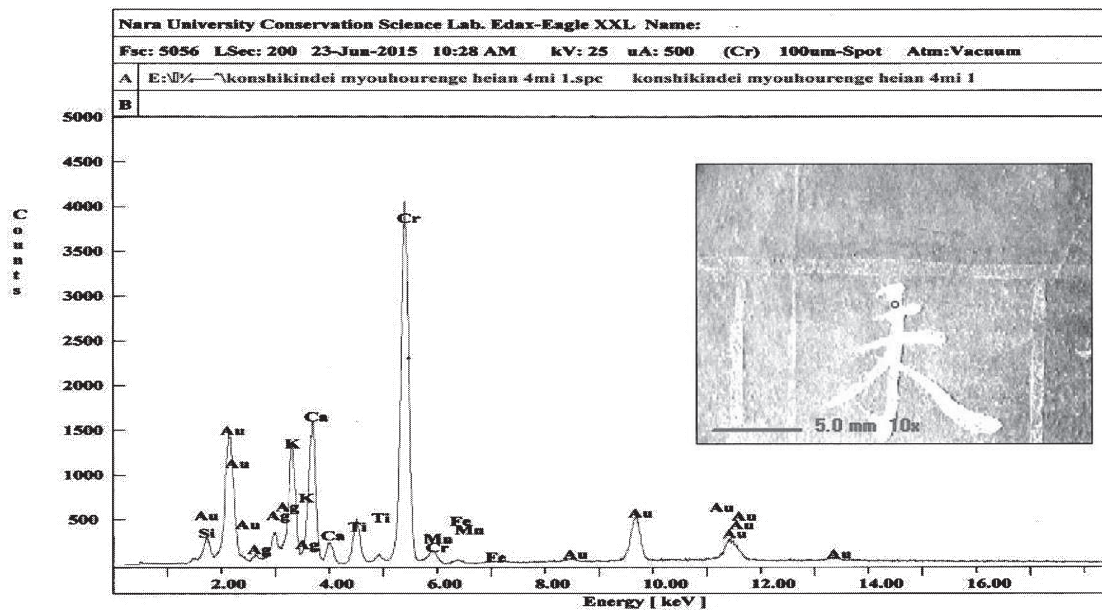
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	48.38	9.35	—	—	18.30	8.96	—	—	11.19	—
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	84 : 16		—							

A 美福門院得子發願一切経「荒川経」 界線



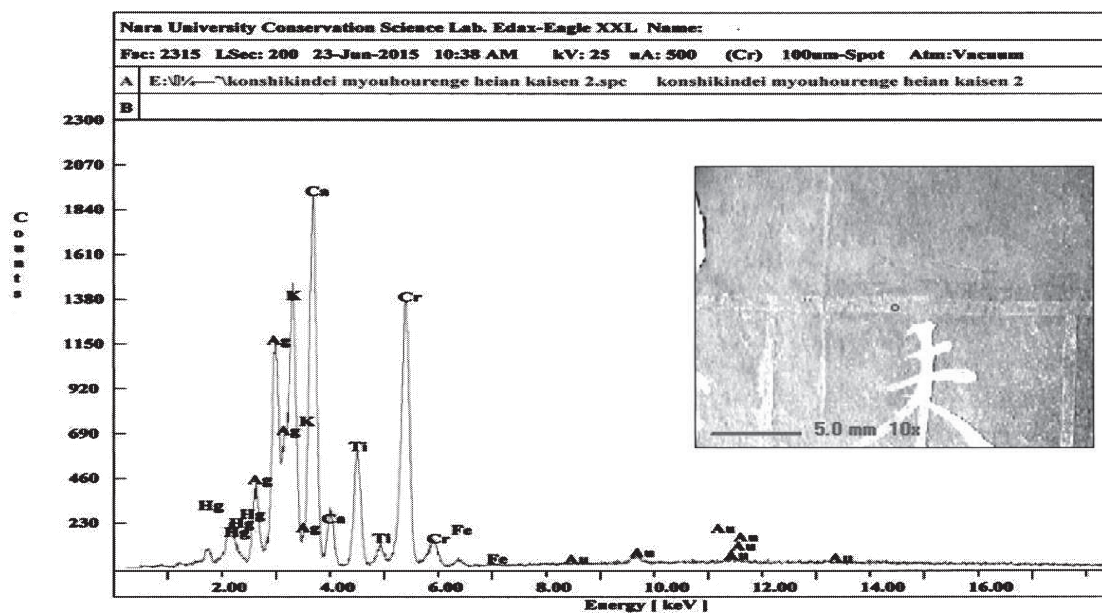
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	—	56.38	7.04	11.27	3.28	8.49	7.80	—
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		—							

B 妙法蓮華経巻第一 金字『未』（四行一字三画）



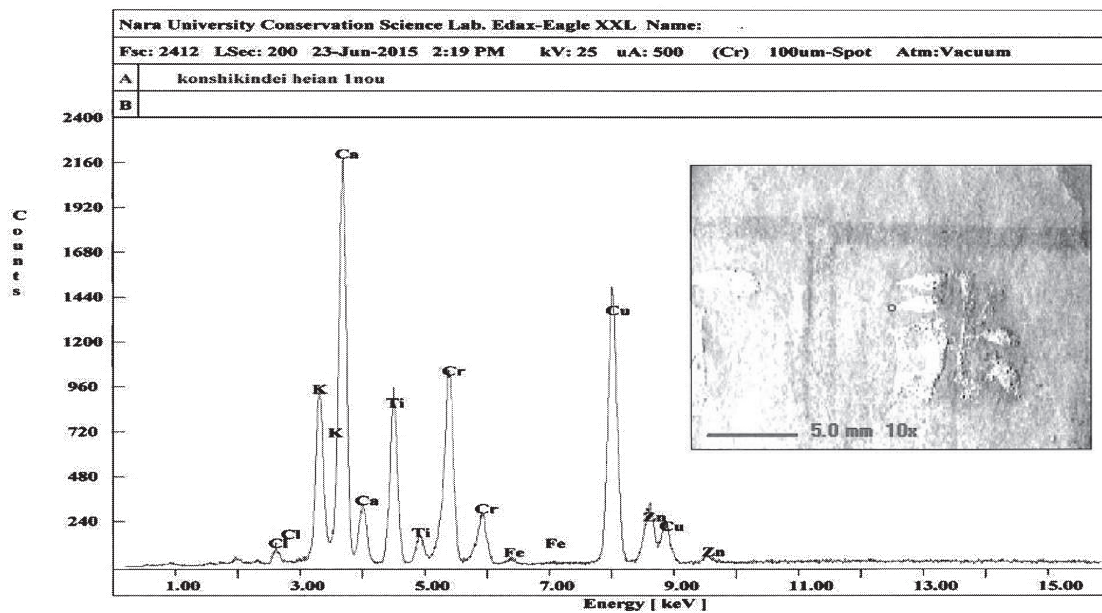
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	31.36	12.79	—	16.59	3.25	—	4.46	0.75
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		71 : 29							

B 妙法蓮華経巻第一 界線



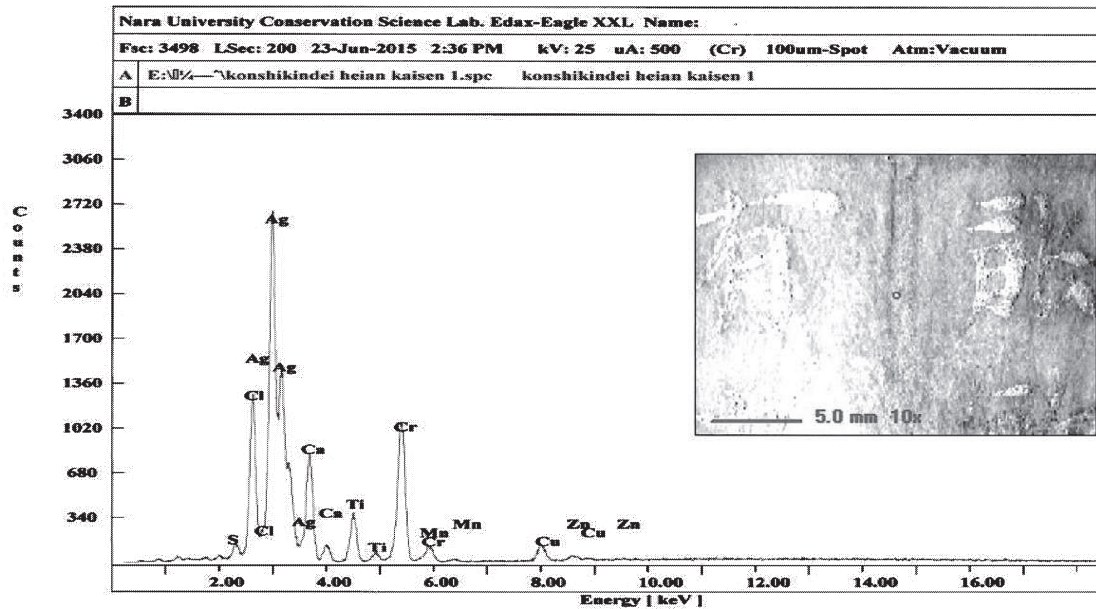
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	2.91	42.27	15.67	30.50	7.01	—	—	1.47
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		6 : 94							

C 妙法蓮華經 譬諭品第三 金字『能』(二行一字二画)



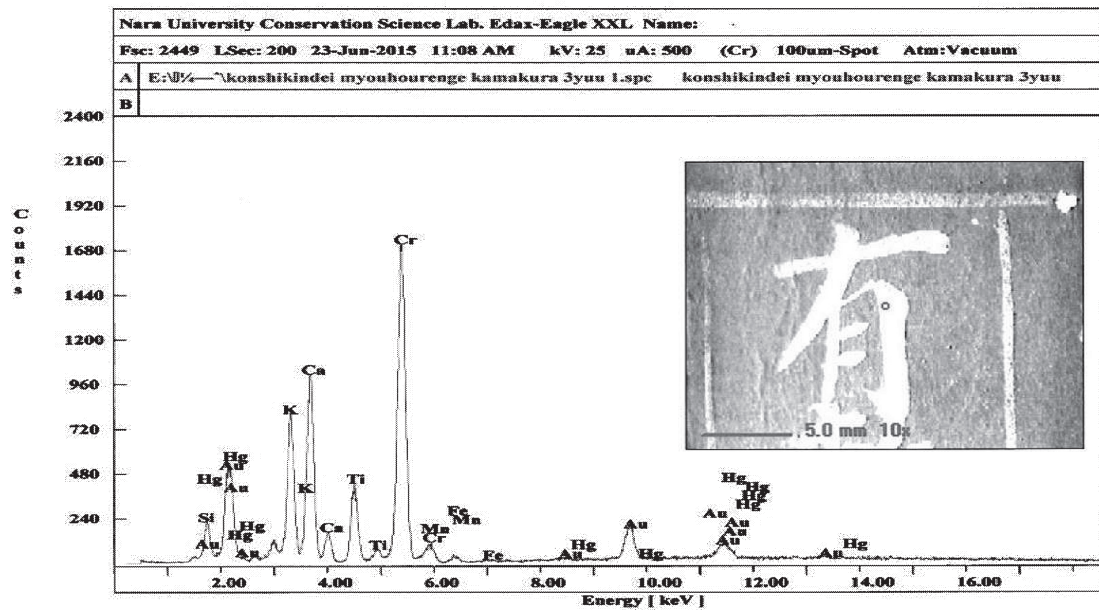
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	46.70	9.76	—	—	11.83	21.68	6.71	2.45	—	0.87
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	83 : 17		—							

C 妙法蓮華經 譬諭品第三 界線



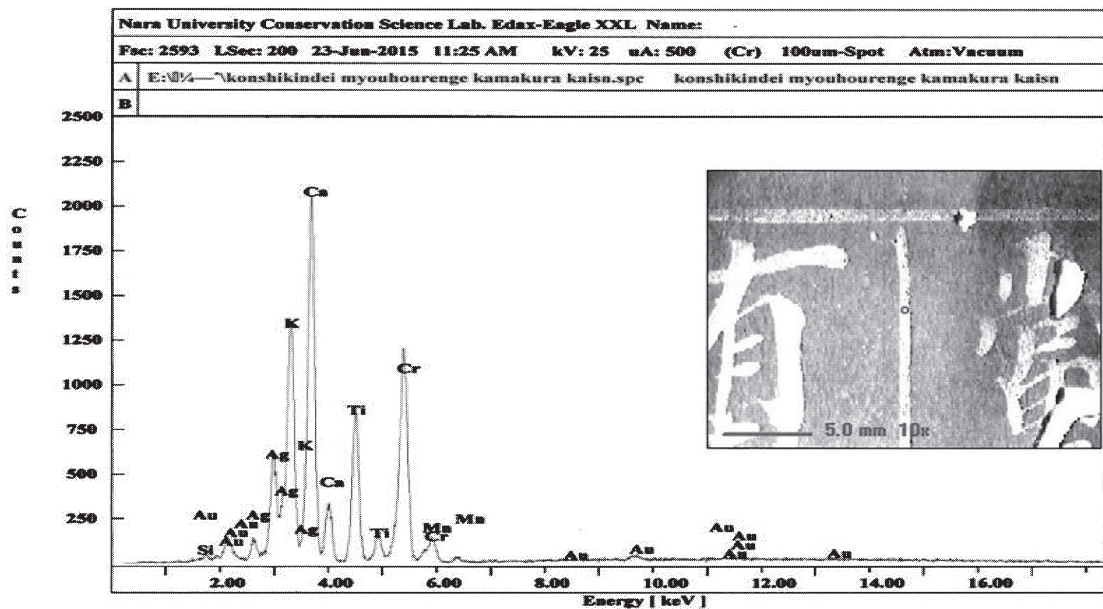
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	2.08	0.66	—	66.42	—	8.22	2.21	14.77	3.22	—
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	76 : 24		—							

D 妙法蓮華経巻第一 金字『有』（二行一字四画）



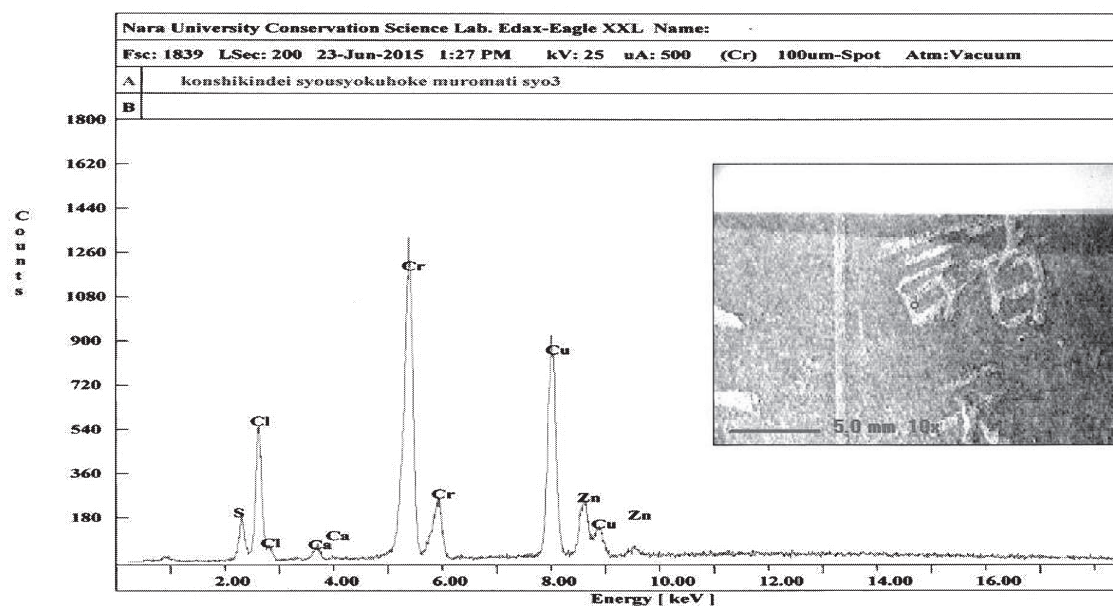
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	22.83	—	19.90	20.47	5.49	—	5.49	1.34
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		—							

D 妙法蓮華経巻第一 界線



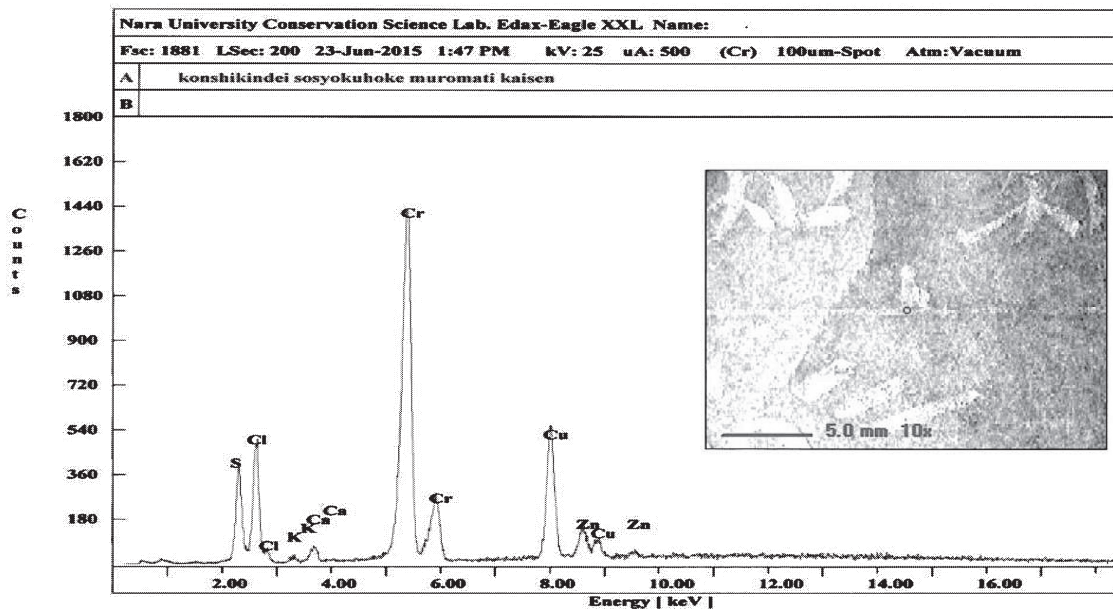
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	2.32	15.13	10.75	17.85	5.26	—	0.15	—
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		13 : 87							

E 装飾法華経 紺紙金字 金字『諸』（二行一字五画）



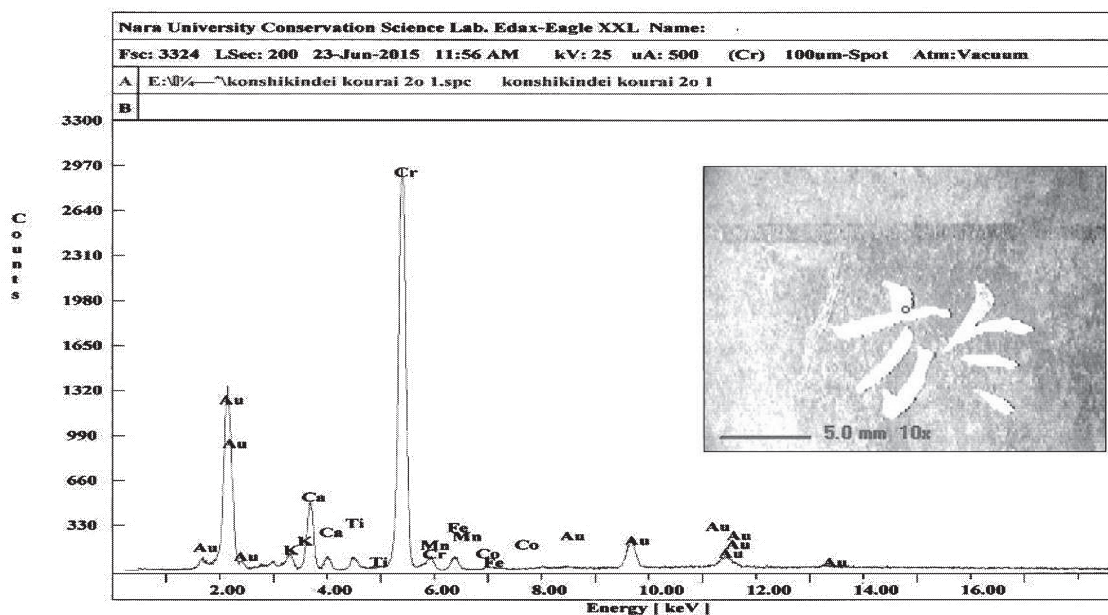
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	60.15	16.17	—	—	—	3.04	—	28.43	—	—
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	79 : 21		—							

E 装飾法華経 紺紙金字 界線



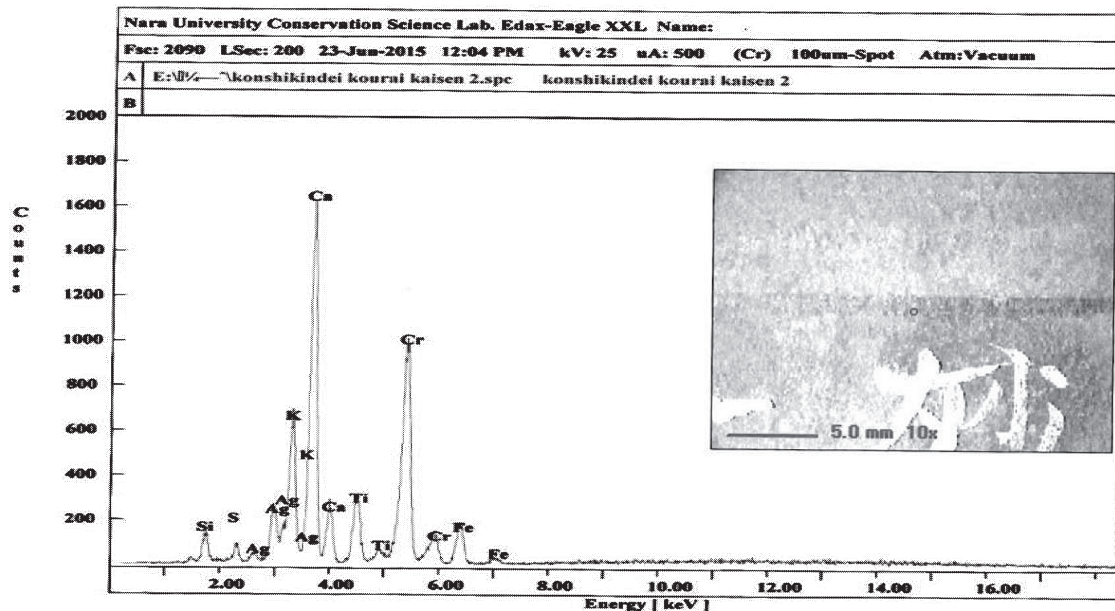
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	26.72	6.13	—	—	1.01	1.70	—	37.44	—	—
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	81 : 19		—							

F 高麗経 金字『於』（二行一字一画）



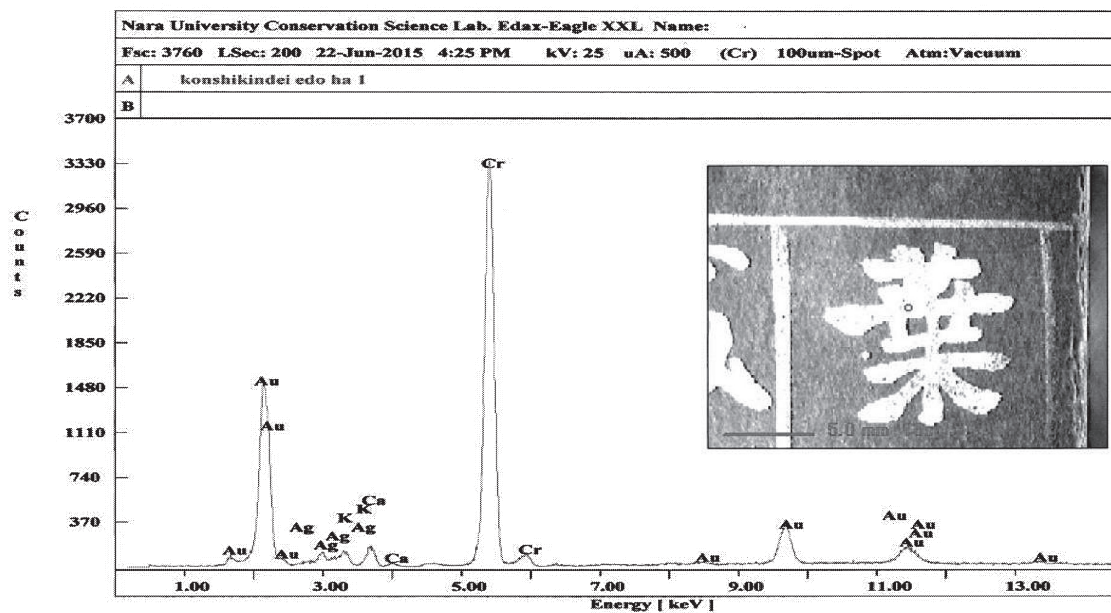
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	55.20	—	5.98	18.38	2.21	—	9.79	7.77
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		—							

F 高麗経 界線



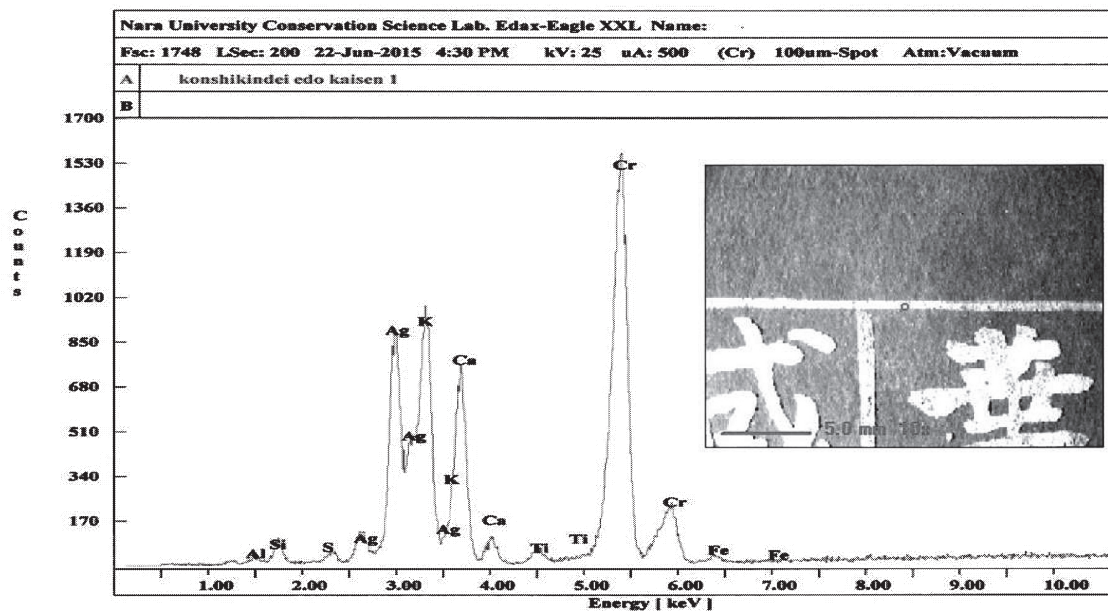
元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	—	16.19	11.99	32.79	5.01	—	—	11.14
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		—							

G 仏説三部妙典 仏説無量寿経 金字『葉』（一行一字四画）



元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	73.73	15.45	5.11	5.70	—	—	—	—
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		83 : 17							

G 仏説三部妙典 仏説無量寿経 界線



元 素	Cu	Zn	Au	Ag	K	Ca	Ti	Cl	Mn	Fe
(w%)	—	—	—	47.37	14.69	15.97	0.84	—	—	1.50
合金比	Cu : Zn (真鍮粉)		Au : Ag (粉)		※エネルギー分散型蛍光X線分析装置による定量値であり誤差を含む。					
	—		—							



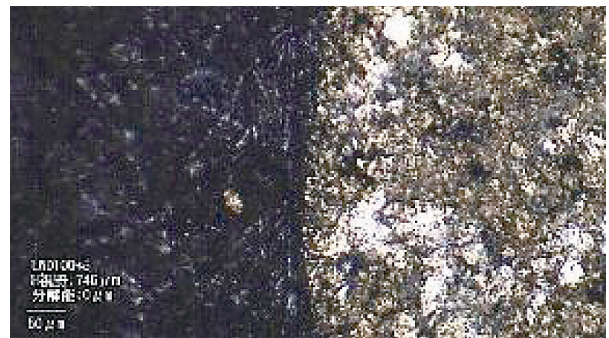
A 美福門院得子發願一切經（荒川經）『切』
（平安時代・真鍮泥）200倍



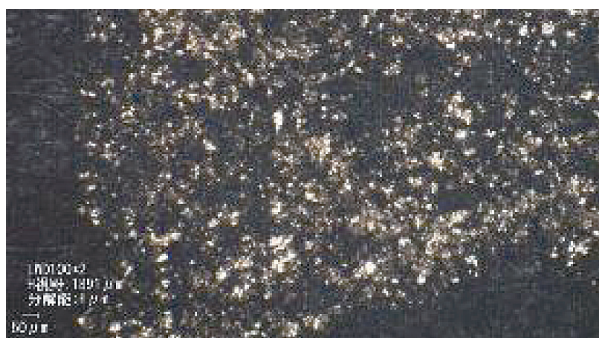
同左 500倍



B 妙法蓮華經卷第一『諸』
（平安時代・金銀合金泥）200倍



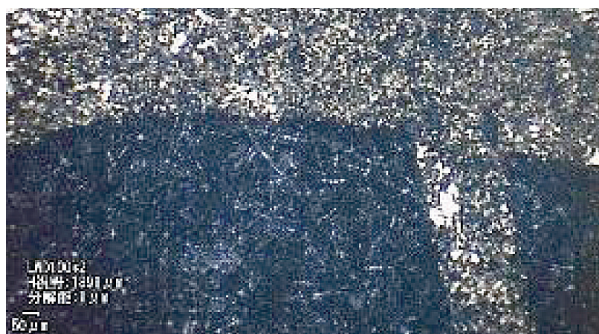
同左 500倍



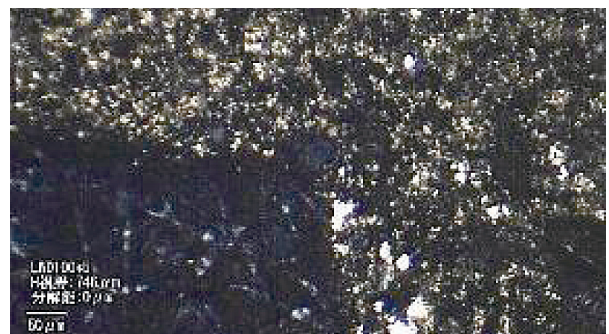
C 妙法蓮華經譬喻品第三『老』
（平安時代・真鍮泥）200倍



同左 500倍



D 妙法蓮華經卷第一『汝』
（鎌倉時代・金泥）200倍



同左 500倍

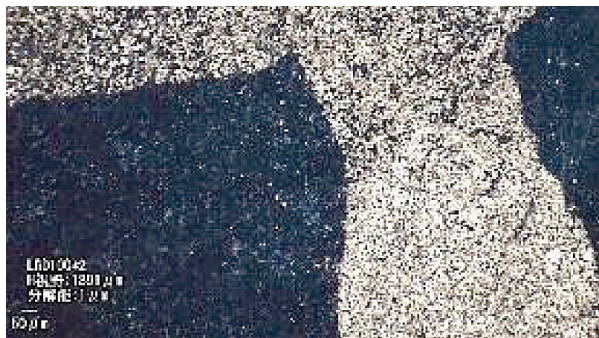
写真2 デジタルマイクロスコープによる金字の表面拡大写真



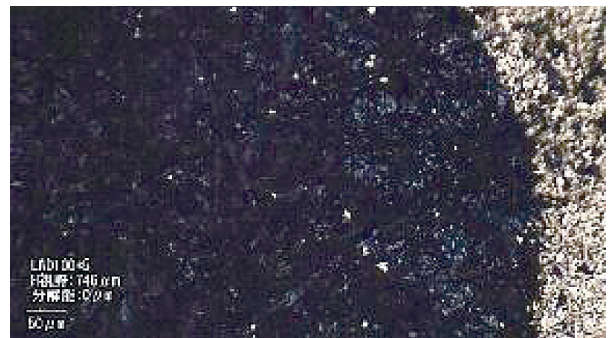
E 裝飾法華經断簡 紺紙金字『香』
(室町時代・真鍮泥) 200倍



同左 500倍



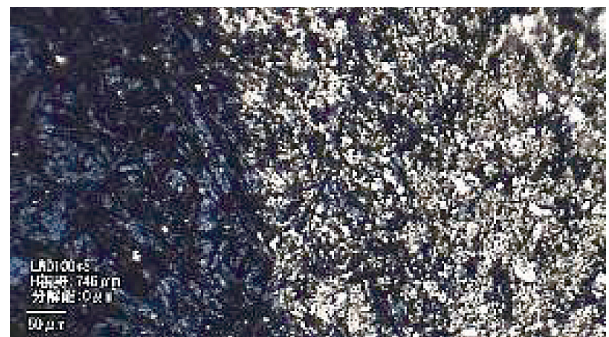
F 高麗經『待』
(高麗時代・金泥) 200倍



同左 500倍

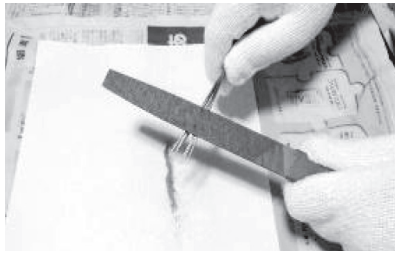


G 仏説三部妙典 仏説無量寿經『葉』
(江戸時代・金銀合金泥) 200倍



同左 500倍

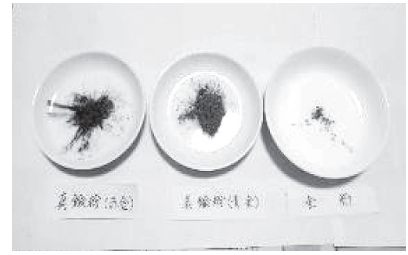
① 鉢による真鍮粉の製作



1 真鍮やすりがけ



2 真鍮粉を乳鉢で磨り潰す



3 真鍮粉の比較

② 膠液製作写真



1 膠を細かく切る



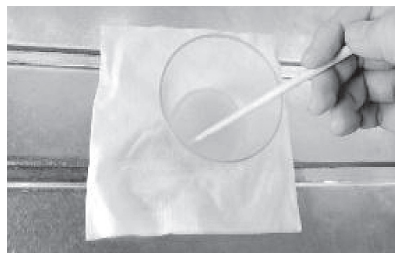
2 水で膠をふやかす



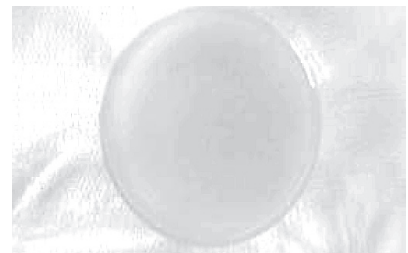
3 ふやかした後の状態



4 ふやかした膠の湯煎



5 湯煎しよく混ぜる



6 湯煎後の状態

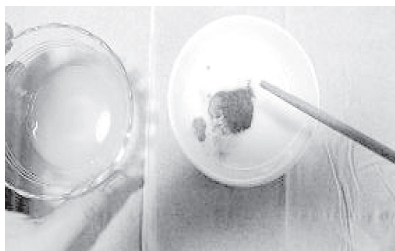


7 膠を漉す



8 漉した後の状態

③ 真鍮泥製作写真



1 鉢粉に膠液を加える



2 鉢粉を膠液で練る



3 水分を蒸発させる

写真3 紺紙真鍮泥経複製製作工程



4 水分蒸発状態



5 膠液を入れて再び練る



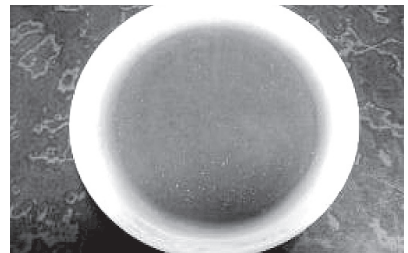
6 水分を再び蒸発させる



7 ぬるま湯を少量入れて研出しを行う



8 ぬるま湯を注ぐ



9 ぬるま湯注ぎ後放置



10 澄み液を捨てる



11 金泥沈殿状態



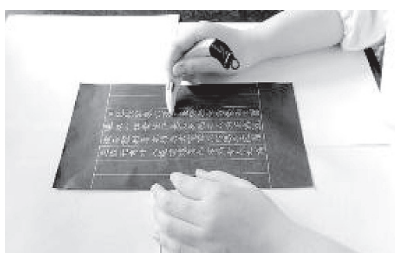
12 上記作業を繰り返した後の金泥沈殿状態

④ 書写



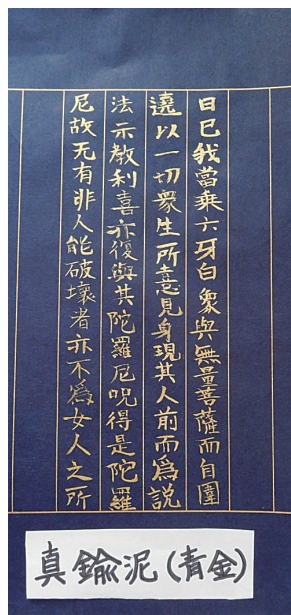
書写

⑤ 螢生

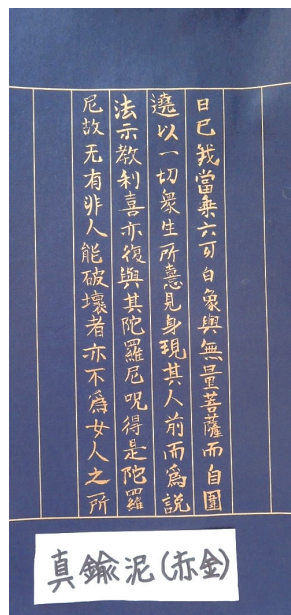


螢生

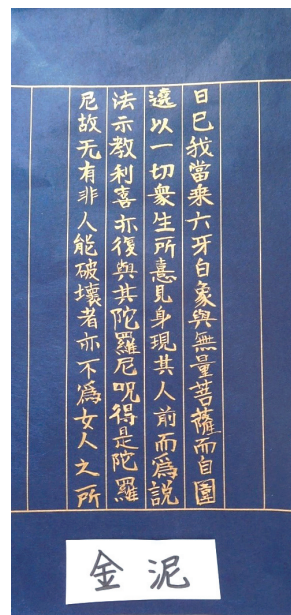
⑥ 完成写真



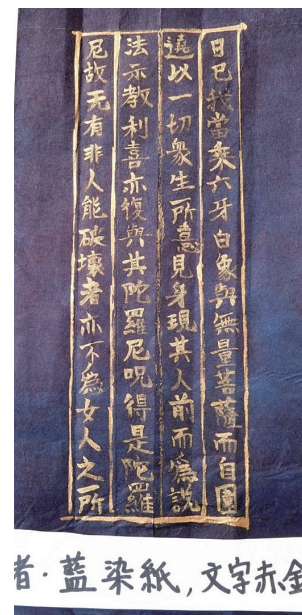
製作した複製断簡
「真鍮泥」(青金色)



製作した複製断簡
「真鍮泥」(赤金色)



製作した複製断簡
「金泥」



著・藍染紙,文字赤金
自作の蓼藍染め美濃楮紙に製
作した複製断簡
「真鍮泥」(赤金色)



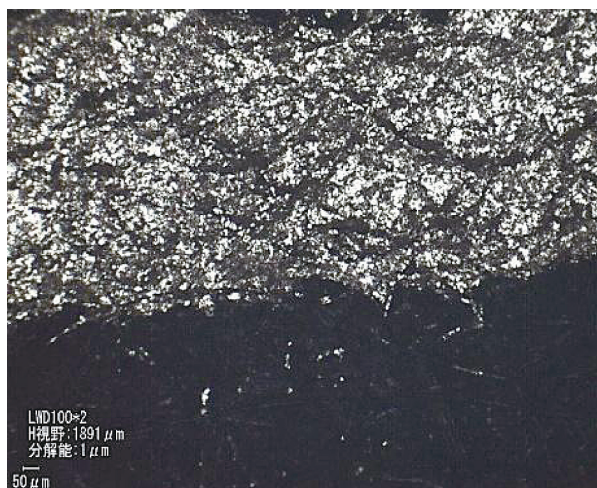
写真4 書写した金字写経比較写真



1 真鍮泥 (赤金色)『切』螢生前 200倍



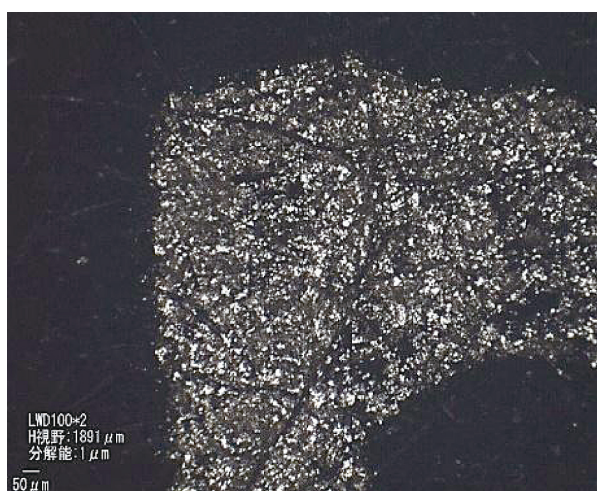
2 真鍮泥 (赤金色)『切』螢生後 200倍



3 真鍮泥 (青金色)『老』螢生前 200倍



4 真鍮泥 (青金色)『老』螢生後 200倍



5 金泥『諸』螢生前 200倍



6 金泥『諸』螢生後 200倍

写真5 書写した金字写経文字の拡大写真 (螢生前後)

- (4) アン・ニシムラ・モース、辻惟雄編『ポストン美術館 日本美術調査図録 第一次調査／仏画・仏像・仏具・袈裟・能面・水墨画・初期狩野派・琳派』（講談社、一九九七年）。データは「解説編」56独鈷杵（館蔵品番号21.156）・64三鈷杵（21.157）・76五鈷杵（21.158）にある。すなわちWilliam Sturgis Bigelow Collectionのビゲローが天台寺院で手に入れた可能性が高いと思われる。
- (5) 『都部陀羅尼目』大正蔵第一八に「金剛杵者是。菩提心義。能壞斷常二邊。契合中道。有十六菩薩位。亦表十六空爲中道。兩邊各有五股。五佛五智義。亦表十波羅蜜。能摧十種煩惱。成十種眞如。便證十地。」とある。
- (6) 拙稿「空海請来密教法具の研究（下） 請来仏具と東寺伝来品との関連において」（『日本文化史研究』二八号、一九九八年）
- (7) 拙著『日本の美術 No.五四一 金剛鈴と金剛杵』（ぎょうせい、二〇一一年）
- (8) 各部の法量は次の通り。把長一四・二、鬼面部張三・六、鈷長一三・一、鈷張一〇・七。
- (9) 注3書および奈良国立博物館編『増補 密教法具』（臨川書店、一九九三年）図版番号154。
- (10) 注(3) 書の図版番号65。
- (11) 『改訂 近江国坂田郡志』第三卷（名著出版、一九七一年）五六〇頁以下。
- (12) 『改訂 近江国坂田郡志』第四卷（名著出版、一九七一年）二八一頁以下。
- (13) 拙稿「『請来』伝承を有する密教法具の研究」（『鹿島美術財団年報』七号、一九九〇年）
- (14) 注(6) 書。
- (15) 注(9) 書の図版番号47

【後記】

調査にあたり福琳寺には格別のご高配を賜り、また和歌山県立博物館大河内智之・坂本亮太氏より懇切なご教示を頂いた。ここに記して深甚の謝意を表する。なお、掲出した図面は、奈良国立博物館編『密教法具』（講談社、一九六五年）所載図を複写したものである。

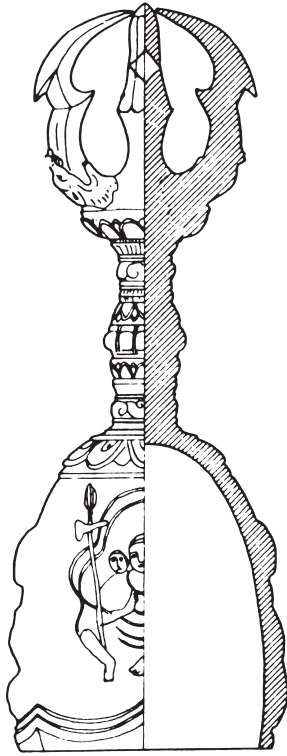


図7 金銅五大明王五鉤鈴（奈良国立博物館）



図6 金銀鍍八種種子五鉤鈴（東京国立博物館）

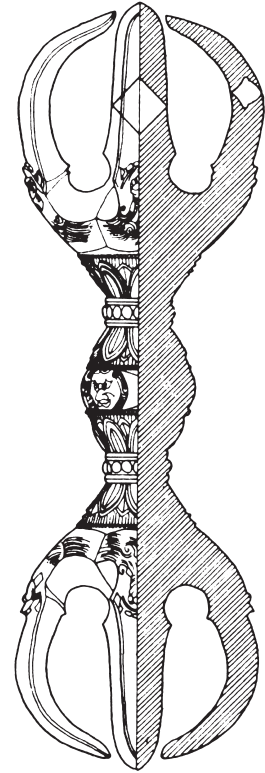


図5 金銅五鉤杵（香川・金刀比羅宮）

一方の旧百如庵杵は、鬼面式ではあるが、蓮弁帯は単弁八葉でこれを約条で締めている。約条は、中央の紐をわずかに太くつくって三線紐帯としたもので、これは先述のⅠ類に多く見られる特色であり、そのような古式の細部形式がここで踏襲された可能性がある。特に注意されるのが、福琳寺杵と同様ここでも脇鉤基部に竜口を備えるところである。

さらに形式的特色ではないが、鬼面部分に内割りを施し仏舍利と見られる納入品を奉籠するところも、東寺蔵の弘法大師請来法具に見られる舍利奉籠の古制を踏んだのであろう。だとすると古例に通有の三線約条を施すことも頷ける。

まとめにかえて

以上、近世の製作にかかる二口の三鉤杵を取り上げ、細部形式における「典拠」もしくは「古様の踏襲」という視点で考えた。法具自体が形式化や形骸化に陥る時代にあつて、高僧の所持など特殊な意味を付帯させる場合、汎用品と差別化するために、こうした特色ある細部形式を加えたものと思われる。

本稿では、金剛杵の場合に限って見てきたが、もちろん金剛界系と胎藏界系の差異や、空海請来様などに典拠主義的な理解が可能と考える。課題としつつひとまず稿を閉じたい。

注

- (1) 北澤憲昭『美術のポリティクス―「工芸」の成り立ちを焦点として』（ゆまに書房、二〇一三年）ほか。
- (2) 権田雷斧『密教法具便覧』丙午出版社、一九一七年
- (3) 和歌山県立博物館『西行―紀州に生まれ、紀州をめぐる』（同館、二〇一八年）二九二―三頁。

川)畔の丘上にあった草堂で、安永年間(一七七二―一七八一)に僧慈芳が景勝を愛でて創建したという¹¹⁾。慈芳は、能登瀬に生まれ十五歳にして比叡山に入り、善光院慈門僧正の門弟となって剃髪、慈芳と号した。四十三歳で安楽光院に入り、戒を持して律師となり、京都の一樹庵に住した後、江戸に赴き輪王寺准三宮公遵法親王に侍仕した。五十歳で帰郷し、天の川の小丘に草庵を結び、千界山百如庵と号して、世人からは百如和尚と呼ばれたという。文化元年(一八〇四)に七十四歳で没した¹²⁾。銘文中の「百城遺附」は百城すなわち百如(慈芳)の遺物という意であろう。

④二作例の細部形式

次に福琳寺杵と旧百如庵杵の細部形式と、その特色を見る。まず福琳寺杵には、覺錢所持という伝来が伴う。金剛杵をはじめとする密教法具にはしばしば特定の僧侶に帰される請求伝承や所持伝承が付帯することがある。たとえば、「弘法大師所持」、「慈覚大師請求」などは、すでに紹介されており、筆者はかつて「請求伝承」を有する密教法具について述べたことがあるが、これらは「異形式」を示すことがしばしばである¹³⁾。

ここでの異形式とは、もちろん最も汎用している鬼目式金剛杵、あるいは鬼面式金剛杵と異なる形式を多く有するということである。このことについてもすでに詳細を述べたので、ここでは概略のみに留める¹⁴⁾。すなわち一般的に、鬼目式金剛杵(普通金剛杵)の細部形式として、把部では、中央に鬼目、その左右に約条(紐)で締めた八葉蓮弁(素弁または単弁)、そして脇鉦の基部に嘴形を表す、といった点が通有である(図3・4)。一方の鬼面式では、把部の中央に鬼面、その左右に連珠文帯で締めた八葉蓮弁(重弁)、さらに脇鉦の獅嘴を表す(図5)、といった点を挙げることもできる。

なお、鬼目式と鬼面式の水金剛杵は、製作が中世に遡る現存遺品を見る限りで

は、その数は鬼目式が圧倒的に多数であり、これは近世になってからも同様、むしろさらに比率が高まるものと想定される。

さて福琳寺三鉦杵は、鬼面式杵であるから、蓮弁を連珠文帯で締めるのは常套である。しかし蓮弁帯は四葉であり、とりわけ凸形に近い形状で中に子葉を入れる蓮弁の形状は、管見では他例を認めない。強いて挙げるとすれば、東京国立博物館蔵の金銀鍍八仏種子五鉦鈴(図6)の鬼目下方に表された蓮弁が類似の作例として挙げることができる。同五鉦鈴は、鈴身の側面に大日如来を除く金胎両界八仏の種子を配したもので、総じて異趣を示す細部形式が特色である。この鈴については改めて述べる機会を持ちたいが、この細部形式には、金剛界と胎藏界の各々の性格付けを折衷的に表したところがあり、しかも鈴の表面も鍍金と鍍銀を使い分けるなど、一口の水金剛鈴として完成するまで様々な考慮が行われた形跡が看取される。

福琳寺杵でもう一つ注目されるのが、脇鉦基部の竜口である。前述の通り脇鉦の基部は一般的には、鬼目式は嘴形、鬼面式は獅嘴が通有であり、ここを竜口とする鈴は希少で、わずかに茨城・逢善寺五鉦鈴の脇鉦基部に獅嘴風の竜口が認められるのみである¹⁵⁾。ただし、注意されるのは、脇鉦基部の竜口は、唐宋代の製作とされるいわゆる「仏像鈴」においては、むしろ通有であるということである(図7)。仏像鈴は、鈴身の側面に明王像、四天王像、あるいは梵天・帝釈天・四天王像を鑄出した水金剛鈴を指すが、そのほとんどが請求品で、中には高野山水金剛峰寺蔵の独鉦四天王鈴のように空海請求の伝承が付帯するものもあることは留意しておかなければならない。仏像鈴の現存遺品を通覧する限りでは細部形式にあまり統一感認められないが、竜口だけはほぼ通有である。つまり竜口を表現することで、あえて請求品になぞらえようとしたのか、あるいは諸師所持品としての由緒を踏襲しようとしたものなのか、何らかの意図があった可能性は捨てきれない。

見られるが現状では確認がたい。総長一八・二センチ^⑧。三鈷杵の形状にあわせた扁平なつくりで、鈷部に比べ把部を長くつくる。把部は、中央に鬼面を表裏で正逆に表し、その左右に連珠文帯で締めた間弁付きの四葉（弁）蓮弁を配すが、各々の蓮弁は、途中で中央を細く延ばして凸状とし基部に二個の子葉を表す。また先端部をのぞかせる間弁も凸状としている。また蓮弁の先端には蕊を表す。

鈷部は、中鈷と脇鈷から成り、中鈷は下方に節をつくり、脇鈷は下方に竜口を表して、内側に節をつくり出す。中鈷は節から先端に向かつて若干太くなり、脇鈷は竜口の先から内側に弧を描き、先端部分で上方に向かつて反り中鈷と接する。また竜口より下方には輪郭に沿って細い樋を彫る。

一方の旧百如庵三鈷杵は総長一五・九センチ^⑨の白檀製で、彩色等を一切しない素木から彫出したものである。形状にあわせた扁平なつくりで、鈷部に比べ把部がやや長い。把の中央に鬼面を配し、その左右に三線の約条で締めた間弁付きの八葉蓮弁を飾り、花卉の先端には蕊を細かく刻む。

鈷部は、中鈷と脇鈷から成り、中鈷は下方に節をつくり、脇鈷は下方に竜口を表して、内側に節をつくり出す。脇鈷はいわゆる牛角形で、中途まではほぼ直線的に伸び、そこから鈷先にかけて急激に曲がり、鈷先は接着する。また竜口より下方には輪郭に沿って細い樋を彫る。

なお、把中央の鬼面部分に内刻りを施し、ここに納入品を奉籠している。鬼面の一面分を蓋状にして密封しているため、他見を許さず納入品の実体は不詳である。

次にそれぞれの伝来等について簡単に記しておく。

③伝来等

福琳寺は、和歌山県紀の川市豊田にある真言宗の寺院である。本寺に伝存す

る十七世紀の『紀陽那賀郡金岡山後一條院福琳寺来由略記』には、本寺の縁起に始まり、境内や宝物等についての記述がある。それによると、本寺は、宝龜元年（七七〇）に沙門信行なる高僧が弥勒菩薩の示現を得てこの地に営んだ慈氏寺が草創である。のち後一條院（在位一〇一六～一〇三六）のところに勅願寺に定められ、寛仁二年（一〇一八）に七堂伽藍が建立された。長元年間（一〇二八～三七）には、平忠国の反乱にたいし、不動明王の前で朝敵退治の祈禱を行ったところ、霊瑞が多々現れたので、誅伐ののち、（後一條院は）守り本尊として春日作釈迦如来像を金堂に納め、永世鎮護の誓願をなされ、さらに一幅の素絹に自からの尊影を描き、堂上に掲げさせた。その後、莊園の寄進があり慈氏寺から金岡山後一條院福琳寺に改めたといふ。^⑩

本杵については、同略記の縁起の後に掲げられる堂塔・什宝類の記載に、

一 弘法大師御所持之三鈷、密嚴上人御伝来、上人ヨリ当寺ニ御寄附

とあって、本杵が弘法大師の所持の三鈷であり、のち密嚴上人（覚鑊）に伝授され、上人によって福琳寺に寄附されたという。

後者の旧百如庵三鈷杵については、収納箱が付属しており、その蓋表に、

江州阪田郡能登瀬村百如菴什物

三杵

百城遺附

とあって、これらの法具が近江阪田郡能登瀬の百如庵（庵）の什物であったことがわかる。ここに見える百如庵は、『改訂 近江國坂田郡志』によれば、かつて同郡息長村大字能登瀬（現米原市能登瀬）の西南に流れる天の川（現天野

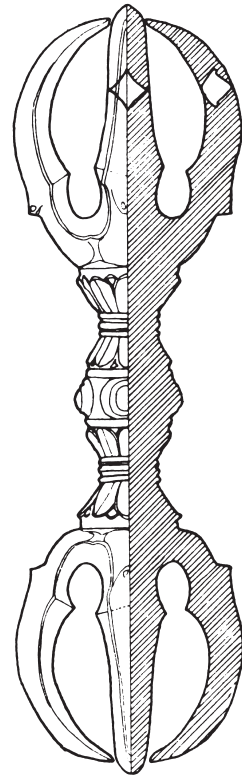


図3 I類 金銅五鈷杵（香川・弘憲寺）

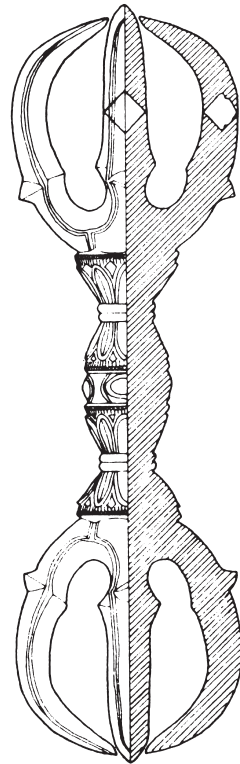


図4 II類 金銅五鈷杵（個人）

しかし、おおむね近世の金剛杵の多くは、仏具製作を専らとする鋳物師や職人によって製作されるのが一般的であるから、ここでは精粗の差が大きく、形状にも幅が生じ、形骸化も起こしやすい。ただすべてがそうなるわけではない。一部には特殊な細部形式を有し、先述の「典拠」といったものを認めてよい例がある。さらに手本となる金剛杵から直接型取りして写すこともしばしば起こる。鏡でいえば「踏み返し」という作業に相当する。すなわちそのように写された金剛杵は、形式は古式のままの状態であるから、材質や銅色、型取りによる細部表現のあいまいさや、鋳上がりの状態などといった検討を経て、後世

の作と判じなければならぬ。

本稿で取り上げる二件の金剛杵はいずれも近世の製作にかかっているものである。福琳寺杵は一口のみであるが、旧百如庵のものは、同一の法量・細部形式をもった独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵のセットである。次に二件の金剛杵について概要を記す。なお記述にあたって、福琳寺杵が三鈷杵であることから、とくに記載しない限り旧百如庵の作例については三鈷杵を念頭において記述する。

②品質・形状

福琳寺三鈷杵は、銅鋳製で、当初は全面が鍍金に覆われていたと

表1 金剛杵・金剛鈴にみる古様（I類）と新様（II類）

	I 類	II 類
(金剛杵・金剛鈴)		
①	鈷先が鋭利で、武器本来のかたちを留める	鋭利さが減じる
②	中鈷の先端が脇鈷のそれより長い（中鈷の先端が突出する）	中鈷と脇鈷の長さがほぼ等しくなる
③	鈷（とくに中鈷）に匙面を取る	鈷の匙面はなくなる
④	脇鈷の横張が大きく円形に近いカーブを描く	脇鈷が横に張ってから急激に窄まる“牛角形”を呈する
⑤	鈷部が把部に比して長い、もしくはほぼ等しい	鈷部より把部が長くなる
⑥	把部を飾る蓮弁帯が素弁である	蓮弁帯は単弁が多くなる
⑦	蓮弁帯を締める約条が三本である	約条は二本が一般的となる
⑧	鬼目が円形に近く、その突出が強い	鬼目は横長楕円形が一般的となる
(金剛鈴)		
⑨	鈴身部は笠部から緩やかに広がり、下方で急激に開かない（外反りしない）	鈴身部は笠部からほぼ垂直に下がり、下方で急激に開く（外反りする）
⑩	鈴身と柄部を一鋳する	鈴身と柄部を別鋳し、柄差しして固定する

『部陀羅尼目』では、五鈷杵の五鈷は、五智五仏、両方で十波羅蜜を表し、これが十種の煩惱を摧破し、十種の真如を得る、などといったような意味付けが認められる。

このように鈴杵の形姿や各部の形式・意匠は、複雑な背景をもつこととなり、様々な場においてこれを読み解くことも必要となる。

ところで、密教の伝来当初、諸師によつて請来された法具はいわば「根本法具」として伝襲の祖となるわけであるが、密教の普及や教理・儀軌の様々な解釈が進むと、たとえば金剛杵の特定の詳細形式に、諸師の意味付けや解釈が持ち込まれ、さらにオリジナリティの強い法具が製作されることもある。宗派や特定流派にのみ踏襲され、さらに師資相承の意を承けて師から弟子へと伝襲されることもしばしばであったろう。とくに本稿では詳述しないが、空海請来の法具類の細部形式は、法具製作の際に何らかの規範とされたことが指摘できる。⁶⁾それは同一の器種へ写される場合のほか、特定の特徴や細部形式が別の器種に応用される場面もある。金剛鈴の把部の形式が、新たに製作される金剛杵の把部の形式に踏襲されるといった場合である。つまり「典拠」とでもいうべき在り方である。



図1 銅三鈷杵（福琳寺）



図2 木製三鈷杵（旧百如庵）

しかし経年による形式の伝襲・踏襲を様々に繰り返しながら、密教の普及による需要の増加に応じて、一方では一つの汎用形式に収斂される場合もある。金剛杵でいえば、把中央に鬼目を表した「鬼目式金剛杵」がそれで、これに次ぐのが「鬼面式金剛杵」である。ただし鬼面式は、しばしば胎藏界系の法具としての性格が付与されることがあり、鬼目式の汎用性から見れば使用が限られている。

さらに金剛杵・金剛鈴の細部形式は、経年によって変遷する。筆者はかつて鬼目式を基本とした金剛鈴・金剛杵における各部の形式変遷について、十の視点を定め、それをもとに遺品を大きくⅠ類（図3）・Ⅱ類（図4）の二つに分類（表Ⅰ）し、その画期を概ね十二世紀前半においた。⁷⁾つまり鬼目が正円形から楕円形へ、蓮弁が素弁から単弁へ、約条が三線から二線へといった変化は、Ⅰ類からⅡ類への変遷の中でのほぼ共通して認められる。つまり、このⅠ類を「古様」、Ⅱ類を「新様」と言い換えれば、後世においてあえてⅠ類の特徴を表すことによつて、古様や古制を暗示させる作品を生み出すこともできるわけである。これをここでは「古様の踏襲」と捉えておきたい。近世法具を鑑するとき、こうした「古様」という視点で留意があってもよい。

用語にたいする懸念は払拭できるのでなかろうかと私考する。

さて、総称としての「仏具」には、さらに主にその用途に応じて「荘厳具」、「供養具」、「僧具」などとカテゴライズすることがしばしばであるが、もちろんこの場合の「荘厳」や「供養」といった言葉も、時代や場の違いによっては、意味するところに相違を生じることもあり、おおまかな分類としては可能であっても、学術的な厳格性の中ではやはり各々の用語の指し示す範囲を示す必要があろう。

さて本稿では、密教修法の所用具である金剛杵について考察するが、これらは今日、総じて「密教法具」と呼ぶカテゴリーに含むことが一般的である。密教の「修法」という場で用いることで、「法具」という言葉が用いられる。歴史的にはこれらはむしろ「道具」や「密具」という用語で見えるが、仏教における「道」はふつう「仏道」を意味し、また「法」という言葉は意味するところが多様であるから、用語としては必ずしも相応しくない。「密教法具」という用語が生まれる端緒は、管見には権田雷斧師の『真言密教法具便覧』(一九一七年)^②であるが、しかし師はその「序」において、「密教法具」という言葉は全く用いず、これも歴史的にしばしば用いられる「密具」という語を用いている。したがって、現在一般化されている「密教法具」という語も正確を期すなら「密具」あるいは「密教具」が相応しいかと思う。そしてここから発想するならば、「仏教工芸品」という語は、「仏教具」という用語で一般化されるのではないか。本稿では従来の「法具」という語を用いるが、今後さらに議論が深まることを期待したい。

一、二口の近世金剛杵

①密教法具と金剛杵

本稿では、二件の近世金剛杵を提示する。一件は、和歌山県・福琳寺所蔵の銅三鈷杵(図1)^③で、もう一件は、ボストン美術館所蔵の木製独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵のうちの三鈷杵(図2)^④である。ボストン美術館の作例は、後述する通り、かつては近江・百如庵に伝来したものである(以下、「旧百如庵杵」として記述する)。

作例の紹介を始める前に、密教法具からどのような情報を得るかについて若干触れておきたい。密教法具は儀礼(修法)空間で用いられるからこそ、まずその具が修法空間の中で如何なる役割をなすのかを見なければならぬ。例えば大壇(修法壇)上の法具であれば、金剛杵、羯磨、四槩といった具と、火舎、花瓶、飲食器、六器といった具との性格の違いがある。前者は、本来的に古代インドにおける武器に遡及でき、「降魔」、「結界」、「浄化」などの役割を担う。したがって造形的には武器としての本来的な鋭利・尖鋭な形が求められる。一方、後者はいわゆる香、花、燈、飲食といった修法本尊への「供養」の具であり、そのかたちは必ずしも法具に限られるものではない。

大壇上に金剛鈴や金剛杵を配置した場合、これらは各具のもつ実用的な役割をもちつつ、諸尊を象徴する「三昧耶形(三形)」としても認識される場合がある。例えば、五種杵や五種鈴が五仏に擬される場合などで、これは鈴杵に限らず、供養の具である火舎や花瓶などでも、金剛香菩薩、金剛華菩薩などの三昧耶形を意味するなど同様である。

そればかりではない。金剛杵や金剛鈴では、それらの各部が尊格をシンボライズし、何らかの意味を持つとの解釈も見られる。一例を挙げれば、不空訳『都

近世密教法具の一断面 ―金剛杵における細部形式の踏襲―

関 根 俊 一

一、はじめに 仏教所用具について

仏教の儀礼空間内で用いる具は、各時代において呼称が異なり、意味する範囲が必ずしも一定ではないが、現代ではそれらを総じて「仏具・仏教工芸品」と呼んでいる。「仏教工芸品」という用語は、「美術」という概念が確立し、その中に彫刻・絵画などとともに「工芸」が位置付けられる明治時代以降に、さらに仏教関係ものを限って名付けられたもので、新しい造語である。「工芸」という言葉は、歴史的には新しい概念であり、明治時代には「工業」と同義とされたり、「工芸美術」と「工芸」を同時に使用したりする場合もあって、「工芸」という言葉の意味するところ、あるいはその概念が覆う範囲は変遷した¹⁾。今日、例えば『広辞苑』では「工作に関する芸術。製造に関わる技芸」、「大辞林」では「実用品としての機能性に、美的装飾性を加えて物品を作りだすこと。また、そうして作られた作品の総称。一般に、小規模なものをいい、建築は含まれない」、『ブリタニカ国際大百科事典』では「高度の熟練技術を駆使して作られた美的器物またはそれを制作する分野。応用美術、装飾美術などともいう。」とあって、おおむね「実用的価値と美的価値を兼ねそなえた事物の総称」あるいは「実用性と鑑賞性を兼ねた事物」とされている。

しかし今日の文化財のカテゴリーとしての「工芸品」は、本来「美術」の中に包摂すべき概念であるはずが、美的価値を有する「美術」作品とは、縁遠い作品もこの中に含めて考えられている。とくに時代が降った仏教関係の道具類には、そうした傾向が強い。したがって正確を期すならば、「工芸」という言葉は、注意深い概念規定が必要であるとも思われるし、「美的価値」あるいは「鑑賞性」という点での作品評価も必要となろう。ただ『文化財保護法』において有形文化財に属する「工芸品」（建築・絵画・彫刻などとともに掲げられるが、あくまで名称は「工芸品」であり「工芸」ではない。つまり保護法では「工芸」は「工芸技術」とほぼ同義で把握されていると推定される）が、その価値評価の基準は「歴史上又は芸術上価値（の高いもの）」（傍点筆者）となっており、必ずしも「鑑賞性」といった観点を求めているわけではない。

一方、「仏具」という用語も、明確な理解がし難い用語である。それは「仏」の解釈が一定でないからで、奈良時代の寺院資財帳などにおいては「仏分」、「法分」、「僧分」、「通分」などと記されるから、これを念頭におけば「仏具」のカバーする範囲はかなり狭まるのであるが、「仏」を「ほとけ」あるいは「仏教」の意で捉えれば、おおむね「ほとけ」のための「具」と考えられる。しかし、いずれにしても曖昧さや多様さを持つ用語であるということを念頭におくなら、学術用語としては「仏教関係具」とでもした方が、それぞれに背景を持つ



図9 藤島武二『画稿集』「東大寺戒壇院扉絵」石橋財団ブリヂストン美術館蔵

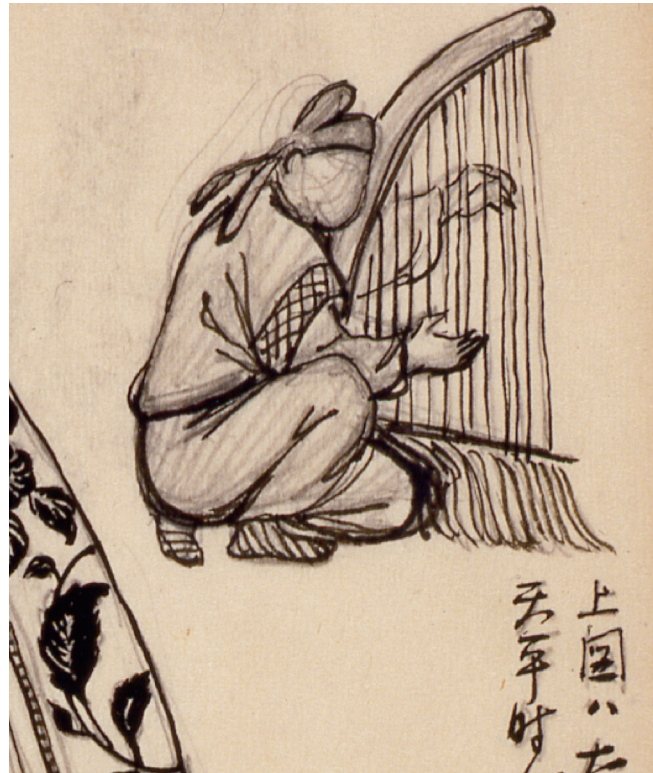


図10 藤島武二『画稿集』「墨絵弾弓」内に描かれている箏篋の演者（螺鈿槽箏篋の右上に描かれている）石橋財団ブリヂストン美術館蔵



图8 『稿本日本帝国美術略史』



図5 藤島武二『画稿集』「上品蓮台寺絵因果経」
石橋財団ブリヂストン美術館蔵



図4 藤島武二『画稿集』「吉祥天像」石橋財団
ブリヂストン美術館蔵



図7 「漆槽箏篋（復元模造）」宮内庁正倉院事務所蔵
1895年

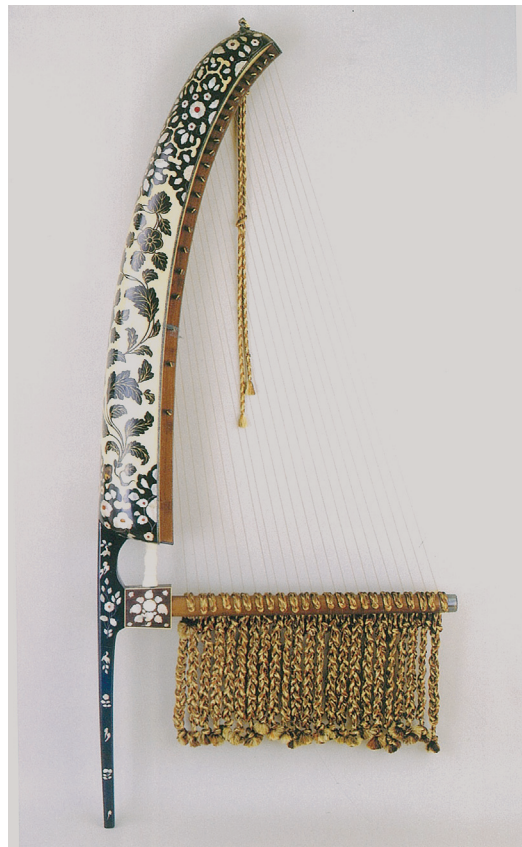


図6 「螺鈿槽箏篋（復元模造）」宮内庁正倉院事務所蔵
1895年



図2 藤島武二『画稿集』「鳥毛立女屏風」石橋財団ブリヂストン美術館蔵

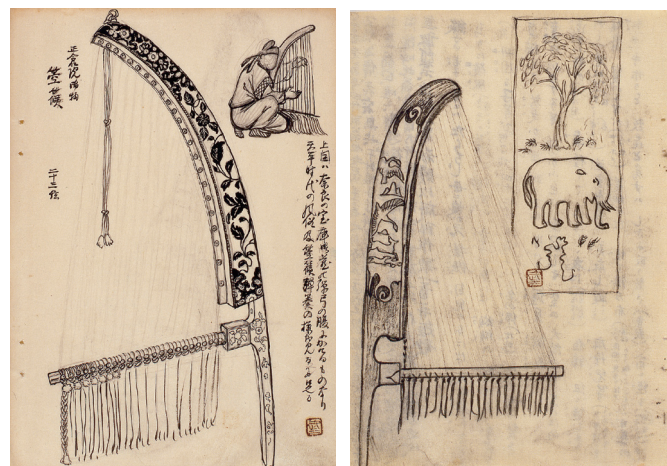


図3 藤島武二『画稿集』「箏篋」石橋財団ブリヂストン美術館蔵



図1 藤島武二「天平の面影」石橋財団ブリヂストン美術館蔵 1902年

註

- (1) 中田裕子「藤島武二『天平の面影』《詩音》そして《蝶》に表象された雅楽と西洋音楽（その1）」『プリヂストン美術館館報』三二号、久留米・石橋美術館、一九八二年
- (2) 上野健造「白馬会と歴史主題の絵画―藤島武二『天平の面影』をめぐって―」『美術史』一四〇号、一九九六年三月
- (3) 石井柏亭「日本絵画三代志」（創元社、一九四二年、一四五頁）
- (4) 河北倫明「藤島武二」（講談社、一九六三年四月一〇日、二七二―二八頁）
- (5) 前掲註（1）中田論文に図版の掲載があり、「一九五二年のプリヂストン美術館開館記念展の時に展示されていたが、以後行方不明である」という。
- (6) 前掲註（1）中田論文。
- (7) 「上野谷中の展覧会（四）」『読売新聞』一九〇二年（明治三五）一〇月一三日
「植野健造氏作成白馬会関係新聞記事一覧（データベース作成…東京文化財研究所）による」
- (8) 高橋隆博「明治八・九年の『奈良博覧会』陳列目録について（上）」『史泉』五六号、一九八一年一月
- (9) 高橋隆博「『奈良漆器』と吉田・北村家の系譜」（『ゆずり葉―北村大通・人と仕事』飛鳥園、一九九三年）
- (10) 東野治之「東京国立博物館蔵正倉院御物修繕還納目録…解題と翻刻」（奈良大学文学部文化財学科、二〇〇二年三月三一、三四頁）
- (11) 『官報』第一八〇九号、明治二二年七月一日。正倉院宝庫拝観手続の記載が「第三項にて左記列シタル者ニ限り拝観ヲ願出ツルコトヲ得」あり、この中で本文中に提示した者が挙げられている。なお、第六項というのは「拝観ヲ願フ者勅任官以上ハ直ニ、委任官ハ当該長官、有位有爵者ハ爵位局長若クハ地方長官、有動者及其他ハ地方長官ヲ經テ図書頭ニ願出テ又ハ便宜ニヨリ奈良県知事ヲ經テ図書頭ニ願出テ外国人ニ在リテハ各国公使館員及一時來航ノ者ハ公使、各雇傭員ハ当該長官ヲ經由シテ図書館頭ニ願出テ図書頭ニ於テ之ヲ許可シ其許可セル者ニハ認可証ヲ与ヘ同時奈良県知事ニ通牒スヘシ」を指す。
- (12) 『正倉院宝物拝観願人名簿』（東京国立博物館、明治二二年―明治二六年）
- (13) 『正倉院の研究』（東洋美術特輯、一九三〇年）

- (14) 「時報」（『美術新報』第一卷第八号、一九〇二年（明治三五）七月五日）
- (15) 小杉楓邨「寧楽の宝庫下篇ノ丙」（『考古界第二篇第四号』一九〇二年九月二〇日）
- (16) 河原由雄「二世紀の軌跡」（『奈良国立博物館の名宝―一世紀の軌跡』奈良国立博物館、一九九七年四月）
- (17) 『奈良国立博物館の名報―一世紀の軌跡』によると、宝物模造はいずれも明治二九年一〇月一六日に購入と記載されている。
- (18) 前掲註（2）植野論文。
- (19) 「天平の面影」と同時期『考古界』第二編第六号には、下村三四吉「筥篋につきて（承第壹号）」という論文が掲載され、筥篋の種類を区別している。このような論文の存在からも当時の人々の筥篋への関心が高かったことが伺える。
- (20) 前掲註（1）中田論文。
- (21) 前掲註（1）中田論文。
- (22) 藤島武二画集編纂事務所『藤島武二画集』（東邦美術学院、一九三四年）

〈謝辞〉 本稿で用いた図版の掲載にあたっては、宮内庁正倉院事務所並びに石橋財団プリヂストン美術館のご高配を賜りました。また本稿を成すにあたっては、奈良大学教授関根俊一氏のご助言を得ました。ここに記して深甚の謝意を表します。

所蔵者を「正倉院宝庫 御物」として正倉院に箏篋が残闕として伝わっていることを記した上、模造品であるにも関わらず「螺鈿槽」「漆槽」二張ともに掲載されていることからこのような指摘は的を射ている。¹⁹⁾

平安時代中期に行われた楽制改革で、音が小さいとの理由から廃れてしまった箏篋は、当時、現用の完形品は存在せず、このような神秘的なかたちに人々は惹かれたのであろうか。いずれにせよ、箏篋は他の正倉院宝物とは、認識が異なっていたと考えて間違いなからう。

藤島の『画稿集』には先述した通り、天平の遺品のスケッチがいくつか残されているが、特に箏篋を描いたものがいくつかある。正倉院宝物の模造箏篋(図3)、上品蓮台寺本の「絵因果経」の箏篋を持つ女性(図5)、これは「天平の面影」の女性ポーズのモデルであったかと思われる。さらに東大寺戒壇院厨子扉絵の箏篋を持った女性(図9)、正倉院宝物の「墨絵弾弓」に描かれている箏篋の演者(図10)などがスケッチされており、藤島も箏篋にたいして大変興味関心を抱いていたことが頷ける。

ただし注意深く検証すると「天平の面影」で描かれた箏篋は、現模造箏篋と明らかに大きさが異なっている。実際の模造箏篋は総高一八三センチ、幅八〇センチで、女性の平均身長よりも大きい、画中ではその三分の二くらいに縮小して女性に抱かせている。

これについて中田氏は、「正倉院模造の箏篋をもとに、その小型の複製、すなわちこの百済琴を造らせたのであろう」、そして「おちかというモデルに持たせて『天平の面影』を制作したものと思われる」と指摘されている。²⁰⁾つまり、藤島は小型の複製を所持したというのである。このことは、同氏が紹介する、藤島のアトリエと思われる写真の背景にある本棚に小型の箏篋(百済琴)が立てかけられていることから確認できるから、これが制作に際して参考にされたと見ることも可能である。²¹⁾

まとめにかえて

「天平の面影」は一般的には、歴史画のジャンルとして語られることが多いが、同時代に多く見られた日本神話などを主題とした作品とは、一線を画しているようにみえる。

すなわちそこに顕著に現れるのは、箏篋という古の楽器を起点とした「天平」という時代へのイメージの展開である。そして『藤島武二画集』で、石井柏亭が「これは多分正倉院御物箏篋其他が帝室博物館の為に模造された頃に起った、上古の憧憬と関連する所があつたかもしれない」と述べたように、²²⁾その背景には正倉院宝物の存在が大きくあつた。言い換えればそれは、明治三〇年代に興った「天平回顧」というべきものの底流に、奈良博覧会における宝物公開に端を発した、正倉院宝物への憧憬があつたといっても過言ではないだろう。

本稿では、とくに「天平の面影」に見る「箏篋」が正倉院宝物をもとに制作された模造であるということを確認し、さらに当時の宝物模造制作の実態を可能な限り明らかにしながら、藤島がいかにそれに接し得たのか考察した。まだまだ憶測の域を超えない事柄も多く、成果も些細なものであるが、今後さらに史料の博搜に努めていきたい。

また、筆者は本稿で述べた「天平ブーム」の起点を「奈良博覧会」における正倉院宝物の一般公開にあつたと考えている。それまで秘されていた宝物目の当たりにできるようになったインパクトは、各方面、とくに美術界に少なからず影響を与えたはずである。今後は、このことについても改めて論じるつもりである。

所収の正倉院年表によると、明治二五年（一八九二）に「曝涼拝観を中止す」との記載がある。¹³そこで以後の『官報』を参照すると、再び曝涼のことが報じられるのは、明治四三（一九一〇）一〇月二〇日からであるから、明治二六年頃から四三年頃のこの間が中止期間であったことが想定できる。このことを勘案すると、明治三四年（一九〇一）に藤島が奈良を訪れた際には、正倉院の曝涼公開は行われておらず、藤島が正倉院宝庫内で模造箆篋を見る機会はなかったと考えてよい。

正倉院宝物は、奈良博覧会のあと明治時代には公開されていないが、模造・模写の類は、帝室博物館において展示されることがあった。まず東京における事例を挙げると、明治三五年（一九〇二）、東京帝室博物館の三号館で開催の展覧がある。芸術家の参考となるべき古美術品及び古美術工芸品の模本を陳列したものであり、『美術新報』（同年七月五日付）によれば「正倉院の雛形及び建築家伊藤平左衛門氏の製作せる高貴殿（寺院の本堂、山門と藤原式の殿堂を折衷せる建築物）をも陳列する筈なると」¹⁴いうものであった。しかし、この展覧会の出陳品についての情報は不詳で、箆篋が展覧された事実も確認できない。仮に七月五日の直近で展示が始まり、藤島がこれを実見し得たとしても、「天平の面影」が出品される九月二〇日の白馬会展まで二か月余しかなく、この間に成画に至るのは困難と言わざるを得ない。とするとやはり藤島は、奈良旅行の行程の中で、正倉院以外の場所で模造箆篋に接したと考えるのが妥当であろう。

ここで留意されるのが小杉楳邨の次の一節である。小杉の論文「寧楽の宝庫」の中で、「これらの模造品は、なほ博物館に陳列す」¹⁵として、奈良帝室博物館で正倉院宝物の模造を陳列し、展示が行われていたことを明らかにしている。

奈良帝室博物館は、明治二八年（一八九五）に「帝国奈良博物館」として開館した（のち明治三三年に「奈良帝室博物館」と改称）が、開館当初、館藏品

は潤沢でなく、社寺等の出品もない変則的な展覧であったという。間もなく「古器旧物」の保存を旨とした社寺寄託品も増加し、展示品の充実を図っていったらしい。¹⁶そうした中で、奈良博覧会社が制作した正倉院宝物模造品は、明治二九年十月一六日付で買い取られ館藏品に加えられている。¹⁷その後は、このような模造品の展示も重要な一角を占めたのであろう。あくまで憶測の域を出ないが、明治二八年に完成した模造箆篋は、これら博覧会社制作の模造類とともに、展覧に供され、藤島はこれを目にしたと考えられる。

ところで、藤島が魅せられた模造箆篋は、他と比較し特別なものであった。箆篋という楽器自体、早くに廃れてすでに使われていないものであるのみならず、オリジナルが良好な状態で残っているような宝物の模造とは異なり、原宝物が大きく欠損しているところから、復元には少なからず研究を要したという点である。これまでして箆篋の模造が行われた背景には、明治天皇が刀剣や楽器にたいしてとりわけ関心が高かったということが挙げられ、エキゾチックな形態の箆篋復元が早くに進められたのも、そうした理由からと考えられる。

植野建造氏は、当時の箆篋への関心を次のように述べている。

明治二〇代から三〇年代にかけては正倉院宝物の調査、整理が行われていた時期にあたるが、箆篋と樹下美人図は正倉院宝物のなかでも当時最もよく知られた遺品であったようである。したがって箆篋と樹下にたえずむしる婦人とは、天平という設定を最も直截に連想させるモチーフとして採用されたとみてよい。¹⁸

箆篋は、原宝物が残欠という状態でありながら、天平時代を代表するような存在であったというのである。『稿本日本帝国美術略史』では、第四章「聖武天皇時代」の項に、正倉院宝物が図版として五〇点余り（図8）掲載されるが、

としての模写・模造事業も終了した。作られた模造品は、後述するように博物館の買い上げとなって、現在でも奈良国立博物館などに保管されている。

奈良博覧会社の事業は、文部大丞町田久成や文部省出仕蜷川式胤の誘導があった可能性が高橋隆博氏の研究の中で指摘されているが、博覧会社主導の事業とあわせて、町田や蜷川の主導による模写・模造事業も遂行され、第一回博覧会の時に、海野勝眠、山名貫名・菅鳳らにその任が与えられている。その後、明治一〇年（一八七七）、明治天皇の奈良行幸とあわせて宝物御覧が計画されたこともあって、町田はあらかじめ宝物を点検させ、とくに破損が多い宝物については修補することを促している。結果、十数点の正倉院宝物を東京へ送り、内務省博物館で修理が行われることとなった。⁹⁾

こうした国家主導による宝物の修補、模写・模造事業は、明治二五年（一八九二）、専らその事業を担う「正倉院御物整理掛」が設けられると、翌年一月より、明治三七年（一九〇四）まで、赤坂離宮においてかつてない規模で行われることとなる。

三、模造箆篋制作の事情

このような模造事業によって制作されたものの中には、当然のことながら「天平の面影」で描かれる箆篋も含まれる。この復元に当たっては、先述の通り手本とすべき原宝物は大きく破損していた。したがって「正倉院御物修繕返納目録」によると、「因テ古図中ノ物ニ就テ之ヲ推シ姑ク模造シテ参考ニ供ス」として「古図」に描かれた箆篋を参考にして行われた。明治三四年（一九〇一）、農商務省によって編纂された、いわば政府初の公式美術史書とでもいえる『稿本日本帝国美術略史』には、「二つとも此の破片に據りて、正倉院寶庫御物整理擔任の稻生眞履、天平當時の古圖を參して自ら製作せしものなり」と御物整

理掛の稻生眞履が製作にあたったことが記されている。

原宝物の箆篋は、「修繕返納目録」の記載によると、奈良から東京に移送され、明治二八年（一八九五）一月に修理を終えて奈良に戻ったこと、そして「附模造壺張」とあることから、原宝物とともにどちらかは不明であるが、一張は奈良へ送られたようである。藤島が明治三四年（一九〇一）に奈良で模造箆篋を実見したというのは、おそらくこの箆篋を指すのであろう。では、藤島は奈良のどこでこの模造箆篋を見たのであろうか。

正倉院では明治二〇年代から宝庫の定期曝涼が行われており、明治二二年（一八八九）から手続きの規定を定め、これによって一定の資格があれば宝庫内での宝物の見学が許されていた。その資格とは、「高等諸官員・有爵者有位華族・勲六等以上・従六位以上・諸博士諸学士・歴史、美術、工藝、専門篤志者・第六項ノ手續ニ依リタル外国人」¹¹⁾であった。東京国立博物館には、明治期の「曝涼中御物拝観人名簿」が保存されている。ここには「規定」の通り美術家の名前も見られる。県内の美術家たちはもちろんのこと、多くの美術関係者たちが足を運んでいる。一部を紹介すると、明治二二年（一八八九）七月二一日には、東京美術学校教諭橋本雅邦、川端玉章、明治二三年（一八九〇）には、東京府平民美術専門として市河三兼、大坂府平民美術専門として中谷豊吉、中谷房吉、明治二四年（一八九一）東京府平民美術専門として海野美盛、明治二五年には七月二八日に京都府平民美術専門として竹内栖鳳、飯田新七、大澤芳太郎、旭玉山、三宅呉暁、竹内善三郎、池田清助、山田文厚、安田新造、古川喜三郎、三重県平民美術専門として福地復一らが訪れ、宝庫内で天平工芸の美に触れている。¹²⁾正倉院拝観の門戸は、美術家たちにも開かれていたということとは、留意しておいてよいであろう。

しかし、このような曝涼の機会は、やがて一時中止を余儀なくされる。「曝涼中御物拝観人名簿」は明治二六年分まで存在するのであるが、『正倉院の研究』

余輩多くをいふを好まざれども、一言以て注意したきハ其面貌に在り。作家が選びし彼の面長の相貌ハ因果経に依りしか何れによりしかを詳にせずと雖も、作家が基きたりといふ樹下美人も、吉祥天も、日天月天も共に一種の天平顔とも称すべき下彫れる円き面貌にて、彼の如く細長き相貌ハ余輩の知れる限りの天平時代の絵画彫刻に於てハ未だ曾て見ざる所成。固よりこハ作家がモデルとしたる婦人の相貌の斯の如かりしにも依るべけれど、苟くも天平の面影といふ以上ハ少しく此辺にも注意ありたき者成。且やその相貌のみならず、其時代精神の特徴ともいふべきを、髻髷として形相の上に表現せざれば作家が當初の意志にも反するなるべし。記して以て成画の後を俟つ（仏）。

この記事から明らかであるが、藤島の奈良旅行における見聞の成果が「天平の面影」として昇華し、白馬会展覽会では天平研究に裏付けられた描写、賦彩が好評価を呼んだ。背景の金地については、記事中に「衝立にとて描かんとせし其半隻にして」とあるように、当初は衝立が念頭におかれたことによるのであろうが、その評判は賛否両論があったものの、総じて良かったという。なお、金地背景には、明治三〇年（一八九七）第二回白馬会展に発表された黒田清輝の「智・感・情」の先例がある。

先述したように、ここで留意すべきは、藤島がこの絵を描くにあたって、まず「天平」に惹きつけられたのが「正倉院に珍襲した箆篋」にあったことである。箆篋が聖武天皇の頃に大陸より渡来したという伝説に基づき、それに種々の歴史的事実を加え画題にいたったのであり、当時の大陸文化受容のさまを彷彿させる一つの典型を、箆篋という楽器に求めたのである。だからこそこの絵における箆篋の重要性を考慮することは、とりわけ大事なことと思われる。

しかし藤島が「天平の面影」中に描いた箆篋は、その細部にわたる意匠を検

証すると、現在正倉院に蔵される「螺鈿槽箆篋」（図6）の模造に基づいていることが知られる。正倉院に現存する奈良時代の箆篋には、南倉に蔵される「漆槽」（図7）と「螺鈿槽」の二張があるが、いずれも大破した状態であり、仮にそれらを藤島が目にしたとしても、そこから絵画中のような完形箆篋を復元することは困難と思われることと、当時、次に述べるように、正倉院宝物の模造制作が盛んに行われ、その一環として螺鈿槽と漆槽のいずれの箆篋の復元模造が制作されているからである。画中の箆篋は、その槽の特徴的な意匠が螺鈿槽箆篋の復元模造品と同一と認めてよいであろう。

一、明治期における正倉院宝物の修理と模造制作

さて、藤島の描いた箆篋が正倉院宝物の模造であったことから、ここでは明治期における正倉院宝物の模造事業について、少し触れておくこととしたい。正倉院宝物の模造制作は、まず明治八年（一八七五）から二三年に（一八九〇）かけて東大寺大仏殿で一五回にわたって開催された「奈良博覧会」を主宰した官民合同の「奈良博覧会社」によって行われている。この時の模写・模造事業には、吉田辰造、三谷喜太郎、大西勇斎、山下嘉七、木谷樽造、森川杜園、西京長平ら、主として地元の工人たちが参画し、地場の工芸振興に資することが目的であった。そしてこの流れは、「奈良漆器」へとも継承されて行く端緒となった。

一方、正倉院宝物の博覧会への出陳は、第一回の明治八年（一八七五）を初度として、九年、一一年、一三年、一四年の五回にわたり大仏殿内にガラスケースを仮設して展示された。人々の関心は高く、第一回の入場者は二〇日間で一七万二〇一〇人を数えた。しかし一方で、湿気による宝物への影響を危惧する声も高まり、一四年以降、奈良博覧会への宝物貸与が禁止になり、付属事業

スピレーションを受けたことが明白である。本作は白馬会の外光派的な画面から脱し、装飾的な藤島のスタイルの確立へと向う明治浪漫主義を代表する作品として位置づけられると同時に、石井柏亭が「洋風画家が天平の服装を利用した最初の試みとして（日本画の方は既に観山の光明皇后があつた）追憶さるべきである」と評価している通り、画期的な作品であつた。

「天平の面影」は、明治三〇年代頃に端を発する「天平ブーム」とでもいふべき時代の火付け役を担った作品として、その意義は極めて大きく、事実、本作が描かれたことによって、後進の画家たちは大きな影響を受けた。とりわけ青木繁は「天平の面影」に刺激を受けて「天平時代」を描き、これがのちの天平シリーズに繋がっていったといわれており、清見陸郎が「日本画家ながらも、次第に清新潑刺の氣に富む西洋画の方へと心を惹かれて行きつつあつたその頃の私は、わからぬながらも白馬会の展覧会へは毎回楽しみに出かけて行つたものだが、当時目にした多くの作品中でも、『天平の面影』などは、最も強く心を動かされたものの一つだつた。」と述べているように、白馬会展において、最も衆目を集めた作品の一つであつたことは間違いない。

藤島が天平を題材としたのは、もちろん「天平の面影」だけではない。翌年三六年の第八回白馬会展には、女性が阮咸を演奏している「諧音」を発表し、さらに「天平時代」という作品では船上の女性と子どもと合わせて箏篋を描いた。

こうしたいくつかの作品に結実した、藤島の天平研究についての全容は、いまだに紹介されていないが、彼の画稿集（石橋財団ブリヂストン美術館所蔵）を一瞥するだけでも、そのことは十分に頷ける。藤島の残した膨大な画稿集の中には、鳥毛立女屏風などの正倉院宝物（図2）、模造箏篋（図3）、薬師寺の「吉祥天女画像」（図4）、上品蓮台寺の絵因果経（図5）などのスケッチが認められる。

ただし、ここで注意をしておかなければならないのは、藤島がとくに興味を抱いた天平の楽器が、いずれも明治期にすでに廃れて用いられることのなかった、いわばその存在すら忘れ去られていたであろう箏篋や阮咸であつたことで、とくに「天平の面影」では箏篋のもつエキゾチックなために、作品の最も重要な役割を託しているかのようである。

ところで、これらのスケッチは、「天平の面影」を描く前年、明治三四年の奈良旅行の時のものが多く含まれていると考えられている。すでに中田氏、植野氏も指摘されているが、明治三五年（一九〇二）一月一三日付の『読売新聞』「上野谷の展覧会」によると、藤島は奈良に旅行に行った際に、正倉院宝物の箏篋をはじめ、仏像、仏画など古代の物品を見て、これらを参考にしながら作品の構想を練つたとする記載がある。長くなるが左記に引用する。

天平の面影 作家藤島武二氏人に語りて曰く、此画を描くに至りし動機とも称すべきハ昨年奈良に遊びて普く古画古仏像を涉獵し端りなくも正倉院珍襲の箏篋を一見したり。抑も此の箏篋ハ今より一千年の昔聖武天皇の御宇知ろし召す天平の頃渡来したりとの伝説に基き種々の歴史的実を湊合して終に画題に想到したるにて、その目的ハ及ばずながら是れに依りて以て當時随唐との交通甚しく我国の文物制度ハ悉く其風を模倣せし其情態を髣髴として画面に表現せんとするに在り。而して之を描くにハ古代画風により、婆娑たる天女の服装の如きハ天平時代宮中貴嬪の服装を混じて彫刻したりとの説ある浄瑠璃寺の吉祥天、二月堂の日天月天、醍醐三宝院の過去因果経、及び正倉院御物樹下美人等を参考したるなり云々と善哉言や、作家にして即ちこの抱負あり以て画面に臨む。渾然一灑必らず其真を發揮し得べき歟。

この画ハ氏が衝立にとて描かんとせし其半隻にして且つ未成品なれば、

藤島武二「天平の面影」に見る箏篋について

平 出 実乃里

はじめに

明治時代は、欧化政策にともなう万国博覧会への積極的参加、また輸出を視野に入れた殖産興業政策のもとで、欧米が急激に身近になる時代であり、美術界も新たな時代へと向かった。一方でいわゆる「歴史画」のジャンルでは、国粹主義を背景として日本神話を題材とした作品が生まれ、また日本の古代をテーマにした絵画作品も制作される。そうした中で、とくに明治三〇年代には、日本画・洋画に共通して「天平時代」を画題にした作品が相次いで発表される。下村観山「光明皇后」（一八九七年）、和田英作「くものおこなひ」（一九〇五年）、といった作品がよく知られるが、日本画・洋画を問わず、明治美術界に「天平ブーム」が起きたといっても過言ではなからう。

関連作品の中で、最も話題を呼び、高い評価を得た作品のひとつとして、明治三五年（一九〇二）、藤島武二が第七回白馬会展に出品した「天平の面影」（図1）をあげることができる。

本作品についてはすでに多くの研究の蓄積がある。とくに中田裕子氏の^①詳細にわたる分析的研究は、本作品の理解に重要な情報を提供する優れた業績であり、また植野健造氏による、藤島が属した白馬会に注目した詳細な考察も参照

すべき研究として挙げられる。

本稿では、これらの研究に導かれつつ、近代美術における「天平」の受容というべき側面に焦点を当てながら、当時の画家たちの天平への憧憬や志向といったものが、どのような時代背景によって生まれるのかを探る前段階として、藤島の「天平の面影」にスポットをあてて若干の考察を行いたい。

一、藤島武二の天平回顧と「天平の面影」

藤島が明治三五年（一九〇二）、第七回白馬会展覧会に出品した「天平の面影」は、当初「天平時代の婦人図」という題であったが、のちに改題し現在の名称になったという。

画面は縦長で、中央にやや左を向いた女性が薄紫色の花を咲かせる桐の木の下に佇んでいる。天平時代を髣髴とさせる衣装に身を包み、身体の半分ほどの大きさの「箏篋」を抱えている。背景上部は金地であり、下部に建物の基壇を描くことで、背景を二分する。縦に桐の木が伸び、頭部で枝が斜めに横切り、そして箏篋の弦の平行線と、全てが明快な構成の中に、女性像が見事な存在感をもって描かれている。

箏篋はもちろんのこと、樹下美人の構図など、いかにも「天平時代」にイン

- (36) 「東寺百合文書」ぬ函一三。
- (37) 『続日本紀』天平九年四月戊午条「常陸・上総・下総・武蔵・上野・下野等六国騎兵惣一千人」、天平十二年九月己酉条「大將軍東人等言。豊前国京都郡大領外從七位上楮田勢麻呂、將兵五百騎（中略）来、帰官軍」、宝龜元年八月乙未条「差、近江国兵二百騎」、守「衛朝廷」など。これらは差発数で、総数はさらに多い可能性がある。
- (38) 秋田優「岬馬の生態―都井岬の野生馬たち」『宮崎県文化講座研究紀要』四〇、二〇一三年。
- (39) 日本馬事協会が在来馬の各保存団体からの報告値により集計する「日本在来馬の飼養頭数の推移」によると、一九七五、八〇、八五、二〇一七年の頭数は一九七五年の六〇頭が最少で、その後は一二頭を最多とし、概ね八〇―一二〇の間で増減している（同会ホームページを、二〇一九年一月一八日に閲覧）。
- (40) 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・渋川市『平成二六年度調査遺跡発表会金井東裏遺跡と渋川市の古墳時代』（発表会資料）。
- (41) 佐野隆「発掘された平安時代の牧」（山梨県立博物館編『甲斐の黒駒―歴史を動かした馬たち―』二〇一四年）の「図1 小笠原牧と関連遺跡」。図中に示される関連遺跡名は上ノ原遺跡、上原遺跡、浅尾原Ⅵ遺跡、梅之木遺跡、永井原Ⅴ遺跡、下大内遺跡、寺前遺跡。
- (42) 豊島牧については、拙著「右馬寮領摂津国豊島牧と勝尾寺結界」（『文化財字報』三六、二〇一八年）で放牧地の推定地についての卑見を提示している。
- (43) 『平安遺文』一卷三〇七・三三二・三三四頁。
- (44) 『平安遺文』一卷三〇七頁では「仲」に「伴力」との注を付すが、国立公文書館デジタルアーカイブで同文書の画像を閲覧したところ、明らかに「仲」である。
- (45) 中臣朝臣大嶋が「粟原寺露盤銘」に「仲臣朝臣大嶋」と記される例（『寧楽遺文』下巻九六八頁）がある。木簡でも地名や人名の表記で仲・中の通用が見られる。
- (46) 「他田日奉部直神護」（『大日本古文書』三卷一五〇頁）が、二条大路木簡で「他田神護」（『平城京木簡』三卷四五・一三番）と記されている事例など。

本研究はJSPS科研費JP一八K〇〇九七九の助成を受けたものである。

以下、養老令については令の編目のみで表記し、かつ言及する条文は大宝令と同内容であるとの判断の上で論じる。

- (10) 「国飼馬」の表記は「御」の脱字であろう。Aの「諸国所貢繫飼御馬」の表記も異例で、『延喜式』の他の条文では、諸国所貢繫飼馬は御馬と記されない。ただ、このAは条文自体に問題がある。左右馬寮式二一条では「凡車駕巡幸鈴印駄、用繫飼強壯者充之」と規定されているのである。天皇御璽の重要性を考慮すれば、勅旨牧から進上され馬寮で繫飼される御馬を用いるとする左右馬寮式の規定の方が妥当である。Aは、「御」の有無に留まらず、条文そのものに混乱を含むようである。

- (11) 佐藤健太郎「四月駒牽の基礎的考察」『日本古代の牧と馬政官司』塙書房、二〇一六年（初発表二〇〇五年）。

- (12) 『続日本紀』天平宝字二年三月辛巳条。

- (13) 佐藤注11論文。

- (14) 『扶桑略記』天武九年七月条。『続日本紀』天平宝字元年五月乙卯条。

- (15) 『日本三代実録』元慶六年二月二日条に禁野として久世郡美豆野が見える。宇治川・桂川合流地点付近に京都市伏見区淀美豆町の地名がある。牧の範囲は不明だが、同地を含む近隣に展開していたものと考えられる。

- (16) 『狩野家本類聚三代格』巻四「大同三年正月二五日格」。

- (17) 『続日本紀』天平神護元年二月甲子条。

- (18) 弘仁三年二月八日格（『類聚三代格』巻一八 国飼并牧馬牛事）所引神護景雲二年正月二八日格によると、内厩寮が信濃国の勅旨牧に置かれた牧主当の解を受けている。

- (19) 森公章「王臣家と馬」（史聚会編『奈良平安時代史の諸相』高科書店、一九九七年）で論じられるように、長屋王邸木簡からは、その馬司に馬産地である信濃・甲斐・上野の人の上番が知られ、彼らが馬ももたらしていたと推測される。また、木上御馬司と記す木簡もあり、大和国広瀬郡に馬を保有していたことが知られる。馬司や木上御馬司は長屋王の母の御名部内親王か妻の吉備内親王（元明天皇の同父母姉と娘）の財産である可能性もあり、本主は特定できないものの、それらの木簡は、皇族或いは王族が畿外の牧と、都近郊の厩舎または牧を持っていたことを示している。

- (20) 拙稿「古代国家における馬の利用と牧の変遷」『史林』七四・四、一九九一年。

- (21) 鷲森注8論文。

- (22) 『東大寺要録』別当章。

- (22) 『延喜式』左右右馬寮式一条。

- (23) 川尻秋生「院と東国（副題略）」『古代東国史の基礎的研究』塙書房、二〇〇三年（初発表一九九四年）。佐藤健太郎「駒牽の貢上数と焼印に関する一考察（副題略）」注11書籍（初発表二〇〇五年）。

- (24) 『西宮記』五卷等。

- (25) 小泉俊夫「宇陀榛原の古代牧について」『橿原考古学研究所論集』一〇、一九八八年。

- (26) 倉本一宏「戦争の日本史2 壬申の乱」吉川弘文館、二〇〇七年。

- (27) 橋本初子「大和国松牧荘の相伝文書」『古文書研究』一二、一九七八年。伊藤寿和「大和国における古代の農地開発と条里制に関する基礎的研究」『日本女子大学紀要 文学部』四三、一九九三年。以下、伊藤の説は当論文による。

- (28) 『類聚三代格』巻一六 山野藪沢江河池沼事。

- (29) 『大日本古文書 家わけ 東大寺文書之十』八号の一連の文書。薦生牧については、康保元年（九六四）に立券されたことが分かる。立券をめぐる経緯や両牧の四至については黒田日出男「板蠅仙 薦生牧と四至」（『日本中世開発史の研究』校倉書房、一九八四年）で論じられている。

- (30) 「東寺百合文書」ツ函一一二（「東寺百合文書」の写真は京都府立京都学・歴史館、東寺百合文書WEBで閲覧）。

- (31) 「東寺百合文書」ツ函一〇一。

- (32) 「東寺百合文書」ツ函一〇七。

- (33) 『榛原町史』一九五九年。

- (34) 二〇一八年二月九日の現地踏査で西からこの峠を越えた際に、地元の方から伺ったところによると、峠東側に老人ホームが建設された際になだらかだった東斜面が崖状に削られて通り抜けられなくなったが、昔は松牧方面の住人がこの峠を越えて榛原駅に出ていたとのことであった。

- (35) 小字の調査については、宇陀市教育委員会事務局文化財課が土地台帳から作成した小字一覧表（地番・小字名）を同課にて閲覧させていただき、同市地籍調査課や、奈良地方法務局桜井支局内の受託事業者である株式会社総合人材センターにて、小字に対応する地番の位置を求める作業を行った。

おわりに

以上、八世紀の大和国宇陀郡に存在した宇太御厩と宇陀肥伊牧について個別に考察し、いずれも生産牧場ではなく、馬を備蓄して都に供給するタイプの牧で、かつ皇室領もしくは皇族の牧であったと推測した。両者の関係を示す直接的な史料は無いが、その共通性から、両者が一致する可能性もあると考えている。最後に桧牧荘と同じ上県二条に属する給理里の、一〇世紀初頭の土地の伝領文書について触れておきたい。⁽⁴³⁾ それらの署名部分からは在地の多様な氏族名を抽出できるが、その中で、延喜九年（九〇九）正月一五日「民安占子家地処分状」に、証刀祢として、同族の民首以外に、吉野連今貞、仲宿祢乙枚⁽⁴⁴⁾が連署している。吉野連は、吉野郡に限らず大和国内に分布が見られるが、ここにも在地の吉野連が見られるのであり、それは皇族の牧を管理した擬郡司の吉野百嶋を想起させる。

仲宿祢については、『続日本後紀』承和二年（八三五）四月庚寅条に大和人正七位上仲丸子連乙成らが仲宿祢に改賜姓されたとある。また、『新撰姓氏録』大和国神別に仲丸子が挙げられ、もとは無姓の可能性もある。これと、二条大路木簡⁽²⁾に見られる持丁の中大麻呂との類似が気になるところである。仲と中とは通用する場合がある⁽⁴⁵⁾し、日常的な業務に関わる記名では複姓部分や姓が省略されることもあり、それを勘案すれば、中大麻呂は宇陀に縁のある仲宿祢の先祖の仲丸子氏に該当する可能性がある。桧牧一帯の地に吉野連や仲丸子が併存することは、偶然の一致として看過しがたい。

皇族関係の牧という共通性を見出せる宇陀肥伊牧と宇太御厩、吉野百嶋解の牧とは、桧牧一帯に居住していた在地有力者の氏族名を媒介とすることで、同一の牧として重ねられる可能性があるように思うが、いかがであろうか。未だ

憶説の域を出ないが、今後の検討課題として提示しておきたい。

注

- (1) 奈良国立文化財研究所編『平城京長屋王邸跡―左京二条二坊・三条三坊発掘調査報告―本文編』吉川弘文館、一九九六年。奈良文化財研究所編『平城京木簡三 二条大路木簡一』吉川弘文館、二〇〇六年。同『平城宮発掘調査出土木簡概報』二二・二四・二九・三三。
- (2) 木簡釈文の記号は注1書籍の凡例に準拠。出典の「城二二・二二」は『平城宮発掘調査出土木簡概報』二二の二二頁を表す。
- (3) 「中大麻呂」について、『平城宮発掘調査出土木簡概報』二二では「中□大麻呂」と釈されているが、奈良文化財研究所にて写真を閲覧させていただいたところ、中と大の間に少しスペースは空くが墨痕は確認されず、「中大麻呂」と釈読して良いと判断した。
- (4) 注1『平城京長屋王邸跡―左京二条二坊・三条三坊発掘調査報告―本文編』。渡辺晃宏『平城京一三〇〇年「全検証」(副題略)』柏書房、二〇一〇年。
- (5) 吉川真司『天皇の歴史 二 聖武天皇と仏都平城京』講談社、二〇一一年。
- (6) 「我」は『新撰字鏡』に「五歌反我蘿字波支、すなわち音が「ガ」、訓が「がらうはき」とある(京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本新撰字鏡(増訂版)』臨川書店、一九六七年)。「和名類聚抄」には「薺蒿」の説明の中に「一名我蒿(我音鵝、和名於八木)」「作羹食之」とある(中田祝夫解説『和名類聚抄 元和三年古活字版二十卷本』勉誠社、一九七八年)。詳しくは分からないが、「がらうはき」「おはき」と読み、「我蒿」の語にも用いられていることから、食用にあてられる植物だったらしい。『大漢和辞典』(大修館)では我につのよもぎ、きつねあざみの語彙説明があり、増淵法之編『日本中国植物名比較対照辞典』(東方書店、一九八八年)は、キツネヨモギを全草を解毒、腫れもの、清熱に用いる薬草としているが、古代にも当てはまるかは不明である。
- (7) 西山良平「家牒・家符・家使者」『日本史研究』二二六、一九八〇年。山口英男「八・九世紀の牧について」『史学雑誌』九五・一、一九八六年。
- (8) 鷲森浩幸「奈良時代の牧と馬の貢上(副題略)」『奈良学研究』一五、二〇一三年。
- (9) 養老職員令七〇条、既牧令一〇条、一二条より、官牧が国司所管であることが分かる。

以上は八世紀の事例ではないが、生産牧場には広大な放牧地が必要であることを理解できる。大和国に何箇所の官牧が置かれたのかは不明であるが、国策として軍団騎馬の生産を課される以上、それぞれに十分な規模が求められたに相違なく、狭小な宇陀肥伊牧は生産牧場たる官牧に相応しくない。このことから、それは他地域から移入されてきた良馬を備蓄し、都に供給するための公的な牧と考えるのが至当であろう。

軍馬は兵士が飼育することになっているから（厩牧令二三条）、備蓄用の公的な牧であれば、国飼御馬の牧か、延喜式制の左右馬寮所管の近都牧に相当する牧、皇室領が想起されるが、前二者の存在には懐疑的である。国飼御馬の飼育方法は、『延喜式』主税式上一七八条（前掲B）の秣米の規定より厩飼であることがわかる。前掲の宝龜三年五月二二日格所引勅で「国飼御馬、設為機速」とされることから、瞬時に鞍を置き駆動できる状態で飼育すべきであったことが読み取れる。供給方法を示す史料は無いが、論理的に考えるなら、国司が奉仕する国飼御馬は、国司所管の官牧がある時代には、そこから選りすぐりの良馬を充当するのが理に適う。他に正税を用いた購入も想定できるが、いずれにせよ欠けた分だけを補充すれば良いのであるから、賦課数以上を備蓄する牧を営む必要はない。

近都牧は、京進された諸国所貢繫飼馬牛を放牧し、必要に応じて平安京に進上する六カ所の牧（摂津国鳥養牧、豊島牧、為奈野牧、近江国甲賀牧、丹波国胡麻牧、播磨国垂水牧）であるが（左右馬寮式五〇条）、八世紀にその存在を示す史料はない。抑も職員令左右馬寮条の職掌に牧は含まれず、律令選定当初に、馬寮所属の近都牧の設置は想定されていないらしい。一方、『続日本紀』天平四年（七三二）八月壬辰条に「常進公牧繫飼牛馬」が見えるので、大宝令施行当初より諸国の官牧から馬牛が進上されていたことは推測できる。それでは、当面都で使用されない諸国所貢繫飼馬牛は、どこに置かれていたのであ

うか。その可能性が高いのは畿内近国の官牧であると考ええる。各地の官牧から進上される馬牛を近畿の官牧で預かることに、大きな支障は無からう。

いつしか左右馬寮に所属する近都牧が成立するが、そこから馬を牽進させる際、寮が直接行使する鳥養牧と豊島牧以外は、馬寮から国衙に移送って牧子が馬を進上することになっていた（左右馬寮式二〇条）。おそらくは国衙に移送るのが本来の手続で、現地での運用は国司が当たるものだったと考える。憶測にかかるが、近都牧は、当該国の官牧に由来するものではなかろうか。八世紀には、諸国所貢繫飼馬牛を畿内近国の官牧で預かっていたが、延暦十一年（七九二）の軍団廃止を受けた軍用馬生産停止により、都近くの官牧は諸国所貢繫飼馬牛を預かることを専業とする近都牧へと転化したのではないかと考えるのである。遺称地からおおよその位置を推測できる近都牧を見ると、宇陀肥伊牧よりも広い平坦地を持つ地域に立地する。例えば、豊島牧は約二〇〇ヘクタールの段丘上を放牧地として復元可能であるし、鳥養牧は広大な淀川氾濫原に摂津市鳥飼の地名が遺り、為奈野牧も猪名川氾濫原のいずれかに比定されよう。胡麻牧は京都府丹南市日吉町胡麻の胡麻川流域と推定される。東西を山に挟まれ淀川や猪名川ほどの広範囲の氾濫原は持たないが、それでも桧牧よりはるかに平地に富む。近都牧として利用したのがその全域であるとは限らないが、広い牧地を設定しうる地にあるのは、それが本来は生産も行う官牧だったことに由来するのではないだろうか。

このような理由により、八世紀段階には国飼御馬や進上された諸国所貢繫飼馬牛を放牧する専用の牧は存在していなかったと考える。そして、宇陀肥伊牧は皇室領もしくは皇族の牧とするのが妥当であると考ええる。

の右岸の丘陵地北斜面を中心に広がっている。牧ヶ谷の東に隣接する小字馬神も興味深い。急勾配が多い小字牧ヶ谷が放牧地とは考えられないが、北に接する宇陀川右岸に狭小な氾濫原がある。現在は宇陀川右岸の車道や子供のより公園に伴う造成により、本来の地形がわかりづらくなっているが、山裾の勾配が不十分な箇所補助的に柵を設け、東西を遮断すれば、北は川が馬の逸脱を阻む地形である。平坦地は後代の土地利用に影響されて地名が変わり、丘陵部のみ牧の地名が遺ったのかも知れない。遺存地名及び地形より、当該箇所は再開発後にも営まれた放牧地の有力候補地と考える。

廃止前の宇陀肥伊牧の放牧地はもう少し広範であったかも知れないが、広大な放牧地の復元は難しい。内牧川や内牧川と合流後の宇陀川氾濫原に平坦地を見出せるものの、内牧川の左岸や高井以南の上流域では枝状の谷が発達して馬の目視が難しく、谷奥から山への進入や峠越えによる馬の散逸を防ぎにくいという難点がある。宇陀川に合流する荷阪川左岸の高星の緩斜面も利用は可能かと思うが、面積は限られている。桧牧一帯のいくつかの平坦地を合わせても馬を囲い込んで管理するのに適した広大な放牧地は想定できない。

(2) 宇陀肥伊牧の性格

宇陀肥伊牧が公的な牧であることは既に述べたところであるが、放牧地の狭さから、軍馬生産のための官牧とは考えにくい。令の規定では、官牧は専ら軍馬の供給を目的としており（厩牧令一三条）、軍団には軍用騎馬の他、兵士一〇人に対して駄馬六疋を充てることになっている（軍防令二、五条）。実際に数字通りの駄馬が充当されたかは疑問であるが、軍用騎馬だけでも各国に数百疋規模が用意されていたことが『続日本紀』の記事から推測され、故障、老化、死亡分の補充に、相当数の需要があったと考えられる。

迂遠ではあるが生産牧場の規模を試算してみよう。去勢を行わない前近代の

日本では、牝馬を軍馬に充てられず、仮に毎年一〇疋の牡馬を生産するなら牝馬も併せて二〇疋の産駒が必要となる。種牡馬は少数でも良いが、繁殖牝馬の正数の六割が牧に課せられる毎年の生産数であるから（厩牧令六条）、二〇疋生産するためには三四疋の繁殖牝馬が必要になる。『延喜式』左右馬寮式一条では御馬の調教は四歳からであり、仮にこれを適用するなら、牧には種牡馬若干と繁殖牝馬三四疋、一〇四歳半ばの子馬八〇疋がいることになる。これは機械的な計算であり、実際には死損したり、軍用騎馬としての資質を欠く馬もあるから、一〇〇疋余りを保有していても、獲得される軍用騎馬はわずかととなる。資質に富む軍用騎馬を生産するためには膨大な馬数を保有しなければならないことを推測できよう。

馬を完全放牧するには、一疋あたりどれほどの面積が必要なのであろうか。参考として、ほぼ自然繁殖に任せている宮崎県都井岬の御崎馬の場合を見てみよう。二〇一三年の状況で、約五五〇ヘクタール（草地一〇〇、森林四五〇）に約九〇頭が生息しており、毎年一〇一五頭が生まれ、生後一年までに三〇四割が死亡することである。⁽³⁸⁾過去四〇年余りの統計では約八〇一〇頭の幅で増減しており、それがその面積での生息数の限界なのであろう。概ね一〇〇頭を平均値とするなら、一頭あたりの面積は五、五ヘクタール、そのうち草地が一ヘクタールとなる。御崎馬のデータより、生産のための牧には広大な敷地が必要ことがわかる。

発掘調査によって解明されつつある北関東の古代の生産牧場推定地からもそのことは明らかである。例えば、子馬の足跡も検出され古墳時代の生産牧場とされる群馬県渋川市の白井・吹屋遺跡群では、約六〇〇ヘクタールが放牧地推定範囲とされている。⁽⁴⁰⁾平安時代の後院牧である小笠原牧に比定される山梨県北杜市の茅ヶ岳西麓では、牧関連の遺物や遺構が、南北約五キロメートル、東西約三キロメートルにわたる範囲で検出されている。⁽⁴¹⁾

わらず（地図参照）、馬の入手であれ、施設の破壊であれ、宇陀肥伊牧への言及はない。このような史料の不在からも、宇陀肥伊牧の成立が壬申の乱以前に遡る可能性は低いように思う。

宇陀肥伊牧廃止の後、一〇世紀に私領としての桧牧地が史上に現れる。橋本初子や伊藤寿和らが明らかにしているように、桧牧地は延長元年（九二三）以前に在地の畠清理が再開発し、紆余曲折を経て一二世紀末に七条院（藤原殖子、高倉天皇妃）領桧牧荘となった後、領家職が貞治元年（一三三二）に東寺のものとなり、関連文書が東寺に遺されることになる。牧を含んだ桧牧の名称は、単なる遺称ではなく、山川藪沢の占有を禁じた延暦一七年二月八日格を念頭に置いた命名であろう。同格では、占有禁止の例外として墓地と牧とを挙げ、かつ馬不在の牧は収還対象とする。桧牧地開発の頃には、まだこれが法として認識されており、旧牧の地形を利用した放牧地を一部に含めることで、それを根拠に周辺の土地を囲い込んだものと推測する。類例として、伊賀国名張郡の薦生牧、同郡と大和国山辺郡にまたがる広瀬牧が挙げられる。応和二年（九六二）に藤原朝成が伝領した両牧は、いずれも狭小な牧地に若干の開墾地と、広大な栗林や野地などを伴う所領であった。⁽²⁹⁾このような理由で、宇陀肥伊牧の放牧地は、一部にせよ桧牧荘の領域内に踏襲されたと考える。

桧牧荘の所在地と四至は、「貞元三年（九七八）三月一日 県某桧牧地充行状案」に「一 処字桧牧地 四至 限東焼峯 限南嶺峯 限西北曾口 限北下津尾、在于陀郡上県二条肥伊里」とある。⁽³⁰⁾条里呼称を持つものの、桧牧一带には、内牧川やこれと合流した宇陀川沿いの狭窄な平坦地が散在するだけで、整然とした条里制を敷くには無理がある。年月日不詳「大和国桧牧庄田地坪付注文」⁽³¹⁾には坪番号が記されるが、伊藤が指摘するように、開発可能な耕作地に適宜番号を付したというようなことであつたと考えざるを得ない。注文の坪付の総面積は八町ほどにすぎず、「承暦四年（一〇八〇）八月二九日 僧□覚大和国桧牧庄売券」⁽³²⁾に「桧牧庄田地山

林等」とあるように、山林を含み込む所領であつた。

四至の特定は困難である。桧牧荘は上県二条肥伊里に所在するとされるが、約六〇〇メートル四方の里に、東南二方の峯を限りとする荘域を収める復元はできない。同里に所在したのは荘所や耕作地などで、山林部が肥伊里の外にも展開していたのだろう。北限の下津尾については、室生湖水没集落の下戸に比定する説がある。⁽³³⁾現榛原桧牧の北東隅にあたるが、下津尾に該当するかは判断材料に乏しく、比定説の紹介にとどめる。西限の比曾口は荘外への出入り口かと思われる。宇陀川沿いに西に出る他、内牧川左岸の西谷の奥の小字井足峠付近は桧牧から西の井足へのかつての峠道で、⁽³⁴⁾西谷川沿いのいずれかの地点は西限の比曾口候補地の一つとなろう。⁽³⁵⁾東と南の峯は見当がつかない。

これまでに伊藤が踏査して桧牧荘や牧に関わる小字名を収集し、牧が口・木戸口・牧ヶ谷・馬神・馬ヶ背・内牧・馬屋谷などを紹介している。そして、「大和国桧牧庄田地坪付注文」の坪名「櫛生」が初生と音通で、内牧川支流の初生川付近にあたる可能性を指摘している。西谷川上流の小規模な開墾地に初生谷、隣接地に初生山の小字名があるが、内牧川から一〇〇メートル以上離れており、坪付案の櫛生に該当する可能性は低いと思う。いずれにしても、初生は内牧川左岸の地名である。

この他、「応長元年一〇月二七日 大和国桧牧庄定使職所務得分注文」⁽³⁶⁾に庄家代官給恩地として記される「枋窪政所敷」と普通の枋久保・枋久保の小字名が、内牧川右岸のなだらかな傾斜地に見出され、今後、荘園施設の痕跡の検出が期待される。初生・枋久保の小字名は、現桧牧が桧牧荘の地と重なることを補強する。そして両地名が内牧川両岸に分かれることは、桧牧荘が内牧川下流域両岸にまたがることを示し、この現榛原桧牧一帯のどこかに放牧地があつたものと推測される。

伊藤が収集した小字に牧ヶ谷があるが、これは内牧川・宇陀川合流地点近く



- ・ 国土地理院の2万5千分の1地形図（初瀬 2008年）に加筆。
- ・ □は小字名。
- ・ 小字牧ヶ谷の範囲を実線で示したが、測量に基づかない字切図によるため、おおよその範囲である。また、南から東南の範囲は調査を漏らしたが、放牧地の検討に支障はない。
- ・ →は壬申の乱において大海人軍が進軍したと想定される経路。地形の制約により、古代道もこれと大きく外れることはないと考ええる。

厩寮¹⁷の管下にあつたらしいが、内厩寮設置と御牧成立が同時とは限らない。平安時代の皇族のように、奈良時代の皇族も国家財政とは別枠の所領を持ち、私領としての牧を持っていたことは想像に難くない¹⁹。そして、八世紀前半は本来即位を予定していない元明・元正の二代が続いた時期であつた。彼女らが一皇族として所有していた財産が、即位により国政の一般財源に組み入れられたとは考えにくく、それらは国家財政とは別枠で保有されたと考えるのが穏当である。牧についても然りで、それが御牧の発生に繋がるのではないだろうか。

その御牧の管理に預かつたのは、馬寮監ではないかと考える。馬寮監は、『続日本紀』和銅四年（七一）一二月壬寅条の従五位下葛木王（橘諸兄）の補任記事を初見とする令外官である。かつて、拙稿において馬寮監を平城京造営に関わる官職と論じたことがあるが、これを改め、鷲森浩幸による、天皇家の家産管理の必要性から設置された官職との説を是としたい。慶雲四年（七〇七）七月の元明即位に加えて、和銅三年の平城遷都により諸官司が多忙を極める中で、元明の側近である県犬養三千代の息子である葛木王が、天皇の家産の一角をなす御牧の管理にあてられたのだと考える。

天平宝字八年（七六四）一〇月、草壁系最後の天皇として、また武力で対立勢力を減ぼし絶大な王権を手にした天皇として称徳が重祚する。彼女の下には伝領や押収により莫大な個人財産が集積され、御牧・御馬も馬寮監一人での管理が難しくなっていたのではないだろうか。天平宝字三年の坂上犬養の在任²²を終見として馬寮監は姿を消し、称徳重祚の四ヶ月後には内厩寮が設置されるが、それは増加した御牧を確実に管理するための現実的な対応であつたと考ええる。

内厩寮が設置され、いつしか左右馬寮は主馬寮として統合されるが、大同三年に両寮は廃止され、左右馬寮が復活する。後院牧などの編入により御牧はさらに増加し、延喜式制では三三牧から毎年二四〇疋もの御馬進上が規定され（左右馬寮式三条）、それらは馬寮の厩舎を満すほか、臣下や衛府に下賜された

りもした。一方、八世紀の御牧・御馬の運用は左右馬寮の業務とは別枠で行われ、もつと小規模であつただろう。その運用の体系として、延喜式制の左右馬寮厩舎―美豆厩―御牧の祖型となる、内御厩―宇太御厩―御牧の組み合わせを想定する。

二 宇陀肥伊牧の考察

（1）宇陀肥伊牧の廃止と再開発後の検牧

本章では、もう一つの大和の古代牧の史料について考察する。

『日本後紀』延暦一八年（七九九）七月庚午条

停²³大和国宇陀肥伊牧。以下接²⁴民居²⁵損²⁶田園²⁷上也。

（大和国宇陀肥伊牧を停む。民居に接し田園を損なふを以てなり。）

周辺地域に開発の手が入り、放牧地から逸脱した牧馬が田園を食い荒らす問題が発生していた模様で、これにより宇陀肥伊牧は廃止される。宇陀肥伊牧の史料はこれが唯一であるが、六国史に廃止記事があることから、宇陀肥伊牧が公的な牧であつたことは間違いない。また、平安時代に成立する検牧荘にその名を留めており、現宇陀市榛原検牧として地名が遺る。宇陀肥伊牧の成立を七世紀前半以前に求める説もあるが、それを証明するに足る十分な根拠はない。『日本書紀』天武元年（六七二）に詳述される壬申の乱の経緯に、宇陀肥伊牧に言及がないことも、乱以前に宇陀肥伊牧が存在していたことに疑念を抱かせる。周到な準備をして吉野を脱出した大海人皇子は、着実に従軍者や騎馬を増やしながら美濃を目指し、かつ、近江方への通報や追撃の恐れのある隠駄家と伊賀駄家は焼き払って通過している²⁸。しかし、検牧の近くを通過したにもか

『類聚三代格』卷一八、宝亀五年五月九日格

勅、供_二奉端五之節_一、国飼御馬、自今以後、宜_下付_二專知官_一貢進_上、如有_二事故_一者、差_二目已上官_一充替。

宝亀五年五月九日

(勅すらく、「端五の節に供奉する国飼御馬、自今以後、宜しく專知の官に付し貢進すべし。如し事故有らば、目已上の官を差し充て替へよ。」)

宝亀三年格では、国司の長官が国飼御馬の管理を専当すること、同五年格では、五月五日の端午節には專知官、すなわち前格で専当を命じられた長官に貢進させ、支障がある場合でも目以上に代行させることが勅で命じられている。端午節は天平宝字二年(七五八)に孝謙天皇により廃止され、宝亀年間に復活する。宝亀三年格は緊急時における軍事上の問題として国飼御馬の肥育を命じているが、軍事的活動の実績は不明である。格の日付が五月二二日であることを見れば、御馬の質的低下は、復活した端午節において露見したのであろう。

佐藤が推定するように、国飼御馬の制度は大宝令制以前に遡る可能性が高い。馬を牽き進めて御覧に入れる四月駒牽は服属儀礼に他ならず、もとは近国の国造らに課せられた義務だったものが、国司・摂津職に継承されたと考える。宝亀三年格に、天武九年(六八〇)建国の伊賀や天平宝字元年建国の和泉が列記されないことは、他国に遅れて両国が設置される以前に、国飼御馬制度が国司に引き継がれていたことを示すのではないだろうか。

国飼御馬が国衙の管理下にある以上、その飼育や物品の要求に関わる文書が平城京へ送られることはない。また、宇太御厩が貴人用の御箸竹などを平城京に進上しているのは、国飼御馬制の業務として不似合いである。これらのことから、宇太御厩や吉野百嶋が管理する牧で飼育していたのは国飼御馬ではないと判断する。

(3) 都近郊の御厩の役割

二条大路木簡の宇太御厩や吉野百嶋解の牧で飼育されていたのは、史料の遣り方や御馬の呼称から、皇族の馬であったと考えられるが、これを飼育する厩・牧はいかなる存在だったのであろうか。それらの性格を考える上で参考となるのは、『延喜式』左右馬寮式記載の山城国美豆厩である。宇太御厩と同じく厩と称される美豆厩は、厩舎だけの施設ではなく御馬を放牧する牧でもあった。

『延喜式』左右馬寮式五七条

山城国美豆厩畠十一町、野地五十町余。

右、二寮夏月簡「御馬不_レ肥者」遣飼。亦諸祭料馬、同令「放飼」。

(前略) 右、二寮夏月に御馬の肥へざる者を簡び、遣はし飼へ。亦諸祭料の馬、同じく放ち飼はしめよ。

平安京南郊の美豆厩¹⁵には、畠十一町、野地五十町余が付属し、夏瘦せした左右馬寮の御馬や、諸祭料馬が放牧された。延喜式制では、秋に東国の勅旨牧(御牧)から進上される御馬を左右馬寮の厩舎で櫪飼する(左右馬寮式一、七条)ほか、一〇〜三月には左右の各三〇疋を播磨国家島に放牧し(同四九条)、夏期には一部を美豆厩に放牧することとしており、馬寮厩舎での御馬の需給を調整できる仕組みになっていた。このような美豆厩は生産牧場ではなく、御馬を備蓄する牧であった。平城京近郊で御馬を飼育した宇太御厩や吉野百嶋管理の牧も、美豆厩と同様に、都の某厩舎への需給調整の役割を担う牧であったと考ええる。

では、御馬を生産する勅旨牧(御牧)はいつ成立したのであろうか。大同三年(八〇八)の左右馬寮再置¹⁶以前、御牧は天平神護元年(七六五)設置の内

E 左右馬寮式二七条

凡国飼御馬者、山城国六疋^{左寮}、大和国五疋^{右寮}、河内国六疋^{右寮}、摂津国十疋^{右寮}、伊勢国十疋^{左寮}、近江国十疋^{左寮}、美濃国十疋^{右寮}、丹波国五疋^{左寮}、毎年預前三五月五日節^{一差}專当国司^{一牽進}。

(凡そ国飼御馬は(中略)毎年預め五月五日節より前に專当国司を差し牽き進めよ。)

F 左右馬寮式二八条

凡青馬廿一疋、自^三十一月一日^一至^三正月七日^一、二寮半分飼^レ之^{一疋}、其料日秣米五升、大豆二升、灯油二合、奏聞請受。国飼以^三正税^一充^レ之。

(凡そ青馬廿一疋、十一月一日より正月七日に至るまで、二寮半分し之を飼^ヘに飼^ヘ、其の料は(中略)、奏聞し請ひ受けよ。国飼は正税を以て之に充てよ。)

Dで駒牽に用いられた御馬は五月五日と六日の節会で競馬や騎射に用いられることになる。Eでは五月五日節以前を進上の期限とするが、四月二八日の駒牽に用いていない馬は五月六日の競馬・騎射に出場させられず(左右馬寮式二六条)、Bの走馬を牽く夫の食料支給期間はこれに対応する。その他、A・Cでは行幸、B・Fでは青馬節会での使用が記される。国飼御馬の使用にあたり、Cでは奏聞を経て官符で当該国に下命されることが、Eでは專当国司が牽進することが規定されている。また、B・Fによると、国飼御馬の飼育・運用には当該国の正税が用いられた。このように、畿内・近国で飼育される国飼御馬は、行幸、青馬節会、四月駒牽、五月五日・六日の節会などに用いられ、その使用には奏聞により天皇が関与し、当該国が飼育の経済負担をし、專当国司

が定められていた。Fに在京日数分の飼料の規定があるなど、行事後は都に留められた様子がなく、都への恒常的な馬匹供給の役割は見出せない。

以上は延喜式制であるが、八世紀にも四月駒牽や五月五日の節会で国飼御馬が用いられていたことについては、佐藤健太郎の研究がある。⁽¹⁾『延喜式』では飼育は国衙に委ねられているが、それは八世紀にも遡ることが次の史料から読み取れる。

『類聚三代格』卷一八、宝龜三年(七七二) 五月二二日格

太政官符

応^レ專^三当国飼御馬^一官人事

右、被^三内大臣宣^一称、奉^レ勅、国飼御馬、設^三為^一機速^一。而大和、河内、摂津、山背、伊勢、近江、美濃、丹波、播磨、紀伊等諸国所^レ飼、或有^三病患^一、或有^三疲弊^一。若有^三彼事^一、必致^三闕失^一。此国司等不^レ存^三捉搦^一、怠慢所^レ致。奉公之道、豈合^レ如此。宜^下令^三長官專^一当其事、能加^三檢校^一、勿^レ令^三更然^一。自今以後、永為^三恒例^一。

宝龜三年五月廿二日

(太政官符す)

応に国飼御馬を專当すべき官人の事

右、内大臣の宣を被るに称く、「勅を奉るに、『国飼御馬、設くるは機速の為なり。而るに大和(中略)等諸国飼ふ所、或は病患有り、或は疲弊有り。若し彼の事有らば、必ず闕失を致さん。此国司等捉搦を存ぜず、怠慢し致す所なり。奉公の道、豈に此の如かるべけんや。宜しく長官をして其の事を專当せしめ、能く檢校を加へ、更に然らしむること勿かるべし。自今以後、永く恒例と為せ。』」

いる。百嶋が直接国司へ申し入れていないことは、当該牧が国司管轄の一般の官牧⁹⁾ではないことを示す。

第三項では、牧子が貧乏だから、奉仕の際に見苦しくないようにと衣服の支給を要請している。第二項にあったように、牧子は馬を牽いて牧と平城京とを往復し、都で馬の世話に従事することもあったが、それは、身だしなみが必要とする業務であつたらしい。

吉野百嶋が預かる牧と二条大路木簡の宇太御厩には、次のような共通点が見られる。

1. 平城京の近郊で御馬を飼育する、野山を敷地を含む経営体である。
2. 平城京の皇族に近い某所に文書を上進し、都での奉仕と思われる業務には、某所から飼育員の衣服の支給を受ける。

3. 平城京にある厩舎と連携して、馬の牽進・退下を行う。

以上の特徴より、吉野百嶋解の牧と宇太御厩とは同質の牧であつたことを理解しうる。

(2) 国飼御馬制との比較検討

宇太御厩や吉野百嶋解の牧で飼育される御馬は、いかなる区分の馬であろうか。法制史料上、大和で飼育される御馬には、国飼御馬があるが、それらが国飼御馬に該当するとは考えにくい。国飼御馬の特徴を確認しておこう。

平安時代の史料となるが、『延喜式』では次のように規定される。

A 太政官式 一一六条

凡行幸^レ応^レ経^レ旬者、(中略)前^二三十余日^一仰^二下諸国^一、令^レ進^二国飼御馬^一
左右馬寮。左右馬寮儲^二負^レ印馬^一用^下諸国所^レ貢繫飼。(後略)
定^レ数奏^レ之。

(凡そ行幸の応に旬を経べからば、(中略)十余日より前に諸国に仰せ下し、

国飼御馬^{左右馬寮数を定め之を奏せ}を進めしめよ。左右馬寮印を負う馬^{諸国貢ぐ所の繫飼の御馬の近牧に放す者を用いよ}を儲けよ。)

B 主税寮式上 一七八条

凡国飼馬^{秣米者}¹⁰⁾、畿内外国共起^二十月^一迄^二三月^一、正別日四升、起^二四月^一迄^二九月^一二升。其牽^二青馬^一夫者、畿内及近江、丹波起^二十二月廿五日^一、迄^二正月八日^一、人別日米一升二合、塩一勺二撮。牽^二走馬^一夫者、畿内及近江、丹波、起^二四月廿五日^一、伊勢、美濃等国起^二同月廿一日^一、迄^二五月七日^一並給^レ食。

(凡そ国飼馬の秣米は、畿内外国共に十月より起こして三月まで、正別日に四升、四月より起こして九月まで二升。(中略)走馬を牽く夫は、畿内及び近江、丹波は、四月廿五日より起こし、伊勢、美濃等の国は同月廿一日より起こして、五月七日まで並びに食を給へ。)

C 左右馬寮式 二〇条

凡諸節及行幸^レ用^二国飼御馬^一者、斟^二量須数^一奏聞、乃下^二官符^一令^レ進。(後略)

(凡そ諸節及び行幸の応に国飼御馬を用ゐるべからば、須ゐる数を斟量して奏聞し、乃ち官符を下し進めしめよ。)

D 左右馬寮式 二四条

四月廿八日御監駒式^{小月廿七日}

右、当日早朝、調^二列^一檻飼御馬八十疋、国飼卅一疋。(後略)

(四月廿八日御監駒式^{小月廿七日})

右、当日早朝、檻飼御馬八十疋、国飼卅一疋を調へ列べよ。)

御厩とは同時併存し、平城京もしくは平城宮内の厩舎と宇陀郡の牧として連携して運用されていたと考える。宇太御厩が進上する藪は内御厩など都の厩舎の御馬の飼料であろうし、宇陀と都との間で馬の牽進・退下も行われたはずである。

平城京近郊の古代牧については、正倉院文書として、もう一点の一次史料が遺されている。先学により取り上げられてきた文書であるが、これも併せて検討し、情報抽出を試みる。

「天平勝宝六年（七五四）十一月一日 知牧事吉野百嶋解」（『大日本古文書』四卷二二頁）

（前欠）

一 牧裏事

右、依去八月三日大風雨、河水高漲、河辺竹葉被「漂仆埋」。但以外竹原并野山之草甚好盛。

一 牧子六人^{長一人 丁五人}事

右、率「常件人」、令「見」妨止「并上」下御馬「以」次祇承上、望請、於国司詔「給牒書」、而如「常止」役、欲「得」驅使「」。

一 給「衣服」而欲「令」仕奉「事」

右、件牧子等、為「貧乏民」、其無「衣服」率仕奉醜。

以前事条、具録如「件」、仍謹請「裁」。以謹解。

天平勝宝六年十一月十一日

知牧事擬少領外従八位下吉野百嶋

（一）牧裏の事

右、去ぬる八月三日の大風雨に依り、河水高漲し、河辺の竹葉漂ひ

仆れ埋めらる。但し以外の竹原並びに野山の草は甚だ好盛なり。

一 牧子六人^{長一人 丁五人}の事

右、常に件人を率ゐ、妨止を見、並びに御馬を上下し、次を以て祇承せしむ。望み請ふらくは、国司に牒書を詔へ給ひて、常の如く役を止め、驅使することを得むと欲す。

一 衣服を給はりて仕へ奉らしむるを欲する事

右、件の牧子等、貧乏の民たる為、其の衣服無く、率ゐて仕へ奉るに醜し。

以前の事条、具に録すること件のごとし、仍て謹みて裁きを請ふ。以て謹みて解す。）

牧の名は記されないが、御馬を上下させていることより、平城京から遠からぬ位置にあったことが読み取れ、かつ大和国吉野郡に由緒を持つ吉野氏の擬少領が知牧事を務めていることから、大和国内の牧と考えて良いだろう。文書は前欠で宛先部分は遺らない。正倉院文書に含まれることから、これを紫微中台宛とする説や、紫微大忠を兼ねる馬寮監賀茂角足宛の文書が正倉院文書に入り込んだものとする説がある。宛先の特定は難しいが、皇室と関わる写経事業の史料群である正倉院文書に含まれることから、平城京の皇室に近い部署、或いは人物に送られた文書であることは認め得る。

解の三項目からは次のことがわかる。まず第一項からは、当該牧が氾濫原、竹原、野山などで構成されていたことがわかる。

第二項からは、牧子が六人おり、内訳は長が一人、丁が五人であることがわかる。百嶋は日常的に彼らを率いて馬の散逸を防いだり、平城京への御馬の往復に同伴し、都での祇承にも当たっていた。そして、解の宛先から国司へ牧子らの役の免除を申し入れてもらい、継続して牧で驅使させて欲しいと要請して

③・宇多御厩解 □□

・葛八束 □□

(城二九・一二)

④ 参向 内御厩

(城三〇・一〇)

⑤・伊賀万呂受衣十領

「犬万呂受衣十八 「猪手受衣廿 「麻□

・「黒猪受衣十四領 辛人受衣十五

東御厩六人 西□□人 龍万呂

(城二四・一八)

⑥

□□「□ 御馬養衣事 前□□□
不用

(城二四・二三)

長屋王の変後、その邸宅跡に営まれた施設については、これを光明皇后の皇后宮とする説や、それに疑問を呈する見解があり、特定が難しいが、皇室に關わる施設ということでは衆目が一致している。出土木簡で厩が御厩と表記されているのも、皇族所領として相応しい。

①②③によれば、宇太御厩からは我、御箸の竹、葛などが貢進されており、野地が付属していたことが推測される。②に見られる布勢大田は宇太御厩の出納管理者で、持丁中大麻呂のように、平城宮への運搬などの雑用を担う人員も所属していたのであろう。ここに牧の文字は見えないが、ある程度の面積を持っていたであろう宇太御厩は放牧地を備えた厩舎であったと考える。

御厩と記す木簡には④の内御厩と記すものもある。郡名の宇陀を宇太・宇多と表記するように、これも郡名の宇智の異表記と読めないこともないが、その可能性は低い。④は内御厩に参向するという内容と解せるが、参向の語は、出頭する先、人を派遣する先に敬意を示す表現であり、平城京から宇智郡にある御厩に下向することを指すのに相応しくない。これは、都にある内御厩への参向を記した木簡と解するのが妥当と考える。

⑤には東御厩が見え、恐らく欠損部には対になる西御厩が記載されていたのであろう。少なくとも東に六人、西に数人の人員がいたことが分かり、これらも都の厩舎と考える。⑤からは御厩への衣服支給の有無を判断できないが、⑥より御厩に祇候する御馬飼育員へ支給される場合があったことが分かる。東西の御厩が内御厩と並列関係にあったのか、内御厩の中で東西に組織が分かれていたのかはどちらとも言えず、東西の御厩と内御厩との関係性は分からない。内御厩については、別の遺構からも木簡出土例がある。

平城宮左京二坊坊間大路西側溝

⑦

八口内御厩 全□

(城二一・二三)

平城宮東院地区東南隅近くで東面大垣を暗渠で抜けた東西溝(SD八四三六)が二坊坊間大路西側溝(SD五七八〇)に合流した付近から出土し、伴出木簡の年紀は天平一五、一八、二〇年に限られると報告されている。宮内からの流下の可能性が高い⑦は、二条大路木簡の内御厩が、藤原麻呂家ではなく皇室と關わる施設であるとの評価を補強する。

時間幅の狭い史料群である二条大路木簡に記される内・東・西の御厩と宇太

大和国宇陀郡の古代牧二題

吉川 敏子

はじめに

古代の支配者層にとって、都に近在する畿内の牧は重要な意味を持ったはずである。しかし、関連史料は乏しく、名の知られる牧があっても、史料に一度書きとめられるのみで、その遺跡や実態を知ることが難しい。本稿では、大和国宇陀郡に存在した奈良時代の牧についての二つの史料について考察する。一つは二条大路木簡に記された宇太御廐、もう一つは『日本後紀』延暦一八年（七九九）七月庚午条の廃止の記事によって存在を知ることができる、宇陀肥伊牧である。いずれも断片的な史料であるが、前者については共通の特徴を持つ牧の史料がもう一点残されており、それと突き合わせて運営の一端を考察することが可能である。後者については、平安時代に檢牧の名で私領として再開発された後の史料群と遺称地があり、立地・環境を窺うことができる。これらのかすかな手懸かりから、些かなりとも大和の古代牧の実態に接近していくことができるのではないかと考える。

一 二条大路木簡の宇太御廐

（1）宇陀御廐の特徴

二条大路木簡は、平城京左京三条二坊一・二・七・八坪の長屋王邸跡の施設及び大路を挟んだ北側の推定藤原麻呂邸に関わるとされる、天平中頃の大量の木簡群で、皇族や官司に関わる木簡も含まれる。^①その中に、御廐や御馬と記した次のような木簡がある。^②

平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構（南）

①・□太御廐進上 莪九斗 御箸竹一把

・天平九年三月十四日布勢□

（城二二一一二）

②

・宇太御廐 進□□ 持丁中大麻呂

・天平九年□月十三日布勢大田

（城二二一一二）^③

平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構（北）